楽園追放
Expelled from Paradise
RAKUEN TSUIHO
mission.0
手代木正太郎
Illustration
齋藤将嗣
原作：ニトロプラス／東映アニメーション
GAGAGA

小学館ｅＢｏｏｋｓ

楽園追放　mission.0

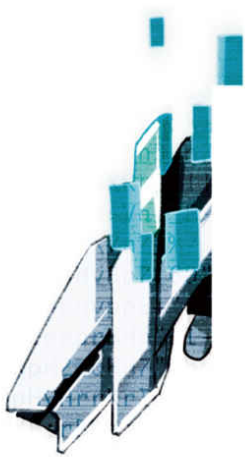
手代木正太郎
原作　ニトロプラス／東映アニメーション
イラスト　齋藤将嗣

RAKUEN TSUIHO

楽園追放

Expelled from Paradise

mission.0



「……で、私たちは、どうしてここにいるんですか？」
アンジェラは、数時間前のことを思い出した。
中央保安局の高官たちのもとを出た後、ふいにメットが「では、行くぞ」と颯爽と告げたのである。さっそく捜査に乗り出すのだと思ったアンジェラは、やる気満々でメットに従った。
が、連れて来られたのがここである。
「今日は君の歓迎会だと言っているだろう」
メット・マルティネス
Met Martinez
アンジェラ・バルザック
Angela Balzac

「やっ……」と、つい声を漏らしてしまったアンジェラへ、ワームが無数の脚で覆われた顔面を寄せて来た。獲物を味見し、嬲るように、アンジェラの臍から胸にかけてをうぞうぞと蠢く細かい脚の群れが嘗め上げようとしている。

アンジェラの内に湧いた悍ましさと恐怖心は、撃退プログラムの構築すら忘れさせ、可憐な悲鳴を上げさせた。

「我々の最重要事項は？」
「メモリ」
「正解だ」

目次

プロローグ《宇宙ステーション内の楽園》
第一章《感染知性体》
第二章《コラッツの密林》
第三章《圧縮された海》
第四章《トイフェル》
エピローグ《ノアノア》

楽園追放

Expelled from Paradise

mission.0

contents

プロローグ
《宇宙ステーション内の楽園》
011

第一章
《感染知性体》
016

第二章
《コラッツの密林》
130

第三章
《圧縮された海》
190

第四章
《トイフェル》
254

エピローグ
《ノアノア》
304

RAKUEN TSUIHO

Expelled from Paradise

ナノハザードにより廃墟と化した地球。
人類の多くは地上を捨て、
データとなって電脳世界・ディーヴァで暮らすようになっていた。

登場人物
character

アンジェラ・バルザック
Angela Balzac

中央保安局システム保安要員　4等官
エージェント・コード ZQ875456
新人捜査官にして本作の主人公。

メット・マルティネス
Met Martínez

中央保安局システム保安要員　3等官
エージェント・コード ZQ875328
地上から特例としてディーヴァに移住した選りすぐりの捜査官。

プロローグ《宇宙ステーション内の楽園》

見上げれば満天の星。

見下ろせば薄青い広大な地球の大気圏。

天の川が、きらきらと瞬またたき、うっとりするような美観を作り出している。

その美しさとは裏腹に、ここは危険と隣り合わせの死の空間。マイナス二百七十度の凍いてついた世界。その世界を飛行する二機の武骨な人工物がある。

彼は、その一機に搭乗していた。

球形を展開して巨大な人型にしたようなその機体は、ディーヴァ市民が現実リアルワールドにて活動する際に使用する機動外骨格スーツ〈アーハン〉であった。

調査員である彼は、初めてのミッションに少々不安を感じ、背後を振り返る。

そこに天に輝くどの天体よりも眩まばゆく、光を放つ巨大な建造物を確認した。

電脳都市〈ディーヴァ〉。

大気圏外に浮遊するこの巨大都市は地球人類の偉大な英知の結晶といっていいだろう。およそ百二十年前に地球を襲おそった大だい災さい厄やくナノハザードを逃のがれるため作成された電脳都市。都市内には無数の仮想空間が作成され、地球人類の九十八％が肉体を捨て、人格と遺伝子データを都市にインストールし、情報生命体となって居住している。

彼もまた肉体を持たないディーヴァ市民の一人だ。現在は、ディーヴァ外ミッションのため、自身のパーソナルデータをアーハンにインストールさせている。

『何をぼやぼやしている。行くぞ』

いささか物もの怖おじしていた彼の心情を察したのか、前を行くアーハンより通信が入った。
『失礼しました』
彼は内心の気弱を感じさせないよう、努めて事務的な声で返信し、アーハンを推進させる。
先行する先輩調査員は、臆おくする気けぶりを毛ほども見せていない。
しばし進むと前方に、きらきらと輝く一群が確認された。
廃棄された人工衛星、惑星間移動船の切り捨てロケットなどの宇スペ宙ースゴミデブリ群である。
二体のアーハンは、そのデブリ群の内へと入り込んでいった。
もはや活動しない人工衛星、建造途中で放棄されたコロニー、違法に廃棄された資材運搬用の廃ロケットなど。そんなものの漂うこの場所は、まさに宇宙の墓場といった風ふ情ぜい。
『あった。あれだ』
前を行くアーハンから通信が入る。彼もその存在をすでに視認していた。
漂う数多あまたのデブリの中に全長五十メートルほどの大きな船体が見えている。
破損した古い宇宙ステーションであった。楕円形の本体の左右にソーラー発電機と思われる二対の羽根状の機構がついているのが特徴的である。
彼らの目的は、この宇宙ステーションの調査であった。
『推進機に損傷が見られる。おそらくなんらかの事故によって推進力を失って遭難したんだ』
先輩調査員がざっと外観を見回した印象を口にした。
『行ってみよう』
デブリを躱かわしながら宇宙ステーションへと接近する。間もなく宇宙ステーションのセラミックの外殻へと接触した。
『ここからステーション内部のメインフレームにアクセスすることは

可能でしょうか？』

　彼の問いに、先輩調査員は、やや沈黙した。数秒ほど間をおいて返信が来る。

『無理そうだな。直接、中に入れないものか』

　彼と先輩調査員はアーハンを宇宙ステーションの外殻に固定させると、船外活動用の人間大の小型アーハンに己おのれのパーソナルデータをインストールさせる。

　小型アーハンを本体から切り離し、宇宙ステーションの外殻を這はうように調べてまわった。やがてハッチを発見する。

『ここから入れそうだ』

　先輩調査員はハッチ横の非常開閉用ロック板をいじりはじめた。

　僅わずかな起動音とともに電子ロックが解除され、ハッチが上下にスライドして開く。

　彼と先輩調査員は宇宙ステーション内部に侵入した。

　入り口はエアロックになっており、入るとすぐにもう一つドアがある。ハッチが自動的に閉まっていった。閉まりきるとエアロック内に酸素が入り込み、少しずつ重力が生じてくる。

『酸エ素レ発ク生ト装ロ置ンに反重力ジャイロ……。船内の生命維持装置はまだ活きているようですね』

　やがて酸素が満たされるとともに、目の前の電子ドアが起動音を発しはじめた。

『さあて、鬼が出るか蛇じやが出るか』

　ゆっくりとドアが左右に開いていく。光―がドアの内側から漏もれ出てくる。

　強い光量に彼のセンサーが一瞬、白く染まった。肉眼ならば光に目が眩くらんだといった状態である。すぐさま、彼のセンサーは光量を補正しはじめた。そこに見えたものは……。

　ザザザァ……　ザザザァ……　ザザザァ……　ザザザァ……

　波の音。

そこに──真っ青な海が広がっていた。

彼と先輩調査員は、純白の砂浜に立っていたのである。

脚部を撫なでる冷たい感覚。打ち寄せる波が脚に触れていたのだ。

甘く香かぐわしい果実と潮の匂い。バナナの樹が生い茂る根元にハイビスカスが可か憐れんに咲き乱れていた。

燦さん々さんと輝く太陽が海面に反射しきらきらと波なみ飛沫しぶきを輝かせている。

海中に透けて見える珊さん瑚ごも、その間を縫ぬって泳ぐ原色の熱帯魚たちも宝石のようだ。爽さわやかな蒼そう天てんに白い雲が流れ、無限に続くようなエメラルド色の海うな原ばらの果てに一直線の水平線が見える。

彼も先輩調査員も言葉を失っていた。

うち捨てられた宇宙ステーションの中にあったもの──それは、南国の楽園であった。

第一章《感染知性体》

陽気なカンツォーネの歌声が聞こえてくる。

ヴェネチア風の古びたレンガ造りの建物が建ち並ぶ街であった。

一つ建物の角を曲がれば、街中に張り巡らされた水路に、いくつものゴンドラが浮かんでいるのを目にすることができる。歴史ある水の街。そんな風ふ情ぜいだ。カンツォーネを歌っているのは、ゴンドラ乗りの男であろうか？　なんとも楽しげで、そして心癒いやされる歌声である。

人々が行き交う路上には、パラソル付きのテーブルが並べられ、冷えた飲み物を飲みながら談笑する市民の姿が見られた。陽光がぽかぽかと照りつける、なんとも心ここ地ちよい日ひ和よりだった。

こんな場所を旅行してみたい。可能ならば、この街に住んでみたい。そんなことを思わせる、なんとも平和で素敵な街並みだが、これらの風景は全てデータで造られた虚構であった。

──電脳都市ディーヴァ。

ここでは、建物、飲料にピッツァ、日光や空気感。全てがデータで作られている。ボーイはＡＩ。行き交う人々も半分以上がプログラミングされた群集風景エキストラに過ぎない。

人々の座るテーブルに置かれた飲料の氷は、もう三十分も前に運ばれてきたにもかかわらず、溶ける様子を見せない。視覚、味覚、触覚を楽しませるためのプログラムの飲料なのだ。

その屋外カフェのテーブルに一人、一輪の百ゆ合りの花を思わせる可か憐れんな女性が座っていた。

年の頃は十代後半から二十代の前半ぐらい。見事なブロンドの髪をボブカットに短く切りそろえ、青い瞳は宝石のように澄んでいる。細くきりりとした眉まゆは、まだ、あどけなさを残す顔つきに凛りりしさを加えていた。すらりとした肢体に纏まとった上品な白いワイシャツ、黒いスーツスカートが娯楽用のこの公開マップにはややそぐわない堅苦しさがある。

彼女の名は、アンジェラ・バルザック。

その顔には苛いら立だちが滲にじみ出ていた。

（約束の時間をもう９５８秒も過ぎてる。なんなのあたしの先輩は？）

アンジェラは、人形のような可憐な顔に露骨なイライラを浮かべ、ブロンドの髪を逆立てせんばかりであった。

本来ならば、せっかく娯楽用の公開マップに来たのだから、ごきげんな気分でアイスコーヒーの味覚情報を楽しみたいところだが、今の彼女は到底そんな気分にはなれない。アンジェラは人と待ち合わせているのだ。それもこれから自分の先輩となる人物との待ち合わせである。

ディーヴァ中央保安局システム保安要員。保安局エージェント。

それがアンジェラの職である。中央保安局とは、ディーヴァの治安維持などを職務とする組織―すなわち警察機構ということになる。このたびシステム保安要員としての全教育プログラムを終えたアンジェラは見事、保安局エージェントとなった。

これから晴れて保安局エージェントとして、ディーヴァ内部で起こる不正アクセスやクラッキング犯罪事件などを取り締まっていくわけだが、経験のないアンジェラはしばらく先輩エージェントの下につき活動することになる。アンジェラが待ち合わせている相手とは、その先輩エージェントであった。だがいつになっても現れないのである。

アンジェラが指先で目の前の空間をちょんっと突く。そこにウィンドウが出現する。

ウィンドウには、ややパーマがかった赤毛の女性の画像が表示されていた。

睫まつ毛げの長い切れ長の瞳、厚い唇を有する口の端はは笑む直前のようにやや歪ゆがみ、奔ほん放ぽうの気けぶりを表している。細い顎あごの小さな黒子が婀あ娜だな魅力を醸かもしていた。かなりの美人である。

「メット・マルティネス三等官」

　アンジェラは、その女性の画像の下に表記された名前を口にする。今、この場所で待ち合わせている先輩エージェントの人物ファイルで、事前に送信されてきたものだ。
「地上出身者。中央保安局システム保安要員としての勤務時間は１０９５１７時間。保安局情報部の地上ミッションのオブザーバーとしての有能な働きが認められ、ディーヴァ市民に。高度な電脳戦技術。プログラミング技術とハッキング能力に優れ……」
　もう何度も読み直したファイルだが、暇つぶしに読み直してみる。
「あたしのも送られているでしょうに、わざわざこんな娯楽目的のマップで顔合わせなんて」
「おや。迷惑だったかな？」
　ふいにかかった声にアンジェラはどきりとする。
「へっ!?」
　慌ててウィンドウにタッチして最小化すると、ウィンドウの後ろで、そこに表示されていた画像と全く同じ、赤毛の女性が不敵に笑みを浮かべていた。
　待ち人、メット・マルティネス三等官である。
　男性ものの白のワイシャツに黒いズボンというラフな格好。ファイルの画像では分からなかったが、かなりの長身だ。スレンダーで筋肉質だが、胸が大きく、スポーティさとコケティッシュさを併せ持っている。そんな印象の女性であった。
「あっ、あの！　えっと、その！」
　失礼なぼやきを聞かれてしまったと、どぎまぎするアンジェラに、意味深な眼まな差ざしを送り、メットはアンジェラの正面にどすんと腰掛ける。
「すまんな。片付けておきたい仕事があり、遅れてしまった。初めましてアンジェラ・バルザック四等官。私がメット・マルティネスだ」
　はきはきとして、理知的。だが、どこか野性的なものを含んだ口調。握手を求め差し出された掌てのひらは、ピアニストのそれみたいに大きく綺き麗れいだった。アンジェラは、おずおずとその手を握り

返し「よろしくお願いします」と頭を下げる。メットは、満足げに頷うなずいた。
「アンジェラ君。君のファイルは拝見したよ。教育プログラムの評価したシステム保安要員適正率が全ジャンルＡからランク。感心するな」
「いえ……」
「本来ならファイルのデータだけを確認して、あとは事件が起こった時に現場で顔合わせというのでもいいのだが、それではいささか味気ない。これから共に仕事するのだ。一度、直接会って話をしておきたくてな。見たまえ」
　メットが周囲の風景を指し示すように両手を広げた。
「いいマップだろう。二十世紀のヴェネチアの都市風景を正確に模したこの公開マップは人気が高い。アクセス数も常に上位をキープしている」
「イヴァン・アダモフの作成したものですからね」
「詳しいね」
　詳しいもなにも一般常識である。イヴァン・アダモフは、人気のマップ・プログラマーだ。今やディーヴァ内で知らぬ者のない人物である。
「私はイヴァンのファンでね。非番の日は、彼のマップを巡るようにしている。いや、イヴァンがよく題材にする十九世紀の地球……その時代に生まれてみたかったものだね」
　メットは、何か浮かれたような様子で話を続ける。一向に用件を切り出さないので、アンジェラは少々焦じれてきた。やや強引に話に水を差してみる。

「それで、今回、ここに私を呼び出したのはなぜです？　何か理由があるんじゃないですか？」
　保安局エージェントがわざわざ貴重な時間を割さいて、自分を呼び出したのだ。何かしらの理由があるはずである。さっそく任務を伝えに来たのか。それとも新人である自分を試すための仕掛けを用意しているのか。一瞬でも気を抜くわけにはいかない。
　が、メットは、きょとんとした顔になった。
「理由？　理由ならさっき言ったじゃないか。君と話がしたかっただけだと」
「え？」
　次は、アンジェラがきょとんとする番であった。
「本当にそれだけなんですか？」
「そうだ。他に何がある」
　当然のようにそう言ったメットに、アンジェラは少し腹立たしい気持ちが湧わき上がってきた。
「話をするだけでしたら通信でも十分では？　わざわざ時間をとっていただいてこんな娯楽用マップで面会しなくともいいんじゃないですか」
　尖とがった物言いのアンジェラであったが、メットは特に気にした様子も見せない。
「直接顔を合わせて、こうやってお茶を飲む。そうせねば分からぬこともあるのだよ。アンジェラ君。あっ。アイスコーヒーをいただこうか」
　と、すぐ横を通り過ぎるＡＩのボーイに注文をする。その後、くすりと口元を綻ほころばせた。
「ここの住人には、少々馴な染じみのない考え方だと自分でも分かっているのだがね」
　ここの住人―つまりディーヴァ市民。アンジェラは目の前の先輩システム保安要員が地上出身者であったことを思い出した。
　ディーヴァ成立以後、ディーヴァへの移住を拒み、荒廃した地球上

に残った人々がいる。その子孫が未だ命脈を繋つないでいた。肉体を有する彼らは、過酷な地上の環境で原始的な生活（あくまで高度なテクノロジーを有するディーヴァを基準としてだが）を送っている。

しかしながら時にオブザーバーとしてディーヴァ情報部のミッションをサポートし、その能力を認められ、ディーヴァ市民になる地上人もいる。メットはそんな一人なのだ。

「あの……。私には縁のない場所だと思いますが、地上とはどんな場所なんですか？」

アンジェラが地上出身者に会うのは初めてである。少し興味が湧いた。

「思い出したくもない」

さらりとメットが答えた。

「水や食べ物に困ることもあった。野盗や砂嵐、クリーチャーの脅威。君は、サンドワームに追われるところを想像できるかい？　生きた心ここ地ちがしないぞ。疫えき病びように冒おかされる心配もしなければならん。みな、ひたすら生きるのに必死だ」

いずれもアンジェラにはイメージし難いものだった。情報生命体であるディーヴァ市民には、餓うえもなければ病も、老いすらもない。生命の危機などという状況はめったに訪れない。

「地上と比べればここは天国だな。メモリさえあればどんな快楽も思いのままだ。こうやって冷えたアイスコーヒーを自由に楽しむことができる」

メットはＡＩのボーイが運んできたアイスコーヒーを口へ運び、大げさな仕草で、「うむ。美う味まい」などと言ってみせる。

メモリとは、ディーヴァから市民一人一人に割り当てられた記憶容量のことである。ディーヴァ市民はこのメモリの範囲内で己おのれに必要なソフトウェアをインストールしたり、自らのパーソナルイメージを飾り立てたりできる。ディーヴァへの貢献度の高い者ほど割り当てられるメモリの容量が多く、ディーヴァ内においてメモリこそが、市民の貧富を決める基準なのだ。

　もっともディーヴァで生まれディーヴァで育ったアンジェラにとって、そんなことは当たり前であり、逆にメモリの存在しない地上での生活こそ想像し難いものである。
「私は好運だな。ディーヴァにスカウトされることができたのだから。私とともにスカウトされたオブザーバーがいたが、ディーヴァでの保障された暮らしを嘘うそだとか言って断ったらしい。全く理解できんが……まあ、地上には色々な奴やつがいる……」
　そこまでつらつらと語ると、メットはふと、アンジェラへ意味深な視線を向けてきた。
「ところでアンジェラ君。君は、システム保安要員の仕事とはなんのために行うものだと思う？」
（来た！）
　とアンジェラは身構える。やはり、ただ話がしたいなどというメットの言げんは建て前だ。アンジェラが、どれほどの覚悟をもって、この職につこうとしているのかを探ろうとしているに違いない。アンジェラは思案し、慎重に言葉を選んで回答しはじめる。
「ディーヴァの治安維持。恒久的なディーヴァの平穏と発展のために全力をもって貢献する。それがシステム保安要員の職務であると考えています」
　メットがにやりと笑った。その笑みの意味するところが理解できず、アンジェラは緊張する。
「ふむ。真ま面じ目めだな。百点満点の答えだよ。アンジェラ君」
　アンジェラは、ほっ、とする。しかし、メットはすぐに「だがね」と付け加えた。
「私と行動を共にし、ミッションに挑むのならば少々違うと言っておこう。我われ々われの目的とすることはただ一つ。なんだと思うね？」
　質問しておきながらアンジェラの答えを待たず、メットは次の一言をきっぱりと発した。
「メモリだ」

「メモリ？」
「そう。より多くのメモリを得る。そのために全力をあげて任務に臨のぞむ。組織への貢献度を上げる。他の保安局エージェントに手柄を横取りされてはならない。むしろ横取りする。事件が起こった場合、解決するのは、保安局全体でではない。私たちが解決する。そのためならば他のエージェントの足を引っ張ったっていい。そう覚えておいてくれたまえ」
　アンジェラは啞あ然ぜんとした。だが、すぐに気を取り直す。
「な、なるほど、全ては競争。出世争い。そうやってシステム保安要員は切せつ磋さ琢たく磨まし、より組織としての成熟を図っていく。そういうことですね」
　アンジェラの言を受け、メットはどこか小馬鹿にしたような顔をする。
「物分かりがよくてよろしい。だが少し間違っているね。切磋琢磨などしない。組織も成熟しなくていい。私たち。あくまで私たちだけが出世すればいいのだよ」
　アンジェラは、少々困惑し、メットの顔を見返す。メットは、一瞬鼻で笑った。
「当然だろう。他の保安要員のメモリが増えたってなんの得にもならない。むしろ割り当てられるメモリが減るかもしれないじゃないか。ちょっとでも多くのメモリを得ること。これが私と君との最重要事項だと思いたまえ。そのためには同僚を蹴け落おとせ。これが肝要だ」
　アンジェラは言葉を失った。
（どうしてそんなに……？）
　メモリを得るために他者を蹴落としてでも自分が手柄を立てる。こんなことを考える人は決して珍しくはないだろう。だが、それをこうまで明言するものだろうか。そして、こうまで明確に己おのれの理念にできるものだろうか。
　メットが、ぽん、とアンジェラの肩を叩たたいた。
「励んでくれたまえ。正直言って君に足を引っ張られたくない。逆に

君が優秀なシステム保安要員となれば、君を教育した私の株が上がる。私のメモリの増減いかんは君にかかっていると言っても過言ではない。そういうわけだ。頼んだよ」

そう言ってのけたメットの顔には不敵な笑みが浮いている。アンジェラの心は、素直に「はい。よろしくお願いします」と言えるものではなかった。

（なんなの、この人？　こんな人とうまくやっていけるのかしら……）

アンジェラは溜め息いきをついて視線をあらぬ方に投げた。その時。

メットの後ろ、五メートルほどの場所を通過してゆく人物に偶然、目がいった。

それは、金髪の女性である。

全身の画ピク素セルが粗あらく、のっぺりとした皮ひ膚ふをしている。髪も一本一本が太く、さらさらとした質感を表現しきれていない。明らかにメモリの少ない、中の下ぐらいの階級の市民であった。

この公開マップは、あらゆる階層に広く開かれているが、利用するのはほとんど富裕層に限られている。こんな階級の低い市民が、このマップに現れるのは珍しい。

ただでさえ妙なのに、さらに女性は、その物腰もまた奇妙だった。背筋を曲げ何事かぶつぶつと呟つぶやきながら地面を向き、足取り覚おぼ束つかなくとぼとぼと歩いている。恐ろしく陰いん鬱うつに見えた。

「どうかしたか？」

メットの声にアンジェラは我われに返った。

「変な市民が……」

先ほど女のいた場所を指さす。だが、妙な女は、人波に紛まぎれ、いつの間にやら姿を消していた。

「いえ。すみません。大したことではありませんでした」

ディーヴァは広く、人口も多い。少々様子のおかしい人物がいても

おかしくはない。アンジェラはその女性のことをすぐに忘れてしまった。

　メインストリートの喧けん騒そうが遠くに聞こえるこの路地は、人通りもあまりなく、深閑として落ち着いた雰囲気であった。
　その落ち着いた雰囲気にそぐわぬ華美な人物が二人。レンガの壁に背を預け、談笑するその二人の男は、これでもか、というほどメモリを費ついやした発光装飾のワイシャツの胸元を広く開け、これ見よがしにわさわさした胸毛のテクスチャをちらつかせている。
　二人とも自身のパーソナルイメージに大部分のメモリを割さいているようだが、装飾過多で悪趣味極まりない。階級的には中の上といった連中であろう。こういった連中ほど見み得えを張り、過剰にパーソナルイメージを飾り立てたがるものである。
「いやあ。とうとうテクスチャをアップデートしたんですよ。見てください。この頬ほおの質感を」
「ああ。やはりそうですか。なんだか画ピク素セル数が上がったような気がしてたんです。私も、この腕のテクスチャを変更してみたんですが、どうです？」
　随時この調子で、自分のパーソナルイメージを見せびらかし、互いに褒ほめ合っている。
　そんな二人の楽しい時間を壊す存在が路地に現れた。
　金髪の白人女性。恐ろしく画ピク素セル数が少なく、皮ひ膚ふも髪もお粗末だ。背筋を曲げ、ぶつぶつとあらぬことを呟つぶやきながら、二人の前を通り過ぎていく。男たちは露骨に嫌いやな顔をした。
「なんですか、あれは？」
　男の声はわざとらしく、女に聞かせるように大きかった。
「下層階級の方ですかねえ？　少々、このマップには不似合いじゃないでしょうかね？」
「誰でも利用できるのは、いいですが、あんなのが入ってきたんじゃ、マップのイメージダウンに繋つながるんじゃないですか？　多

少の規制も考えるべきですねえ」
　などと男二人は女に向かい、さんざん侮ぶ辱じよくの言葉を投げつけると、下げ卑びた笑いをあげる。
　ふいに女が立ち止まった。
　一瞬、その肉体にザザザとノイズが走る。と、急にどさりとその場にくずおれた。
「え？」
　男たちは、なんだか自分たちが馬鹿にしたせいで女が倒れてしまったような気がして、慌てて女に駆け寄る。女の身体からだの節々に脈動するようにノイズが走っては消え、走っては消えていた。
「ＡＩ？　バグじゃないのか？　管理者に連絡した方が……」
「このマップにこんな粗雑なＡＩが？」
　そんなことを言い合っていた時である。がばりっ、とふいに女が顔を上げた。
「なっ!?」
　異常！　女の顔いっぱいに甲こう殻かく類の脚のようなものが生じていたのである。毛の生えた硬質なそれは、一本一本がぎちぎちと音を立てながら蠢うごめいている。
「なっ、……なんだ、これ!?」
　後ずさる男たちの前で、女が操り人形めいたぎこちなさで立ち上がる。一度、ゆらりとよろめいたかと思うと、その細身の肉体をぶちやぶるように女から無数の野太い脚が飛び出した。
　がぎん、という硬い音を立てて、レンガ敷きの小路に直立したその姿は、巨大な蟹かにの脚を持つ、人間のごときものである。
「え？　えええ？　何？　何これ？」
　べりべりべり、と女の両手の中指と薬指の間が裂さけてゆき、ハサミ状に変態してゆく。
　そのハサミを、ぶんっ、と一振り。
「なっ、なんでしょ？　ねぇ。なんでしょ。これ？　ねっ。ねねね。あれ？　どうして答えないの？」

男が、横にいるはずのもう一人の男へと顔を向ける。
そこに立っていたはずの男からは―首がなくなっていた。
「うぎゃあああああ！　首っ！」
その首の所在はすぐに明らかになる。先ほど、画ピク素セル数を上げたと自慢していた綺き麗れいな頬ほおの男の首は、蟹女のハサミに挟まれていたのだ。
「こっ……ここだよ。たたっ……助け……助けてぇ……」
情報生命体である男は首だけになっても死ぬということはなかった。ハサミの圧力に顔を歪ゆがめながらも情けない声をあげ続けている。だが、それも長く続かなかった。蟹女は、男の首を自分の顔の前に近づける。女の顔面に生えた無数の脚がうぞうぞ伸びて男の首を覆おおい尽くす。
「助けっ！　たすべっ！　あべっ！　へびべっ！　ぶっ……ぶぼぼ……ぼ……ぼぼ……」
首の声は徐々に小さくなっていき、ついには消えた。首を覆っていた脚どもが引いていくと、そこにあったはずの男の首がなくなっている。食われてしまったのだ。
「うっ！　うわあああああっ！」
残された男は蟹女へと背を向け、逃げ出す。蟹女が地を蹴けって跳躍した。巨体に似合わぬ俊敏な動き。駆け去る男を軽々跳び越え、その目前にどさりと着地する。
いきなりまわり込まれたことに仰天し、男は尻もちをついた。見上げた蟹女の顔面の脚がグロテスクにわしゃわしゃと蠢く。それはさながら笑っているように男の目に映った。
「ひっ……ひひっ。たっ……助け……」
凶悪な蟹女のハサミが男へと近づいてくる。
無様に地を這はって逃げようとする男。その背中にざくりと女のハサミが突き刺さった。
痛みなどという感覚を認識するソフトを男はインストールしていない。だが、恐怖はある。だから次の悲鳴は痛みではなく恐怖から発さ

れたものであった。
「ぎゃあああああっ！」
　男は自分を構成するデータが女のハサミによりバラバラにされてゆくのを感じながら──やがて意識を失った。

　ふいに、けたたましい警告音が鳴り響いた。
　中空に真っ赤なウィンドウが出現する。そこに表示された「危険」の文字。唐突なアラートに平和だった街角は騒然となった。アンジェラとメットは素早く立ち上がり、顔を見合わせる。
　メットの飄ひよう然ぜんとした顔が鋭いものに変わっていた。
「事件だ」
「はいっ！」
　二人の足元に光が生まれる。光は、二人の体を嘗なめるように頭頂まで移動してゆき、光が移動した後、二人の服装が一変していた。
　身体からだのラインが分かるほどにぴったりとした銀色に光る全身スーツ。雄おお々しいその装束は、ディーヴァ市民に畏い怖ふと畏い敬けいの念を与えてやまぬ、保安局エージェントの制服であった。
　アンジェラは状況を確認するため、目の前の空間にタッチパネルウィンドウを立ち上げる。
　が、そんなことをするまでもなく事件の元凶と思われる存在がレンガ造りの建物と建物の間の狭い路地から雪な崩だれ出てきた。アンジェラは瞳をまん丸くする。
「何あれ!?」
　それはぶっとい蟹かにの脚を有した全裸の女性であった。女の両腕は禍まが々まがしいハサミ状に変化しており、その顔からは、おぞましくも無数の蟹の脚が生えている。蟹の脚によって磔はりつけにされた女──一見そのように見える奇怪な姿。
　醜しゆう怪かいな怪物の出現に、市民たちは、一瞬、ぽかんとした顔となる。
「なんだ？　アトラクションか？」

「それにしては、随分と悪趣味だなぁ」
　ここは、娯楽用のマップ。市民たちの反応は、悠長なものである。
　蟹女は、そんな市民たちを怪奇な顔で無機質に睥へい睨げいした。
　やがて、その中の一人に狙ねらいをつけると昆虫を思わせる異常なスピードで突進を開始する。
「え？　え？　何？　何何何何何何何っ……なにぎゃっ！」
　呆ぼう然ぜんとしていた市民の男が、ハサミによって串刺しにされた。蟹女は腐魚をつつく節足動物の残忍さで捕らえた男をつつき回し、ばらばらにしてゆく。血や臓腑のようなものを備えない市民のパーソナルイメージであるが、目を覆おおうのに十分な凄せい惨さんな光景であった。
「え？　あの人、ＡＩじゃないよね？」
「これ……何!?　ま、マジなの？」
　この時になってようやく市民たちは、これがアトラクションの類たぐいではないことを理解する。路上は一気に恐慌状態に陥おちいった。鳴りやまぬ警告音、際限なく中空に出現するアラート表示の中、市民らは、悲鳴や怒号をあげて逃げ惑う。
「ちょっ……あれ……どういうこと……？」
　アンジェラの白磁の頬ほおが青ざめる。自然、声も震ふるえていた。何が起こっているのか、さっぱり分からない。あの怪物はなんだ。どうして、あんなものが急に出現したのだ。
「かなり悪質なサイバーワームだな。あのハサミはパーソナルデータを断片化フラグメントするアプリケーションのようだ。無力化してメモリを食らっている」
　メットの声はこの異常事態の中でも驚くほど冷静であった。
「あれがワーム？　市民を襲おそってメモリを食らうワームなんて……聞いたことない……」
　通常ワームといった場合、不定形のドット絵のごときバーチャルイメージで、ソフトウェアの機能を妨げたりしながら増殖するやっかい

な害虫のようなもの。いってみれば電脳世界のゴキブリみたいなものなのだ。ここまで残忍で戦闘的なワームなど初めて目にする。

　見れば、ワームに捕まっていた市民の姿は影も形もなくなっていた。メモリを全て食らい尽くされたのであろう。ワームは、首を巡らし、次なる獲物を物色する。一人目の男が咀そ嚼しやくされているうちにほとんどの市民が退避していた。だが、逃げきれない者がまだ路上に残っている。

　ワームはそういった者たちの中の一人に爛らん々らんたる眼まなこを向けた。次の獲物を発見したのである。

　四対の脚が複雑に、だが恐ろしく素早く動いて、市民へと疾しつ駆くする。恐怖を顔いっぱいに浮かべた市民は、転げるように逃げまわる。

「助けなきゃ！」

　アンジェラは叫び、手元のウィンドウをタッチする。システム保安要員教育プログラムで学習したマニュアル通り、ワームのデータを解析アナライズし、適切な撃退プログラムを選択。だが間に合わない！　市民の背後に切迫したワームがハサミを振り上げる。アンジェラは、市民が串刺しにされる酸さん鼻びな光景を想像し、目を閉じた。が、そうはならなかった。

　ばちんっ！　と、ワームのハサミが市民に届くその直前、電流に触れるがごとく弾かれる。

　市民とワームとの間に光壁が出現していた。赤々と燃え上がるように発光するその光壁は、悪マ性ルソウフエトアの侵攻を阻はばむ防衛プログラムである。

（誰が!?）

　アンジェラが驚きを顔に表したのも束の間。防衛プログラムを起動させた人物は、彼女の真隣りに颯さつ爽そうと佇ちよ立りつしていたのである。深紅の髪をはためかせ、凛りん然ぜんとワームへ右手を向けるその女性は、いうまでもなくアンジェラの先輩システム保安要員、メットであった。

きっ、と切れ長の双そう眸ぼうをワームへと向け、毅き然ぜんとした一声。
「エージェント・コードZQ875328メット・マルティネス。これよりマップ・ナンバーV01201に出現したサイバーワームの駆除作業を開始する」
メットの周囲に無数のウィンドウやアイコンが瞬時にして浮かび上がる。
次の瞬間、メットは地を蹴けって疾駆した。倍速再生するがごとき人間離れした超高速。
夥おびただしいウィンドウを衛星のごとく纏まとわせながら疾走するメットは、さながら北欧神話の戦いくさ乙女おとめを思わせる美しくも精せい悍かんな勇姿。駆けながらも、メットは、視線テクノロジーのみのハンズフリーでウィンドウにコマンドを入力する。ワームの解析アナライズ。撃退プログラムの構築。セットアップ。複数のタスクをほぼ待ち時間なしで実行していった。
「すごい……」
アンジェラが感嘆の吐息を漏もらした頃、メットはすでにワームの目前に近接していた。
光壁に無謀な攻撃を繰り返していたワームは己おのれの身近に接近してきた赤髪の美女を認識し、首をねじ向ける。新たな獲物の発見とばかりにハサミを振り上げ、一いつ閃せん。
だが、メットのスピードは、ワームのそれを遥はるかに凌りょう駕がしていた。瞬間移動するがごとくハサミを回避すると、そのままワームの死角へと回り込んでいる。
「終わりだ」
冷徹かつどこか楽しむがごとき一声とともにメットは指先をワームの背中へと向けた。
指先に撃退プログラムのウィンドウが多重に出現する。それらは、一発の光弾となってメットの指先から発射され、ワームへと直撃する。暫ざん時じ、ワームが痙けい攣れんしたかと見えたあと、その巨

体が、ぶわっ、と膨ふくれ上がり、光の粒子となって爆発するように砕け散った。

「駆除完了」
　そう簡潔に告げたメットの周囲には未だ光の粒子が蛍火のごとく舞っている。
　が、やがてそれらも一つ二つと空間に溶解し、マップを混乱に陥れたワームの痕こん跡せきは、跡形もなく消えてなくなった。

　澄み渡る蒼そう天てんの下、ヨーロッパ教会建築を思わせる荘そう厳ごんな門が聳そびえている。
　見る者を威圧してやまないその巨大なオブジェクトは、中央保安局の玄関口。
　門を潜くぐれば眼下に地球の青い大気の映像が広がり、さながら地上を監視する超越者の宮殿といった趣おもむきであった。その仮想的風景に、中空に浮くようなブリッジがかかっている。長いそのブリッジを歩む者は神に謁えつ見けんするがごとき厳げん粛しゆくな心持ちにならざるを得ない。実際このブリッジの先にはシステム保安要員にとって神に等しい権力をもつ者たちが待ち構えているのだった。
　ブリッジの突き当たりの演台、中央保安局のブリーフィング空間。
　そこに今、アンジェラとメットは立っていた。
　彼女たちの前には、巨大な神像のごとき者たちが三体、圧倒的な存在感で聳え立っている。
　正面の一体は、さながらオリンポスの神々を思わせるギリシャ彫刻のごとき存在。左方には、インド神話に登場する象ぞう頭とう人じん身しんの神ガネーシャのごとき存在。右方には、仏門の守護者たる金こん剛ごう力りき士しを模した筋きん骨こつ隆りゅう々りゅうたる存在。
　異い貌ぼうの外見を有するその神秘的な存在は、中央保安局の三人の高官である。
「メット・マルティネス三等官。迅速なワームの駆除、見事であった。一名の市民が犠牲になったものの、被害は最小に抑えられたものと我われ々われは評価している」

メットを労ねぎらったギリシャ高官の声は、ＡＩとの対話かと疑うほど起伏の少ない感情に乏しいものであったが、同時にどこか高圧的なものも帯びている。

「お褒ほめの言葉、恐きよう悦えつです」

緊張に身を竦すくませるアンジェラの前でメットは三人の高官に悠然と向かい綺き麗れいにお辞儀をした。

「これでワームによる被害は五件目、犠牲者は十五人となった」

なんとなく口にしたガネーシャ高官の言葉にアンジェラは目を見開いた。

「五件目……!?」

つい声をあげてしまったが、高官たちの威圧的な静寂に気け圧おされて、すぐに押し黙る。

アンジェラが驚いたのも無理はない。あの市民を襲おそって食らう化ばけ物ものじみたワームの出現が、初めてではなく、すでに五回目だというのだ。そんなものが出現していたなど初耳だったし、あんな化物が市民を襲っていたのなら一度ぐらい耳にしていてもよさそうなものである。

「アンジェラ・バルザック四等官。君は任務についたばかりだったね」

金こん剛ごう力りき士し高官がアンジェラに呼びかけた。

「は、はい」

「君が人食いワームのことを知ったのが初めてなのは当然だ。我々中央保安局は今までこのワームの存在を秘ひ匿とくしてきたのだから」

アンジェラはまたもや耳を疑った。人を食らうワームが出没していることを中央保安局は市民に知らせていなかったということである。

「なぜ、そんな大事なことを隠して……」

「アンジェラ君」

メットがアンジェラに声をかける。高官の代わりに説明しようというのだ。

「恒久的な平和の約束されたディーヴァ内に人を食らうワームが出現

していると知れたらどうなるか考えてみたまえ。市民は恐慌状態になり、余計な混乱を招きかねない。そのため、この事件は隠おん密みつ裏りに処理されるよう通達がなされていたのだよ」

それを聞いて、なるほどと思う半面、釈然としないものも感じた。ワームの存在を知らせていれば市民の自衛意識が高まり、犠牲者は十五人にもならなかったのではなかろうか。

そんなアンジェラの考えを読んだかのようにガネーシャ高官が言う。

「我われ々われのワームに対する認識が甘かったのは認めざるを得ない。当初、ここまでワーム事件が長引くとは考えていなかったのだ。今後、市民への情報公開も視野に入れている」

今後──という高官の言葉。ワームは出現し続け、市民を襲おそい続ける。そう読んでいるのだ。

「……あのワームはいったいなんなのでしょうか……」

アンジェラがおずおずと高官に質問する。金剛力士高官が答えた。

「我々もまだ把は握あくしきれていない。いずこから現れ、なにゆえに市民を襲うのか。また何者によってなんの目的で作成されたのか。全て、まだ謎なぞのままだ。ただ我々はこのワームをディーヴァ内の不穏分子によるテロ行為であると推測する」

「不穏分子による……テロ……」

思いの外ほか大きな話にアンジェラは、息を呑のんだ。

「市民を襲い、メモリを奪うというワームの悪質性。到底、愉快犯による享楽的犯罪とは思えない。ディーヴァの体制になんらかの翻ほん意いを抱いている者が綿密な計画性をもってワームを作成し、発信したと見るべきだろう。発信者を摘発せぬ限り、ワームは出現し続けるに違いあるまい。一刻も早いワームの根絶と、発信者の摘発を我々は望んでいる」

初任務にして、大きな任務。アンジェラは、緊張に息を呑んだ。

「アンジェラ・バルザック四等官」

ふいに名を呼ばれ、アンジェラは、ぴんと背筋を伸ばす。

「はっ！」
「君は今回が初任務だったな。君のシステム保安要員適性試験の成績は耳にしている。君には大いに期待している。存分に励みたまえ」
　ギリシャ高官の思いも寄らない言葉にアンジェラは緊張から一転、胸の熱くなる思いがする。
「はっ、はい！」
　アンジェラは勇ましく挨あい拶さつを返した。

「……で、私たちは、どうしてここにいるんですか？」
　アンジェラは、グラスを、ぎゅっ、と握りしめ、メットへとジトーッとした視線を送った。
　メットは青く発光するカクテルの入ったグラスを悠然と口に運んでいる。カクテルグラスを抓つまむように持つ仕草は、腹立たしいほど様になっていた。ノンアルコール飲料をちびちび嘗なめるように飲んでいるアンジェラとは雲うん泥でいの差としか言いようのない「大人の女」を感じさせる。
「どうして？　君は、私の話を聞いていなかったのかい？」
「いや、聞いてましたけど……」
　アンジェラは、口先を尖とがらせ、また、ちびちびとグラスを嘗める。本当に無駄に炭酸が多い。もうちょっと刺激プログラムを弱めに作ってもよさそうなものである。味も濃くて甘すぎる。
「聞いていたならもっと楽しそうに飲んだらどうだ。今日は君の歓迎会だと言っているだろう」
　アンジェラは、数時間前のことを思い出した。
　中央保安局の高官たちのもとを出た後、ふいにメットが「では、行くぞ」と颯さつ爽そうと告げたのである。さっそく捜査に乗り出すのだと思ったアンジェラは、やる気満々でメットに従った。
　が、連れてこられたのがここである。
　ぽつりぽつりとダウンライトの灯ともる薄暗いバー。テーブルとカウンターには、たくさんの市民たちが腰掛け、思い思いにアルコール

を飲んだり、煙草たばこをふかしたりして談笑している。
　肩にタトゥーのテクスチャをつけている者、犬の耳や尻尾しつぽを生はやした半動物的なパーソナルイメージをもつ者など、どこかいかがわしい連中が多い。
　店内には、煙草の煙が立ち込め、市民たちの話し合う声も喧やかましい。どっ、と耳みみ障ざわりな笑い声が聞こえるたびにアンジェラは、綺き麗れいな眉まゆを顰ひそめさせていた。
「歓迎会ならヴェネチア風のマップでしていただきましたが……」
　アンジェラは、どこか抗議するような色を含め言う。
「あれは、顔合わせだ。歓迎会ではないぞ」
　メットは、何食わぬ顔で、グラスを空けると、さっそくメニューの表示されたタッチパネルウィンドウを呼び出し、次のドリンクを選択する。瞬時に新しいグラスが、卓上に出現した。
「歓迎会なんて、していただかなくてもいいと私は思っているのですが」
「何を言う。地上では、新人が来たら飲むものだと相場が決まっているぞ。君もそんなガキ臭いものばかり飲んでいないでアルコールの入ったものを頼んだらどうだ」
「いえ。仕事中ですから」
　ガキ臭いという言葉に少々むっとしてアンジェラが断る。
　もっともアルコール飲料といっても、実際にアルコールが入っているわけではない。飲んだ者の感覚にバーチャルな酩めい酊てい感かんを体験させるプログラムが組み込まれているだけだ。二日酔いなど絶対にしないし、望めばすぐさま酔いを消し去ることもできる。
　だからといって非番でもないのに、アルコールを飲むのがいいことのわけがない。
　アンジェラは正直苛いら立だっていた。一刻も早いワーム出現の原因究明を中央保安局の高官に命じられたのである。本来ならば、すぐにでも調査を開始したいところだ。
「あの。いつまでここにいるんですか？」

アンジェラは、少々非難がましくそう言った。問われ、メットは一瞬黙する。

メットの顔から笑みが消え、どきりとするぐらい真剣なものに変わった。

「確かにな。そろそろだな」

言ってメットが、すっくと立ち上がる。酔いなど微み塵じんも見られなかった。手元に何やらウィンドウを呼び出し、その内容を確認する。その表情の変化にアンジェラは、はっ、とする。

アンジェラは、颯さつ爽そうとワームを倒してのけたメットの姿を思い出した。自分が手間取っている間にメットは素晴らしい手際で撃退プログラムを立ち上げ、ワームを駆除した。ベテランエージェントの本領を垣かい間ま見みた瞬間であった。今、こうやって娯楽用のコンテンツで不ふ真ま面じ目めそうにしていても、仕事となれば切り替えるものなのである。

アンジェラが感心したのも束の間。次にメットの言った言葉がこれである。

「河か岸しを変えるぞ」

アンジェラは一気に失望した。

「おい。君。どうしたんだ。随分とつまらなそうじゃないか」

アンジェラの歓迎会はすでに三次会目になっていた。

二次会は中華風レストラン。そして今は、イタリア風のバーである。人が多いという点では同じだが、このバーは皆静かに飲食を楽しんでいるため少しはマシだった。マシだったが……。

アンジェラの顔つきはかなり憮ぶ然ぜんとしたものになっていた。もうアンジェラは、メットとは対面せず、そっぽを向き、ドリンクも頼まずにタッチパネルをいじっていた。

「さっきから何をやってるんだ。地上では先輩の酒に後輩がつきあうのは礼儀だったぞ」

酔いに、やや目元を紅潮させたメットは赤ワインのグラスを傾けな

がら言った。
　この女、前に地上のことなんて思い出したくもない、なんて言っていたわりには、やたら地上地上と口にする。それが妙に癪しやくにさわってきた。
「私の所有する電脳戦関連のソフトウェアをアップグレードしているんです」
　アンジェラの口調は答える時間も惜しいといった態度丸出しだった。
　メットは、からかうような笑いをあげる。
「本っ当に、真ま面じ目めだな。この間のワーム戦で何もできなかったことをまだ悔いているのかい？　それとも中央保安局の高官に期待しているなんて言われたものだから張り切っているのかな？」
　アンジェラは、むっ、としたようにメットを振り返る。
「いつワームが出現するか分からないんです。装備の強化は急務だと思いますが」
「そう膨ふくれるな。君の初期設定デフオルトで、あのワームに対処できなかったのもしかたがないことさ。あんな攻撃的なサイバーワームなどディーヴァ史上初めて出現したからな」
「ですがメット。あなたはあのワームを見事に処理してみせました。システム保安要員が皆、あれだけの技術をもっているならば私も悠長にはしていられません」
　メットが、はっはっはっと大笑いした。何がおかしい、とアンジェラは顔を顰しかめる。
「気にするな。中央保安局も君に期待していると言っていただろう。焦あせることはない。試験結果から導き出された君の電脳戦ポテンシャルはシステム保安要員の中でもすでに群を抜いている。別に君がシステム保安要員の中で劣っているわけではない。ただ……」
　そこでメットの顔に意地悪げな色が浮かんだ。
「私が優秀すぎるだけなのだよ」
　胸を張って、さらに大きく笑ってみせた。

（くそっ！）
　アンジェラのウィンドウをタッチする手が自然乱暴なものへと変わっていった。
「くっくっく……。本当に君は真面目だ。いや、いいことだ」
　メットはまだおかしくてしかたがないといったふうに言う。
「そんなに真面目で君はいったいどうしたいのだ？」
「どう……って。何がです」
　もうメットの言葉は鬱うつ陶とうしいだけで、まともに答える気にはなれない。
「君はなんのためにそんなに真面目になっている？」
「真面目になるのは、当たり前です。仕事なんですから」
「違う違う」
　メットは小馬鹿にしたように首を振った。
「なぜそう仕事に真面目になるのかと聞いているんだ。なぜシステム保安要員になどなった？」
「なぜ……って、それは、私に適性があると認められたからです。理由などありません」
　気がついた時には、システム保安要員を目指していた。アンジェラという自我が誕生し、精神年齢が赤子から児童になった時点で、すでに適性を認められていたのである。それは名誉なことであり、それに逆らう理由など何一つない。職務に懸命になるのは当然だ。
「じゃあ聞こうか。君は晴れてシステム保安要員となった。だがその先は？」
「その先？　職務に従事し、優秀な成績を残し……」
「昇級していくわけだ。いやはや、ご立派だ。一点の曇りもない。だが、その先は？」
「そ、その先？」
　アンジェラは苛いら立だちを強くさせた。
「その先なんてありません。ただディーヴァの治安維持と発展に努めるだけです」

言いきったアンジェラにメットは、薄ら笑いを浮かべ「なるほどねぇ」と呟つぶやいた。
「つまり君は、適性を認められたから、言われるままにシステム保安要員になり、そして言われるままに働き続ける。目的もなく永遠に、というわけか」
どこか、からかうような物言いにアンジェラはむっとする。
「いけないっていうんですか？」
「いいや。いけないなんてことはない。それでいい。目的なんてものを君は持たなくていい」
ふいに、メットがアンジェラの瞳を真っ直すぐ覗のぞき込んできた。口元には、うっすらと笑みが浮いていたが、メットの赤みがかった瞳の奥には、何か真剣な色が火のように灯ともっている。
その真剣味に、アンジェラは、先ほどまでの苛立ちが揺らいでしまった。変わってなんだか怖いような、引き込まれてしまうような感覚を覚える。
「私についてこい。目的も信念もいらない。君は君のまま私とともに歩むんだ。君を……」
メットがアンジェラの手を取った。自分の手を包み込むメットの大きな掌てのひらの思いの外ほか強い力にアンジェラはどきりとした。
「楽園へ連れていってやろう」
決然とした言葉。アンジェラは、不覚にも聞き惚ほれてしまった。胸がどきどきと動どう悸きする。
どうしよう、とアンジェラが思った時、ふいに二人の顔の横に、ふっ、とウィンドウが出現した。中央保安局からの通信ウィンドウである。
『K00135においてワーム出現。システム保安要員は、直ただちに現場に急行すること』
音声が、簡潔にそう告げる。
「ワーム!?」
アンジェラがメットの手を振りほどき立ち上がる。

メットは手元にウィンドウを出現させた。それを覗き込み、こう呟く。
「K00135マップか……。そうか、そっちだったか。だが、これで明らかになった……」
「何してるんですか！　行きましょう！」
アンジェラが急せかすと、メットは立ち上がり、頷うなずいた。

二人が到着した時には、すでにワームは駆除された後だった。
ワームが出現したというこのマップは東洋風の木材建築の建ち並ぶ、日本の京都を思わせる造りとなっている。現場となった料亭風の建物の前に二、三人の保安局エージェントがおり、何やらウィンドウを呼び出し、調査している。完全に出遅れた形になってしまった。
取りあえず二人は、現場となった料亭の中に入ってみることにする。
障しよう子じが破れ、折れた柱や梁はりの木片が散乱していた。ワームの暴れた跡だろう。その生々しさにアンジェラは以前目にしたワームの恐ろしげな姿を思い出し、薄ら寒い思いがした。
一番奥の座敷に足を踏み入れた時、アンジェラは目を見張る。
「何これ……？」
座敷内は実に不思議な状況になっていた。敷き詰められた座敷が途中から曖あい昧まいな形になり、三角形の面に変化している。そしてその面は複雑に絡まり合い、うねり、常に変化していた。
それは―波だった。非構造グリットで構成された海の波だったのである。
座敷の奥の壁から波が出現し、畳の上に打ち寄せている。打ち寄せては返し、打ち寄せては返す、それはまるで浜辺のようだ。
奇妙な風景に呆あつ気けにとられていたせいで気づくのが遅れたが、座敷内には二人のエージェントがいる。この状況を記録しているようだ。
「ワームがこれを作ったのか？」

　メットがエージェントの一人に尋ねる。
「そのようだ。ワームはこの座敷にいた市民を食らった後、そのメモリを利用してこんなものを作りはじめていたらしい。我われ々われがここに到着した頃には、すでにできていた」
「……なるほどねぇ」
　言うとメットは、もう興味を失くしたように座敷を出ていった。アンジェラもそれに従う。
「あれはいったいなんでしょう？　ワームはどうしてあんなものを作っていたんでしょうか？」
　足早に座敷を出ていったメットの長身に追いつき、アンジェラは見上げるように尋ねた。
「さてな。だが、ああいうものを作成するのがワームの目的なのかもしれん」
「あれを作るのが目的？」
「ワームは市民を襲おそってそのメモリを強奪している。その凶暴性にばかり目が行くが、そもそもの目的は別にあるのかもな」
　二人は料亭の外へと出ていた。メットが何やらウィンドウを呼び出し、眺めはじめた。無言でじっとウィンドウを見つめているメットに、アンジェラは手持ち無ぶ沙さ汰たになって聞いた。
「これからどうします？」
　これで、すでにワーム事件は六件目。そのたびに市民が犠牲になっている。一刻も早くワーム事件を解決せねば、という思いが新人のアンジェラにも湧わいてきていた。
「ああ……うん。そうだな」
　メットはウィンドウを見つめたまま、しばし考え込む。
「ここだな。ここに行くか」
　ウィンドウに表示された一覧の中から一つを選択し、そんなふうに言った。

　メットとアンジェラがやってきたのは、夜の歓楽街風のマップだっ

た。
　たくさんの市民が行き交い、路上は人で混雑している。その中をメットは馴なれた足取りですいすいと進んでいた。アンジェラは、その長身を見失わないようにするので必死である。
（なんで、こんなところに来たんだろう……）
　アンジェラはこのマップに来た理由をまだ聞かされていない。
（まさか……とは思うけど……）
　アンジェラは嫌いやな予感がする。
（でも、まさか。事件のあった直後だっていうのに、そんなわけないわよね……）
　アンジェラは嫌な予感を拭ぬぐいきれず、足を速めてメットへと追いついた。
「あのメット。……どうして、このマップに来たんですか？」
「どうしてって……飲み直すためだろう」
　アンジェラは絶句した。まさか、とは思っていたが、本当にそうだったとは。
（いくらなんでも、こんなに不ふ真ま面じ目めな人だったなんて……）
　ふつふつとした怒りが湧わき上がってきた。
　ふいに立ち止まったアンジェラを不思議そうにメットが振り返る。
「何をしている？　歓迎会が途中になっていただろう。いい店がある。そこへ行こう」
　呑のん気きなその言葉にアンジェラの怒りが爆発した。
「あっ、あなたという人は！」
　アンジェラのあげた叫びに、周囲の市民たちが一瞬立ち止まる。だが、他者にあまり関心を示すことのないディーヴァ市民たちは、すぐに興味を失い、通り過ぎていく。
「いったいどうした？　何を怒っている」
　メットがアンジェラの肩に手を置こうとする。が、アンジェラはその手を振り払った。

「また市民が犠牲になったんですよ！　どうして悠長にしていられるんですか！」
　メットはアンジェラが何を言っているのか分からないというふうに首を傾かしげた。
「悠長もなにもワームがどこに現れるのか分からないんだ。焦あせったところでしかたがないだろう」
「やれることはいくらでもあるはずです！　あなたの言っていたことは嘘うそだったのですか!?」
「言っていたこと？」
「より多くのメモリを得るために全力をあげて任務に臨のぞむ。そう言ってたじゃないですか。でもあなたのしていることは、娯楽用マップで酒を飲むことばかり。現場への到着は遅れ、ワームは駆除された後。もっと早く辿たどりつけていれば、市民の犠牲だって少なくて済んだはずです！」
「何を言う。私たちは保安局から連絡を受けて即座に現場へ向かったじゃないか」
　それはそうだ。そんなことはわかっている。
　だが、ワーム出現の情報を受けるまでただ無む為いに遊び歩いていたのも事実。そしてそんなメットにのうのうと従っていた自分が許せない。
「もういいです！　もうあなたにはついていけません！　私は私一人で捜査します！」
　アンジェラは、そう言い捨て、くるりと向きを変え、すたすたと歩きだした。
　背後から「おい君。待ちたまえよ」というメットの声が聞こえるが、知ったことではない。
　声が聞こえなくなるまでずんずんと進んでいく。絶対に後ろなんて振り向いてやる気はない。
　しばらく進んだ後、ようやくアンジェラは後ろを振り返った。人々の雑踏があるばかりで、もうメットの姿は見えなくなっている。追っ

てくるような気配もない。
（どうせ、どこかに飲みに行ったんでしょ）
　そんなひねた考えが浮かんだ。が、すぐに思い直す。
（あたし、ちょっとガキくさかったかな）
　感情的になり先輩に怒りをぶつけ、一人で捜査するとか啖たん呵かをきってしまった。
　じゃあ実際、一人で何を捜査しようかとなると特にやれることを思いつけない。
（これからどうしよう……）
　夜の繁華街の雑踏の中、アンジェラは途方に暮れてしまった。
　だからといって今さらメットの元に戻る気にもなれない。とにかくワームの情報を見直してみよう、と思い、アンジェラは、道の端へと移動し、ウィンドウを開こうとした。その時。
　どさり、と目の前を歩いていた人物が倒れた。
「え？」
　アンジェラはウィンドウを消して、その人物に駆け寄る。
　茶色い髪の男性であった。男性は、ううっと呻うめいて立ち上がろうとする。
「どうしたの？」
　アンジェラが声をかけると男性は、虚うつろな瞳を向ける。
「……大丈夫だ。ちょっと……転んでしまっただけだ……」
　そう、ぼそぼそと言うが、男性の顔は真っ青で、とても大丈夫なようには見えない。
「何かパーソナルデータに不調があるのかもしれない。人を呼びましょうか？」
　優しく聞いたが、男は鬱うつ陶とうしげに腕を振り回した。
「いい！　いいって言っているだろう！　俺は行かなきゃならないんだっ！」
「行く？　どこへ？　予定があるの？」
「呼んでいる……楽園が……集合せよ……呼ばれている。行かなけれ

ば……ノア・ノアの……」
　意味不明の言葉をぽつぽつと口にすると、男は立ち上がり、覚おぼ束つかない足取りで歩みはじめた。
「送るわよ」
　そう言ったが、男はもうすっかりアンジェラを無視している。アンジェラは、放っておこうかとも思ったが、なんだか気になってしまい、男のすぐ後をついていくことにした。
　男は、よたよたと歩きながら何度も転んだ。そのたびにアンジェラが駆け寄ったが、男はアンジェラの親切を迷惑そうにするばかりだった。
　やがて男は大通りを外れ、路地の方へと入っていく。
（どこに行くつもりなの？）
　何か不審なものを感じてきた。
　路地の奥は街灯の明かりもなく、闇に包まれている。その闇の奥へ奥へと男は進んでゆく。
　しばし進んだ時、ふと、男が立ち止まった。
（何？　着いたの？）
　ザザザァ……ザザザァ……　ザザザァ……ザザザァ……
　音が聞こえてくる。それは波の音だった。路地裏の闇の底から波の音が聞こえてくる。
　アンジェラは自分の視覚ソフトに命令を与え、暗視モードに切り替えた。
　路地の奥から波が寄せては返していくのが見える。三角形で構成された非構造グリットの波。
（これ!?　ワームが作成していたものと同じ……！）
　波の向こうに何か大きなものが二体、蹲うずくまっている。波に半身を浸す姿は海洋性の大型獣のように見えた。その細部を確認し、ついアンジェラは声をあげてしまう。
「ワーム！」
　そう。人の体から四対の蟹かにの脚が突き出した不気味な姿。それ

はワームに間違いない。
　二体のワームは、そこに蹲り、ハサミを動かし、何か作業を行っていた。ハサミの先から三角形の図形が浮かび上がり、それが波の一部となってゆく。
　もう少し観察しようと思ったが、アンジェラは、隣に一般市民の男がいることを思い出した。
「ワームがいるわ。あなたは逃げて」
　声をかけると、男は、上を向き、下を向く。アンジェラはそれを頷うなずいたのだと思った。だが、それは勘違いだった。男が上を向き、下を向く。また、上を向き、下を向く。その動作を繰り返しはじめる。その動きがどんどん加速されていく。
「えっえっ？　ちょっと。何？」
　男の首を上下させるスピードが超高速になり、その首がぶれて見えるほどに加速しはじめる。
「あばばばばびびびびぶぶぶぶぶべべべべぼぼぼぼぼ0110010001010110……」
　男の口からけたたましく、意味不明な音声が迸ほとばしり出る。
「なっ……なっ……なっ……!?」
　ぴたっ、と急に首の動きが止まったかと思うと、男の顔より、弾けるように何かが生じた。
　それは無数の蟹の脚。男の顔に生じた脚は回虫の群れのようにぐねぐねと蠢うごめく。
　次に男の両脇腹がぐぐっと盛り上がる。皮ひ膚ふをぶち破り、野太い脚が生はえてくる。両りょう掌てのひらの中指と薬指の間がべりべりと割れてハサミに変化していく。
　これらの変化をアンジェラは言葉をなくしたまま、見つめていた。
　どん、と背中が壁にあたる。気づかないうちに路地の壁面まで後ずさっていたのであった。
「ワ、ワームになった……!?」
　先ほどまで男だったワームが、生まれたての幼獣のように自らの周

囲をくるくると見回す。
　そしてアンジェラへと目を止めた。赤い眼光がやましげに揺れる。
　ぶんっ、とハサミを振り上げた。アンジェラは咄とつ嗟さに身を躱かわす。アンジェラの立っていた場所にハサミが、どかんっと派手に打ち込まれ、小石を撥はね上げる。
　アンジェラは、たたっ、とワーム化した男から距離をとるため、ステップして後退した。
　アンジェラの足首を、さあっと何かが撫なでる。それは非構造グリットの波だった。つまりアンジェラは路地の奥の方、二体のワームのいる方へと後退していたのである。
　ぎちぎちぎちと背後から聞こえてきた不吉な音は、奥にいる二体のワームが、立ち上がる音。
　二体のワームは、左右の壁面に貼りつくと、壁を床のごとく這はい回りながら、がちゃがちゃとアンジェラへと殺到してくる。そして後ろにもすでにワームが！
　ぶんっ、と唸うなりを上げ、横なぎにハサミが振りまわされる。
　咄嗟に身を低くして、それを躱す。頭上でハサミが壁を削って擦さつ過かした。
　もう一体のワームがしゃがんだ姿勢のアンジェラにハサミを突き込む。ぱっ、と立ち上がり、両足を開いたアンジェラの、足と足との間の壁に猛然とハサミが突き刺さる。
　万事休す！　アンジェラは、ハサミに跨またがる形になってしまった。ぬるぬるとした感触と、ハサミ表面のわさわさと蠢うごめく剛毛が、アンジェラの内うち股ももと股こ間かんとを淫いん靡びにくすぐる。
「やっ……」と、つい声を漏もらしてしまったアンジェラへ、三体のワームが、無数の脚で覆おおわれた顔面を寄せてきた。獲物を味見し、嬲なぶるように、アンジェラの臍へそから胸にかけてをうぞうぞと蠢く細かい脚の群れが嘗なめ上げる。皮ひ膚ふの上を這い回る脚どもの気色悪さ。

アンジェラの内に湧わいたおぞましさと恐怖心は、撃退プログラムの構築すら忘れさせ、可か憐れんな悲鳴をあげさせた。

「やあぁぁっ……！」

その時！　闇を裂さいて二条の光線が迸ほとばしった。

ぼっ！　ぼっ！

という炸さく裂れつ音おんとともに二体のワームの体が仰のけ反ぞった。ワームは、そのまま潰つぶれるようにぐしゃりと倒れ、光の粉ふん塵じんとなり砕け散る。誰かが撃退プログラムをワームへと撃うち込んだのだ。

「誰！」

投げ出され、ようやく解放されたアンジェラが、光線の飛んできた方へと目を向けると、どこか小馬鹿にしたような、聞き馴なれた笑い声が返ってきた。

「くっくっくっ。おいおい。苦戦しているじゃないか」

路地の入り口、表通りのネオンの光を背にして、長身の影が立っている。真っ赤な髪を風に揺らめかせ、巨大な両乳を颯さつ爽そうと震ふるわせるその立ち姿。

「メット！」

アンジェラは、その人物の名を叫んでいた。悔しくも浮かんでしまった歓喜の色を押し隠すように、アンジェラは、残るワームから距離を取り、撃退プログラムを構築しようとする。

「おっと！　待てアンジェラ君。そいつは処理するな」

鋭く言ってアンジェラを制止させると、メットは、たっ、と一つ地を蹴けった。

メットの動きが加速される。ワームに向けて飛ぶように駆けてゆく。瞬時にして目の前に接近したメットに、ワームは一瞬驚いたように後ずさった。が、すぐにハサミを振り上げる。

ハサミが振り下ろされるよりも速く、メットの指先より無数のウィンドウが、ぱっ、と一気に散開した。それらは、ワームを取り囲み、瞬時に拡大する。さながらワームを捕らえる檻おりのごとく。ワーム

はウィンドウを振り払うように、ハサミを乱暴に振り回すが、ウィンドウに衝突したハサミは、ばちっと、感電したように弾かれる。
「さあ、捕まえた。圧縮だ」
　ぱちんっ、とメットが指を鳴らすと、ワームを囲むウィンドウの檻が、徐々に間隔を狭めはじめる。もがくワームを圧おし潰つぶし、どんどん縮小されていった。
　そうして、ついには、掌てのひらに載るような小さな立方体にまで圧縮される。メットは、それを指先で突き、そのままスクロールさせて自身のフォルダを呼び出し、その中に保存した。
　ものの数秒でメットはワーム三体を退治してしまったのである。
「よおし。採取完了だ。さ、帰るぞ」
　まるで全ての仕事を終えた、といったふうにそう言うと、メットは、さっさと路地から出ていこうとする。あっという間の出来事にぽかんとするアンジェラを振り返り、
「どうした。帰るぞ」
　と、何事もなかったかのように言う。
「あ、あの……帰るって……」
「帰って捕まえたワームを解析アナライズするんだ。いや、四軒目で現れてくれてよかった」
　言って、すたすたと歩きだしてしまう。
　アンジェラには何がなんだか分からない。メットへと小走りで追いつき、尋たずねる。
「四軒目で現れて、ってどういうことです。あなたはワームを捜していたっていうんですか？」
　どう考えても飲み屋を梯はし子ごしていたようにしか見えなかった。
「当たり前だろう。無駄な時間を私が費ついやすものか。ワームの出現する可能性の高い場所を回っていたんだ。どうせだから、君の歓迎会も一緒にやってしまった。どうだ。一石二鳥だろう」
　得意げに言われたが、やはり意味が分からない。

「ど、どういうことです？」
「なんだ？　歓迎会と捜査を一緒にやったのが気に食わなかったのかい。生あい憎にくだが歓迎会だけをやってられるほど私は暇じゃない」
「いや、違くて……」
　先ほどメットは、ワームが出現する可能性の高い場所を回っていたと言った。つまりメットは、ワームの出現を予測できていたということになる。
「あなたは、ワームの出現パターンがわかるってことですか!?」
「わかる、というか、ある程度あたりをつけられる。見たまえ」
　メットが手元にディスプレイウィンドウを呼び出す。
　そこには、マップ・ナンバーとその利用者の増減を表す一覧が表示されていた。
「全て今までワームが出現したマップだよ。どれもワーム出現の直前に利用者が急激に増加している。つまり、ワームは人口密度が増加したマップを感知して出現しているんだ」
　アンジェラは、舌を巻いた。まさか、知らないうちにそんな仮説を立てていたとは思いもよらなかったのである。思い返せば、メットは河か岸しを変えるたびに何やらウィンドウを呼び出していた。グルメ情報でも見ているものだと思っていたが、このディスプレイだったのだ。
「つまりワームを見つけるために、利用者が増加したマップを選んで回っていたんですか？」
　アンジェラの声には、自然と感嘆が含まれていた。
「そうだと言っているだろう」
「どうして先に言ってくれなかったんです」
「おや？　言ってなかったか？」
　恍とぼけたようなメットの言に、アンジェラは、声を強くした。
「言ってませんでしたよ！　私、ただあなたが遊んでるだけだって勘違いしちゃったじゃないですか！　と、いうか、その情報をどうして

中央保安局に報告しないんです。保安局エージェント全員がその情報を持っていれば、もっと効率よくワームを捜索できるのに……！」
「馬鹿を言っちゃいけない」
　メットが口元を歪ゆがませた。
「そんなことを言いだすんじゃないかと思って、君にも黙っていたのさ。はじめに言ったろう。手柄を立てるのは私だ。他のエージェントに手柄を横取りされるなんて御ご免めんだね。この情報は、しばらくは、誰にも教えるつもりはないよ」
「でも、ワームの犠牲になる市民を少しでも少なくできるはずですよ」
「市民の犠牲？」
　ふんっ、とメットは鼻で笑って、こう断言した。
「大事なのは私たちが手柄を立てることだ。市民の犠牲など知ったことか」
　アンジェラは、先ほどの感嘆も忘れ、啞あ然ぜんとする。なんという人だろう。自分の手柄のためならば、市民が犠牲になってもかまわないというのか。
「さ。帰るぞ」
　メットは踵きびすを返し、再び歩きはじめた。が、すぐに立ち止まる。アンジェラを振り返り尋ねた。
「そういえば聞き忘れていた。ワームは、どこから、どういうふうに出現した？」
「どこから……って……」
　記憶を辿たどる。と、ともに、電撃のごとく思い出されたことがあった。
「そっ、そういえば！　市民！　市民がワームになったんですよ！」
　アンジェラは、メットと別れた後におかしな男に出会ったこと。その男についていくと、路地裏で男が急にワームに変へん貌ぼうしたことを語った。メットは、口元に手をやって、アンジェラの話を、じっと黙って聞いていた。全て聞き終えた時こう呟つぶやく。

「やはりな」
「え？　やはり？」
　まるで、すでに分かっていたかのような口ぶりだ。
「半なかば予想はしていた。中央保安局もおそらく察しているだろうな。人口の多いマップの中心に、なぜ急にあんな異形のワームが出現できたのか……」
「ワームのステルス機能ですか？　ワームは市民に擬態する能力を持っている……」
　メットは、首を振った。その顔つきは、いつになく神妙である。
「それは少し違う。ワームが市民に擬態していたんじゃない。今まで出現したワームは全て──もとは市民だったんだ」
　一瞬、アンジェラはメットが何を言っているのか分からなかった。
「ど、どういうことです？　あの、あのワームたちがもとは市民って……」
「詳しく調べてみなければ確かなことは言えん。だが、私はこう考える。市民はなんらかの悪マ性ルソウフエトアに侵おかされていた。侵されると、パーソナルデータを書き換えられ、ワームへと変貌させられる、そういった悪マ性ルソウフエトアに……」
「パーソナルデータをワームに変貌させる悪マ性ルソウフエトア!?　そんなものをいったいどこで……」
「他にその悪マ性ルソウフエトアを内に宿している市民から伝う染つされたのだろうな」
　メットの語る言葉に含まれた恐るべき意味に、アンジェラは身を戦慄わななかせた。
「伝染し、データの書き換えを行う。つまり感染プログラムということですか!?」
　メットは頷うなずいた。
「その通り。今ディーヴァでは人間が人食いの化ばけ物ものに変わる伝染病が流行しているってわけさ」

度重なる人食いワーム事件が感染プログラムによるものだとディーヴァ内に告知されたのは、アンジェラとメットがワームを採取した翌日のことであった。

中央保安局もまた、すでにワームの正体に感づいていたのである。

隠していた理由は以前にも述べた通りだが、思いの外ほか、ワーム事件が多発し流りゆう言げん飛ひ語ごが飛び交うようになった今、隠し続けることは逆効果であると判断された。

また、これ以上の感染プログラムの拡散を防ぐため、市民に公開マップなど人の多く集まる場所に出歩かないよう自重させる意味もあったのである。

結果、各公開マップのアクセス数は、激減した。

自分の隣人が感染プログラムに侵されているかもしれない。急にワームに変へん貌ぼうし、襲おそいかかってくるかもしれない。自分もまた感染するかもしれない。

その恐怖が市民たちを猜さい疑ぎ的てきにさせていた。市民たちは己おのれの職務以外には極力他者との接触を避け、各々のプライベートな空間に閉じこもるようになっていたのである。

だが、それでも事件は起こった。

ちょっとしたコミュニティの集会。未だ運営を続けている小さな飲食店のコンテンツ。ひっそりと友人同士で開いたパーティ。そんな場所でワームは唐突に出現したのである。

すぐさまエージェントが駆けつけ、事態は鎮圧されたが、そのたびに数人の犠牲者が出た。

見えないところで感染プログラムは、未だ拡散を続けているのである。

四方を壁に囲まれた殺風景な空間に蟹かにのハサミと脚を有した男性が浮遊していた。

ここは、採取したワームを解析アナライズするためにメットが一時的に作成した作業ワーク空間スペース。ワームを仮想的空間に閉じ込

め、出現させているのである。
　メットがいくつものウィンドウにコマンドを入力していた。ワームのプログラムをさらに詳細に解析アナライズしようとしているのである。その背後では、アンジェラがメットに背を向けて、やはりウィンドウをいじくっていた。
「ううむ。やはり難しいな」
　メットが首を振り、無精な態度で、そこに、ごろりと横になってしまった。匙さじを投げたといった様子である。アンジェラが、作業の手を止め、メットへと声をかけた。
「そんなに複雑なんですか？」
「ああ。見たまえ」
　メットが面倒くさそうに、ウィンドウを指さす。ウィンドウの黒い画面には、緑色のプログラミング言語がびっしりと並んでいた。その一部が常に動き、点滅するように変化している。
「こいつが、感染プログラムだ。感染してすぐは、潜伏し、これといった活動をしない。感染された市民は、自分が感染していることに全く気づくことはないだろう。だが周囲の人口密度が急激に増加すると感染プログラムは、宿主のパーソナルデータを一気に書き換え、サイバーワームへと変貌させる。そうなるまで発見することができん」
　つまり保安局エージェントは、市民が発症してから駆けつけることしかできないということだ。なんとも厄やつ介かいな悪マ性ルソウフエトアである。
「でもプログラムのパターンから、感染者キヤリアを早期に発見したり、感染を防ぐワクチンソフトを作成したりすることは……」
「それをなんとかやろうとしている。だが難しい」
　メットが鬱うつ陶とうしそうに言って、眉み間けんに皺しわを寄せた。
「この感染プログラムは複雑なステルス機能を持っている」
　アンジェラは首を傾かしげた。
「ステルス機能……。でも、メットはもう感染プログラムのパターン

を見つけているじゃないですか？　同じパターンを持つ市民が感染者キヤリアなんじゃ……」
「だから、そう上う手まくはいかないんだよ」
　メットは、説明するのが億おつ劫くうだといった動作で、手を振り、ウィンドウを消去する。
「感染プログラムのステルス機能は高度な変態プログラムポリモルフイツク・コードだ。感染するたびにパターンを変容させている。ゆえに一定のパターンから感染プログラムを検出することはできない」
「じゃあ、やっぱり潜伏期間中に発見することは……」
「極めて困難。そういうことだ」
　それだけ言って、メットはもう説明をやめてしまった。
　感染プログラムについての説明を聞き、アンジェラの内に一つの不安が湧わき上がってくる。
「あ、あの……」
　アンジェラが、おずおずと言葉を発した。
「あ？　なんだ？　まだ何かあるのか？」
「私は、感染者の男性と接触しました……」
「そうだな。それがどうした？」
「私が感染している可能性もあるわけですよね……」
　メットがにやりと笑う。からかい甲が斐いのあるものを見つけたといった嫌いやな笑いだ。
「そうだな」
　笑いを噛かみ殺したようにメットが言う。
「くっくっくっ。つまり君は、自分もいつかワームになってしまうんじゃないかしらん、と心配しているわけか。くっくっくっ。なんとも可愛かわいらしいね」
「かっ、可愛らしくなんてありませんよ！　常に私と一緒にいるあなただって感染しているかもしれないんですよ！」
　一応アンジェラは、感染を気にして、中央保安局の解析施設で精密検査を受けている。結果は陰性だった。だが、先ほどのメットの説明

からすると、感染プログラムのステルス技術は、かなり複雑で、発見が困難だという。検査の結果を完全に信用することはできない。

　にやにや笑いながら、メットは興奮するアンジェラを宥なだめるように言う。

「まあ。安心したまえ。今までエージェントの中にワーム化した者はいない。ワームと最前線で戦っているにもかかわらずだ。我われ々われエージェントは、一般市民の持ち得ない高性能のフィルターを備えている。おそらくそれが、ある程度感染を防いでいるのだろう。たぶんだがな」

　おそらくとか、たぶんとか、あまり確実な言い方ではないが、少しは安心できた。

「そ、そうですか……」

「それはともかく、君の方はどうなった」

　突然、メットに聞かれ、アンジェラは、うっ、と口ごもる。

　アンジェラは、感染プログラムの発信者を特定するための作業を行っていた。

　メットがワームの解析アナライズに専念するというので、アンジェラは、勢い込んで「なら私が感染プログラムの発信者を捜してみます」と宣言したのである。

　もちろん、そう簡単に捜し出せるとは思っていないが、発信者を絞り込むきっかけぐらいは見つけられると思ったのだ。だが、結果は予想外に振るわなかったのである。

「す、すみません。まだ、全然です……」

「だろうな。気にするな。全く期待はしていなかった」

　はっきり言われ、少しむっとしたが、メットがワームの解析アナライズをしている時間、何もできていなかったのは事実である。アンジェラは、黙るしかない。

　そのアンジェラを嬲なぶるようにメットがこんなことを言う。

「さて。君が貴重な時間を浪費し、どんな無駄な努力をしてきたのか、見せてもらおうか」

「え？　見せるんですか？」
　正直、見せるのは気が引けたが、アンジェラは、今まで向かっていたディスプレイを指先でスクロールし、メットの前まで持ってきた。
　ディスプレイには、ディーヴァ内の公開マップとそれらのアクセス回線ルートを簡略化した三次元モデルが表示されていた。針の先ほどのいくつもの光点が点滅している。その中に一際強く輝く赤い光点が一つ混じっていた。
「五十一時間前、つまりここ最近でワームが出現した時の各マップの市民の分布状況です。赤い点滅がワーム化した市民。逆再生して全体が発症までどう動いたかシミュレートしてみます」
　アンジェラがウィンドウをタッチする。ウィンドウ内の光点が動き出した。時間を遡さかのぼり市民たちの足跡を辿たどっているのである。これでワーム化した市民が発症するまでにどの市民と接触し、どういったルートを辿ってきたかがわかる。
「ワーム化した市民たちが共通して辿ったルートや接触した市民を割り出し、そこから発信者を発見できないかと思ったのですが、やはり難しかったです……」
「ふむ。随分と地味で面倒くさい作業をやっていたじゃないか」
　嘲あざ笑わらうように言ったが、それでもメットは、じっとディスプレイを見つめ続けていた。
　と。メットが何かに気がついたように目を見開く。
「む？」
「どうしたんです？」
「ワーム化した市民が、発症前いくつもの公開マップを渡り歩いているように見えるぞ……」
　メットの言葉にアンジェラは、ディスプレイへと顔を寄せる。
「本当だ……」
「もしかして感染した市民は無意識のうちに人口の多く集まる公開マップを探し、アクセスして回っているのかもしれん」
　意外なメットの発見にアンジェラは興奮する。もしかして自分の作

業が、何か大きな手掛かりになるかもしれない。
「こ、これは、感染者キヤリアを特定する材料にはなりませんか？」
　問われ、メットは、巨大な胸の前で腕を組み、慎重に言葉を発する。
「マップからマップへとを渡り歩く市民は何も珍しくはない。だが、発症前の感染者を絞り込む一つの手掛かりになるかも……」
　少し考え、メットは、はっ、としたように言う。
「今現在の市民の分布状況を見ることはできるか？　公開マップの利用者が激減している今ならば不審な動きをしている市民を見つけることができるかもしれんぞ」
　それは確かに名案であった。感染プログラムの存在に市民が怯おびえ、公開マップの利用を控えている現在、複数のマップを移動して回る者などまれである。確実とはいえないが、そのような動きをしている市民がいれば感染者の可能性が高いと考えていい。
「ちょっと待ってください。すぐに表示します」
　ディスプレイ上に公開マップと現在の市民の分布が表示されていった。
　先ほど表示された過去の市民分布状況と比べると実に閑散としている。皆、ワームとの遭遇や、感染を恐れて出歩かないようにしているのだろう。だが、それでも市民を示す光点はちらほらと灯ともっている。こんな状況でも娯楽用の公開マップに出てゆく命知らずがいるらしい。
　と、いってもこの画面を見た限りでは、とくに怪しい動きをする市民は見られない。
「過去に向け、表示された市民分布を五倍速で逆再生したまえ」
　メットに命じられるままアンジェラは、ウィンドウにコマンドを入力する。
　市民を示す光点が今まで辿たどってきた道のりをちょこちょこと動きだした。
　メットは忙しく動く画面を丹念に観察する。多くの光点が現れては

消えた。だがなかに二つ、はじめからずっと消えずにいくつものマップを巡り、移動している光点がある。
「見つけたぞ。マップをうろうろ回っているやつが二人いる。今、こいつらはどこにいる？」
「現時間に戻してみます」
　アンジェラは再びコマンドを入力する。光点が先ほどとは逆に動き出した。やがて現時間に到達した時に光点が停止する。
「マップ・ナンバーN00138とF66785です」
「さて、こいつらが感染者キヤリアか否かだ。とっ捕まえて調べてみるか。さあ。どっちから行く？」
　メットが二つの光点を見つめながらほくそ笑む。
「では、私はN00138マップへ行ってきます！」
　アンジェラが、やる気満々にそう言った。メットがきょとんとする。
「私は？　君、一人で行くのかい？」
「はい。メットは、F66785マップに行ってください。二手に分かれた方が効率的です」
　アンジェラは自分の作業がワーム早期発見の手掛かりになっているのではないかと興奮していた。一刻も早く確認しに行きたいのである。
「だが君。そのN00138マップの市民がワーム化した時、君一人で対処できるのかい？　また、私が駆けつけなければならない事態にはならないだろうね」
　嫌いやみったらしく言われ、アンジェラは、むっとした。
「馬鹿にしないでください。この前はワームが複数だったので苦戦しただけです。あれから複数のワームとの戦闘を想定したシミュレーション訓練もしています。今では五体までのワームなら一人で処理できますよ」
「なるほどね。予習復習はちゃんとやってあるってことか。ご立派だ。だがね。シミュレートできないことが起こるのが実戦というもの

だよ。ディーヴァの人間はすぐにシミュレートで全てやった気になるが、地上では……」
「ここは地上ではありません！　ディーヴァです！」
　またもや出てきた地上という言葉にアンジェラは苛いら立だち、ついメットの言を遮さえぎってしまった。
　メットは溜ため息いきを吐ついてわざとらしく肩を竦すくめて見せる。
「ごもっとも」
　その仕草は、アンジェラの苛立ちをさらに強くさせる。
「感染者は人口密度の急激な増加によってワーム化するんですよね。なら、このN00138マップのように市民がほとんどいないマップではワーム化することはあり得ません。ご心配いただかなくても大丈夫です！」
　それだけのことを一息で言うと、アンジェラは最後に「では行ってまいります！」と叩たたきつけるように言い、作業空間を出ていった。

　N00138マップは二十二世紀のニューヨークの都市風景を模したマップで、いくつもの巨大ビル群が林立していた。
　マップ内は、深閑としている。普段たくさんの市民が行き交うマップだが、今は誰もいない。
　ちらほらと歩く人影が見えるが、市民ではなく、マップ内に作成された群集風景エキストラであった。
「さて。問題の市民は、どこにいるんだろ」
　アンジェラはディスプレイを呼び出し、マップ内にアクセス中の市民を検索する。
「あれ？」
　表示された結果の意外さにアンジェラは首を傾かしげた。アクセスしている市民の数が三十一人。前に確認した時は確か三人ぐらいしかいなかったはずである。

「こんな短い間にどうしてこんなに市民が増えたの？」
　不思議に思いながらもアンジェラは、辺りを見回す。
　と。呆あつ気けないぐらい簡単にそれらしい市民を見つけることができた。
　その市民の挙動は以前目にしたワーム化した男に似ている。背筋を曲げ、よろよろとよろめきながら歩いている。明らかに周囲のエキストラとは様子が違う。
　市民は、何事か、ぶつぶつと呟つぶやきながら近くのビルの中へと入っていく。
　アンジェラは念のため撃退プログラムを構築しておき、市民を追ってビルの中へと進んだ。
「止まりなさい」
　アンジェラは男へ追いつき声をかけた。
　が、男はアンジェラの声が聞こえないのか、のろのろとビルの奥へと進み続ける。
「止まりなさいって言ってるでしょ！」
　アンジェラは男の前に回り込んで行く手を遮さえぎった。
「あなたは感染者キヤリアの疑いがあるわ。今すぐ中央保安局の保護下に入り、解析アナライズを受けなさい」
　男はようやく首を上げ、アンジェラの顔を見る。その瞳はどんよりと濁り、まるで何も映していないかのようだった。
「あっ……あっ……」
　男が何事か声を発した。
「呼んでいる……集合せよ……この先に……とても素晴らしいものが待っている……」
「は？　この先に素晴らしいもの？」
　アンジェラは男の進もうとしているビルの奥へと目を向ける。そこには黒々とした闇が蟠わだかまっていた。ふと、耳を澄ますと闇の奥より、微かすかだが地鳴りのような音が聞こえてくる。
　どむ、どむむ、どむ、どむむ……　どむ、どむむ、どむ、どむ

む……

　激しくドラムを打ち鳴らすような低音であった。

「何？　この先にいったい何があるの？」

　アンジェラが男に尋ねる。男は頭痛を訴えるように頭を抱え、こんな言葉を絞り出した。

「……楽園」

「楽園？　楽園って何？」

　男は、うーんと唸うなり、それ以上答えようとしない。が、男に代わり言葉を発したものがいた。

「呼んでいる……集合せよ……」

　その声はビルの入り口からした。そちらを振り返ると、別の市民が立っている。先の男同様、背筋を曲げ、よろよろ揺らめきながらこちらへ歩んできていた。

「ノア・ノア……この先に……素晴らしい……」

　さらにもう一人、ビルの中に市民が入ってきた。

「……楽園……集合せよ……ノア・ノア……」

　そしてさらにもう一人。

「え？　何？」

　アンジェラが戸惑っているうちに一人、二人、三人……と次々と市民が現れる。

　後から後から市民はやってきた。すでに十人ぐらいの市民がぶつぶつとあらぬことを呟つぶやきながら、アンジェラの横をすり抜け、ビルの奥の闇の中へと消えてゆく。

　気がつけば、はじめに捕まえた男がいなくなっている。アンジェラが啞あ然ぜんとしている隙すきに他の市民たちに紛まぎれ、先へと行ってしまったのだろう。

　アンジェラはごくりと一つ唾つばを呑のみ、自身もビルの奥へと慎重に進んでいく。

　進むにつれ、ドラムのような音が大きく、はっきりと聞こえてくるようになった。

どむ、どむむ、どむ、どむむ……　どむ、どむむ、どむ、どむむ……

その低音が腹に響き、耳にうるさいほどになってきたあたりで、何やら、じっとりとした濃密な気配が立ち込めだす。禍まがまがしく嫌いやな気配。妖よう気きと呼ぶべき気配である。

やがて、アンジェラはその音の聞こえてくる先へと辿たどりついた。

「なっ……!?」

待ち受けていた異常な光景にアンジェラは絶句し、目を疑った。

それは五階まで吹き抜けとなったビル内のホールである。

何十人という市民が、響ど動よもす低音に身を任せ踊っていた。激しく足を踏み鳴らし、胸を震ふるわせ蛇へびのように両手を揺らめかせる熱狂と放ほう埒らつの舞。どの市民も舌を出し、目玉をぐるんぐるんと回し、悦楽に酔っているように見受けられた。一目で正気を失っているのが分かる。

続々とやってくる市民がその妖あやしい舞踊へと加わってゆく。

なかには舞に加わらず、踊る市民たちを点々と取り囲む者たちもいた。

その者たちは口を異常なほど大きく開け、このホールを満たすドラムの音に合わせ、妊娠したように腹を膨ふくらませたり、縮ませたりを繰り返している。いや、音に合わせているのではない。その者たちがこのドラムの大音量を放っているのだ。言ってみれば彼らは人間スピーカー、人間ウーファーと化していたのである。

アンジェラが、もしディーヴァのデータベースに検索をかけたならば、この場で行われている舞踊がナノハザード以前に失われたマオリー人の民族舞踊、タヒチアンダンスであることが分かっただろう。だが、それを知らないアンジェラの目には、原始邪教の信徒たちが異い貌ぼうの神々に捧げる妖しげな暗黒舞踊のように映ったのであった。

「何これ？　何をやっているの？」

アンジェラは柱の陰に身を隠し、踊る市民たちを観察する。

しばらく観察し、このドラムの音と踊りとが、ある種の信号となっていることに気がついた。

そもそも、タヒチアンダンスは文字を持たぬ先住民が、歌や踊りの振りの中に神話や伝説をおりこみ、伝承させるために行っていたという。踊りそのものを信号に換え、互いに複雑な情報のやりとりをすることもまた可能なのだ。

市民たちは踊りと音によってなんらかの情報、あるいは命令を伝達し合っている。

やがてダンスに変化が表われだす。踊る市民たちの距離が徐々に近づいてきた。まるでダンスの中心になんらかの重力場が存在し、そこへと引き寄せられていくかのように。市民たちの肌が触れあい、それでも飽き足らず、押おし競くら饅まん頭じゆうでもするがごとく互いを押し付け合っていく。

圧迫に耐えられず中心にいる市民から順に潰つぶされ、そのパーソナルイメージが、歪ゆがみ、ねじ曲がり、粘液状になっていった。市民と市民が絡まり合い、混じり合い、一つになっていく。

うねるゲル状の塊となった市民たちは、そこからさらに変化していこうとする。

細胞が分裂するように肉片は四つに分かれ、分かれた先でぐねぐねと蠢うごめきだした。やがて四つの肉片がそれぞれ一つの形を作りはじめる。

まず、球形の細胞状の形となり、ついで尾と頭部の別が生じ、魚類の鰓さい裂れつのような裂さけ目が生まれ、軟骨魚類を思わせる形となった。さらに変態は進み、鱗うろこのような突起が五本指を備えた手のようになり、腕状に伸びていく。頭部の側面についていた眼球が前方に集まり、尾が縮みだした。うっすらと内部の透けて見えていた皮ひ膚ふが厚くなり、どす黒い色へと染まっていく。

真黒い胎児──そんな姿となった。それが、人間の成長を早送り再生させるように腕が伸び、足が伸び、曲がっていた背中がぴんとし、直

立する。そこでその存在の成長は完成した。
　影のように真黒い人物。そういった者が四人、このホールに誕生したのである。
　全身が漆うるしを塗ったような漆しつ黒こく。二足歩行をしているが、それは明らかに人ではない。
　魚類を思わせる背びれ状のものを備えた者。蛸たこのごとき幾本もの触腕を有する者。亀のような甲こう羅らを背負い、両腕が鎌のごとき鰭き脚きやくに変じている者。海鳥に擬した翼と嘴くちばし、鉤かぎ爪づめを持つ者。
　いずれも海辺の生物と人とを掛け合わせたような姿だが、体表面の質感は決して有機的な存在のそれではない。真黒い金属を一度高温で溶解し、人ひと形がたに整形したような、光沢のある金属質のものだった。影法師のごときその体色だが、顔面だけが白いマスクをつけているかのように真っ白い。眼球のないその面相は、髑どく髏ろを思わせて不気味である。
　あれほどまで喧やかましく響いていたドラムの音がその四体の出現とともにぴたりと止やんだ。
　未だ、とどまることなく、このホールへと集合してくる市民たちは、すでに百を超える数となっている。その市民たちを四体の漆黒の妖よう人じんたちが、表情のない白い顔で見渡す。
　すうっ、と四体が同時に右手を上げた。その掌てのひらにふっ、と闇色のウィンドウが出現する。
　途端、ここに集った市民たち全員の顔の前に同様のウィンドウが浮かび上がる。
　市民たちの体がそろって痙けい攣れんを開始した。
「えっ……。うそ？　まさか……これって……」
　アンジェラが信じられぬ光景に嫌いやな予感を抱き、身を震ふるわせる。
　そんな時、アンジェラの真横に、ぽんっ、と通信ウィンドウが出現した。メットからである。慌ててアンジェラは通信の音量をギリギリ

まで下げた。
『アンジェラ君。そっちはどうだ。残念ながら私の方は外はずれだったよ。暇人が人のいなくなったマップを回ってみようと思い立っただけだった。一応、解析施設へ行き検査を受けるよう指示したが、まあ、白だろうな』
　アンジェラの今置かれている状況を知らないメットの声は、呑のん気きなものだった。
「そっ……そうですか……」
『ところでアンジェラ君。N00138マップで何が起こっている？　アクセス数が異常に上昇しているぞ。五百人を超えている。おっ……もう六百を超えているな』
　メットはディスプレイでマップのアクセス数を確認しながら通信してきているのだろう。
「ろ……六百!?　そ、そんなに？」
『どういうわけだ？　この増加率ならワーム化する感染者キヤリアが現れてもおかしくないぞ』
　アンジェラの見ている前で市民たちの痙けい攣れんがどんどん速くなっていく。
「ワ……ワーム化。してます。たぶん、今まさにしているんだと思います」
『何？　君一人で処理できるか。ああ。できるな。五体までなら対応できると……』
「できません！」
　皮肉っぽいメットの言葉をアンジェラのうわずった声が遮さえぎった。
　べきっ！　ばきっ！　べきっ！
　痙攣していた市民たちの体が停止し、その肉体を突き破り、次々と蟹かにの脚が生じてきている。
『なんだって？　ワームは五体以上いるというのか？　どのぐらいいるんだ？　まさか十体以上いるっていうんじゃないだろうな？』

「六百！　たぶん六百体を超えるワームがこのマップに出現しています！」
『何？』
　がぎん！　ずしん！　がぎん！
　重く鋭い音が次々と鳴り渡った。その音はここに集まった市民たちが一斉にワームへと変へん貌ぼうし、その鋭利な刺状の脚を大地へと打ち降ろした音である。
　と、同時にメットとの通信が、ぶつり、と途絶えた。

『マップ・ナンバーN00138にて異常事態発生』
　その情報は、現場へのリンクアドレスとともに瞬またたく間に全システム保安要員へと通達された。
　感染者が一つのマップに集合し、一斉にワームへと変貌。それを中央保安局のセキュリティが感知したのだ。その数六百八十五体。保安局エージェントたちは、速すみやかに現場へと赴おもむき、迅速なワーム駆除作業を行うことを命令された。
　六百八十五体の攻撃的なワームの駆除。これだけでも尋常な任務でないことは明らかである。
　だが、そこに待ち受けていたのは、彼らの想像を絶する異様な光景であった。
「なんてことだ……」
　マップ内のビルの壁面に夥おびただしい甲こう殻かく類状の巨大ワームが隙間なく貼りついていた。
　それだけでも十分おぞましい光景なのだが、さらにワームどもの周辺に本来あるべきでない不自然なオブジェクトが作成されていたのである。
　ワイヤフレームで形成された不完全な樹木のごときオブジェクト。空間に上書きされているのは、寄せては帰す海の波をリピートし続ける動画データ。中空から唐突に現れ、逆さまに生はえている椰や子しの木。かと思えば壁面に入道雲の流れる青空の静止画像が貼りつけら

れている。
　まるでアウトサイダー芸術家が南国の旅行雑誌を滅茶苦茶に切り裂さいてコラージュしたような悪夢的な世界がそこに展開されていたのであった。
　よく観察してみれば、それらは、ワームたちの這はい回る後から生じてきていることが分かる。ワームたちが、マップのバーチャルイメージを作り替えていたのであった。
　一時、慄りつ然ぜんとなったエージェントたちであったが、すぐに己おのれの職務を思い出す。
「駆除活動を開始する」
　エージェントたちは、自身の周囲にウィンドウやアイコンを出現させた。それぞれが、得意とする方法で撃退プログラムを構築し、電脳戦ポジションを作り上げていく。
　バーチャルイメージの書き換えに熱中していたワームたちが、エージェントたちの動きに気がつき、首をねじ向ける。ばらばらとビルから剝はがれ落ち、轟ごう音おんを立てて大地に着地。エージェントたちに向かい、シャカシャカと四対の脚を高速で動かし、突撃してくる。
　だが、ワームどもの突進は、ばちんっ、というショート音とともに中途で阻はばまれた。
　エージェントたちが、ワームの進撃を阻む防衛プログラムを次々と出現させたのである。
　燃えるような光壁に行く手を遮さえぎられ、ワームたちは、ヒステリックな動作で光壁にハサミを叩たたきつけ、弾き返され続けていた。その動きは、ワームたちが応用の利かぬ単純なプログラムに支配された存在であることを意味している。
「虫どもが壁に引っ掛かってるうちに殲せん滅めつするぞ！」
　エージェントたちが次々と撃退プログラムの光弾を発射しはじめた。雨あめ霰あられと降り注ぐ光弾は、光壁を透過してワームたちへと被弾してゆく。

一体、二体と光の粒子となり駆除されてゆくワームたち。
エージェントたちの攻撃は一方的で、全ワームの駆除は時間の問題と思われた。

一方、アンジェラはビルの中、給湯室のような狭いスペースの壁にぴったりと体を貼りつけ、身動きがとれなくなっていた。
アンジェラの見ている前で一斉に市民たちがワーム化した時は、もう助からないと思ったが、なんとか逃げまわり、身を隠せる場所を見つけられたのである。
一階のビルの出口付近には、夥おびただしいワームがたむろしているため、やむなく七階のこの場所まで逃げたが、それによって外に出ることが困難になった。
ビルから飛び降りるという手も考えた。仮想空間において高さとは物理的なものではない。落下したから死ぬということはない。だが、それをするとビルを取り囲むワームの群れの中に飛び込んでしまうことになり、やはり危険であった。
マップ外にリンクして脱出しようと思ったが、何かの力が邪魔をし、それができない。また通信も同様だった。どうやらこのビル内においてなんらかの通信電波が激しく飛び交っているらしく、それが障害となっているようだ。
ガツンガツンと絶えず響いてくる硬質な音は、ワームがビル内を徘はい徊かいする音である。
幸いワームどもは、積極的に獲物を捜すよりも、何か妙なオブジェクトを作成することに夢中になっているように見えた。アンジェラがこのワームの巣そう窟くつのようなビル内で今の今まで無事でいられたのは、そのためであろう。
（いったい、何を作っているの……）
今、壁の隅から顔を出し、周囲を窺うかがうと、廊下の窓の外、ビルの壁面を一体のワームが這はい回っているのが見える。ワームはハサミで壁面をつつくようにしてオブジェクトを作成していた。それ

は、ワイヤフレームのみで構成されたバナナの木のように見える。他にも窓の外にはハイビスカスの花、入道雲、椰や子しなどが見えた。
（ワームどもは、南国のリゾートでも作りたいっていうの？）
　その時、窓の外を遠く流星のようなものが流れていくのが見えた。
　アンジェラは身を乗りだし、窓の外を確認する。いくつもの光線が飛び交っていた。ワームたちがその発射元へと押し寄せてゆき、光線に撃うち抜かれ、撃退されていっている。ワームと戦闘を繰り広げているのは、精せい悍かんな銀色の制服を纏まとった一団。
「保安局エージェント！」
　アンジェラは歓喜の声をあげてしまい、慌てて口を押さえる。
（そうか。これだけワームが出現しているんだもの。保安局が気づかないはずがないわよね）
　見たところ保安局エージェント側がワームを圧倒しているように見えた。
　それはそうであろう。いくらワームが凶悪な戦闘能力を持ち得ているといっても電脳戦のプロフェッショナルである保安局エージェントがこれだけの数そろって、後おくれをとるはずがない。
　ワームが駆逐され、アンジェラが救助されるのも時間の問題と思われた。アンジェラの内に希望が湧わいてくる。
　と、その時、妙なものが見えた。
　ビルのすぐ外、ワームたちが、うぞうぞと群集する中より、闇が零こぼれ分裂するように一つの人影が生じる。それは、影のような漆しつ黒こくの人物。
　アンジェラにはその人物に見覚えがあった。このビルの一階で感染者キヤリアたちが妖あやしげな舞踏の末に生み出した四体の妖よう人物。その一体に違いなかった。

　エージェントとワームとの戦闘は終わることなく続いていた。
　ワームの数は際限がない。倒しても倒しても光壁の向こう側に新たなワームが押し寄せてくる。これを全て片付けるのは骨の折れる作業

であった。
「くそっ。きりがないな」
　そんなぼやきがエージェントの誰かから漏もれ出た時である。
　光壁の向こう側、ワームたちの遥はるか後列にぽつんと一つ黒いものが佇ちよ立りつしていた。
「誰かいるぞ……」
　エージェントの一人が、そう口にする。
　ラバースーツを思わせる黒光りする金属製の肉体。肩口、頭頂から尾骨の辺りにかけて、魚類の背びれを思わせるトゲ状の突起が突き出ている。顔だけが能面のごとく真っ白で、無表情。
　その左手に握った棒状のものは、鞘さや込めの日本刀のように見える。
　そんな妖よう人物が、荒れ狂うワームたちの中を悠然とこちらに向け歩んでくるではないか。さながらその人物だけが騒然とした戦場の中で、違った空間と時間を生きているかのように。
　ぴたりと立ち止まった。一切の感情を宿さぬ妖人の瞳が光壁越しにエージェントたちを映す。
　妖人の周囲に火が灯ともるように、ふっ、と無数の黒いウィンドウが浮かび上がった。
　ウィンドウ上の緑色の数列が忙せわしく動き出す。妖人がなんらかのコマンドをウィンドウへ入力したのだ。何百というワームたちの面前に同様のウィンドウが次々と出現する。
　ふいにワームたちの突進が停止した。絶え間なく続いていた、ばちんばちんというワームが防衛プログラムに弾かれ続ける音が急にぴたりと止み、マップ内は不気味な静寂に包まれる。
「なんだ……？」
　ワームたちの突然の停止にエージェントたちも呆あつ気けにとられ、攻撃の手を止めた。
　やがて、各光壁の前にワームが一体ずつ、ゆっくりと進み出てくる。先ほどまでの、ただただ攻撃的な様子とは、何かが違っていた。

ワームは両のハサミを光壁へと突き出す。本来ならば弾かれるはずのハサミが、光壁に触れた時、多少ばちりという抵抗感を表わしただけで光壁へ食い込んだ。ワームの両腕に力がこもる。

ばちっ……ばちばちばちっ……。

光壁がショート音のごとき悲鳴をあげる。

「なっ!?　馬鹿なっ！」

なんということであろう。ワームがゆっくりとではあるが防衛プログラムに穴をあけ、そこを中心に引き裂さきはじめたではないか!?

我われに返ったエージェントたちは即座に新たな防御壁を構築しようとウィンドウを操作する。

だが、遅かった。先ほどの静寂から一転。こじ開けられた光壁の隙間より、後続のワームたちが雪崩なだれをうったように殺到してきたのである。

「ひっ！」

前列で啞あ然ぜんとしていたエージェントが一人、押し寄せるワーム群に呑のみ込まれた。

エージェントたちは、慌てて後退し、ワームたちから距離をとり、再び防衛プログラムを作りだす。だが、ワームたちは最初の光壁を破壊し、突破した後、広く散開していた。そのため、光壁は一つ一つが点在する形となり、すぐ横をワームたちは難なくすり抜けて向かってくる。

「防衛プログラムの構造を解析アナライズし、無力化した!?」

エージェントたちの視線が漆しつ黒こくの妖よう人じんへと集中する。妖人物の周囲にはウィンドウが出現しては消え、出現しては消えを忙せわしく繰り返している。静かに佇たたずむ妖人物の目線だけがちらちらと動き、その視線によって次々とウィンドウへとコマンドを入力している。

「あいつか!?　あいつがワームに命令を与えているのか!?」

ワームの動きは突撃一辺倒だったものから戦略的なものへと変化している。いくつかのグループに分かれ、前列の一体が防壁を無力化。

残る数体がその隙すきに一気に押し寄せてくる。
「あいつだ。あの人物を確保しろ！」
　エージェントたちが一斉に掌てのひらに撃退プログラムを構築し、妖人へと向ける。
　何十という光球を向けられ、今まで我われ関せずといった態度を保ち続けていた妖人がウィンドウから視線をはなした。ゆるり、とした動作で手にした鞘さや込めの刀の柄つかに手をやる。静かに腰をおとす、とともに、ぶわっと膨ふくれ上がるような妖よう気きが妖人の肉体より迸ほとばしった。
「撃うて！」
　エージェントたちが光弾を撃ち放つ。
　同時に妖人が、たっ、と地を蹴けった。次の瞬間、妖人の姿がその場より消失する。
　と、見えたのは錯覚。妖人は高く跳躍していたのである。跳ぶ、というよりか飛ぶ、というのが相応ふさわしい跳躍を見せた妖人は空中ですでに抜刀していた。
　着地、と同時にその場にいたエージェントを一人、頭頂から股下まで一気に両断する。
「なっ!?」
　両断されたエージェントは自分の身に何が起こったのかわからないような顔をしたまま、左右に分かれ、光の粒子となり消えていった。
「くそっ！」
　近くのエージェントが光弾の灯ともった右手を向ける。が、遅い。妖人は、身を低くしたままそのエージェントにぐんっと接近する。そのまま止まることなく横っ腹を切って抜けた。倍速再生するような超スピード。妖人の回線速度はエージェントたちを明らかに凌りよう駕がしていた。
　一時、とっ、と音を立て、停止した妖人は、ちらと数人のエージェントが一塊となっているあたりへと視線をやる。
　身を低くした姿勢で光弾の弾道を縫ぬい、エージェントのグループ

へと疾風のごとく駆けてゆく。妖人の超速に対応しきれないエージェントの間を黒い旋風のようにジグザグに移動する。
「なっ？　え？　なっ？」
　困惑の声をあげたエージェントたちの身体からだに一本の線が浮かび上がった。
　ある者は肩口から脇腹にかけて、ある者は頭頂から股下にかけて、ある者は右脇腹か左脇腹にかけて。その線を境にエージェントたちの身体がずるりとスライドする。
　妖よう人じんの刀によってエージェントたちはすでに両断されていたのであった。
　ちんっ、という鍔つば鳴なりの音。と、ともにエージェントたちの身体が一斉にくずおれ、砂人形が風化するように光の粒子となって消えてゆく。
　妖人が再び刀に手をやり、腰を落としはじめる。目標を見定めるように視線を右手に向けた。
　その先にいたエージェントたちが妖人の攻撃に備え、防衛プログラムを構築させようとする。だが、彼らへの攻撃は思いもよらぬところからやってきた。
「なっ、なんだぁ！」
　エージェントたちの背後より、彼らを圧おし潰つぶすようにワームどもが雪な崩だれ込んできたのである。そう。敵は妖人一人ではない。数百というワームたちがすでにエージェントたちを取り巻いていたのだ。妖人へと意識を奪われ、背後が無防備となっていたエージェントたちをワームどもは、嬉き々きとしてハサミの餌え食じきとし、メモリを食らっていく。
　慌ててワームへと対応するエージェントたち。そこへ妖人が刀を振りかざし疾しつ駆くしてきた。
　冷静さを欠いたエージェントたちは、妖人によって面白いように首しゆ級きゆうを上げられていく。
　次々と殺傷されていく同僚を助けようと遠方より他のエージェント

たちが妖人へ向けて光弾を放つ。が、妖人の高速移動する肉体を捉えることができない。光弾は虚むなしくマップ内のオブジェクトに着弾して弾け飛ぶ。

そして、後列に退避していたエージェントたちにもワームは押し寄せてくる。

ワームを迎え撃うつため、防衛プログラムを構築。が、プログラムは瞬時にして消え去った。

遥はるか彼方にいたはずの妖人が瞬まばたき一つするよりも早く、後列のエージェントたちに接近し、光壁を切断してしまったのである。

はっ、としたエージェントたちに容赦なくワームたちが襲おそいかかる。ワームのハサミがエージェントたちを一人二人と屠ほふりさっていった。

システム保安要員、優勢となっていたはずの戦況は妖人一人の参戦により、あっという間に劣勢へと変じてしまっていたのである。

「そんな……そんな……そんな……」

妖人の目を覆おおうような殺さつ戮りくをビルの窓より見ていたアンジェラは、戦せん慄りつに身を震ふるわせていた。

先ほど一時湧わき上がった希望はすでに微み塵じんもない。

最強無比な保安局エージェントが、あの妖人物によって、大した抵抗もできずに狩られていっていた。妖人の真黒い人影がエージェントたちの間を駆けてまわるたびに、腕が、首が、胴がぽんぽんと宙を舞い、一人、二人と光の粒子となり消滅していく。

（なんなのよ。なんなのよ。あれ……）

ワームどもが妖あやしげな儀式によって生み出した怪人の常じよう軌きを逸いつした戦闘力もさることながら、その怪人がいったい何者なのかすらアンジェラの理解を超えていた。

（どうしよう。あたし、どうしたらいい？）

アンジェラの顔は蒼そう白はくになり、瞳が落ち着かなく、きょろ

きょろと動く。混乱した頭は冷静さを欠いていた。それゆえに付近への注意もまた散漫になっていたのであろう。アンジェラが、ふと視線をずらした時、窓の外より自分をジッと見つめる存在がいることに気がついた。

うねうねと蟹かにの脚に覆おおわれた顔面、そこに灯ともる禍まがまがしい二つの赤い光。窓の外、ビルの壁面に貼りついていたワームがアンジェラの方へと目線を向けていたのであった。やましげな色を宿した視線が、アンジェラの顔、首筋、胸先、太ふと股もも、華きや奢しやな体を嘗なめるように移動する。

アンジェラが、はっ、と息を呑のんだ時、びしり、と窓ガラスに蜘く蛛もの巣状のひびが広がる。ワームが窓ガラスをぶちやぶり、屋内へと侵入しようとしてきたのだった。

「くっ！」

アンジェラは狭い給湯室を飛び出し、廊下を駆けた。

背後でガラスの割れる音が響き渡り、ワームが侵入してくる。

アンジェラは、駆けながら、撃退プログラムを構築。たっ、と立ち止まり、振り向きざまにワームに向けて光弾を射出する。ぐわっとハサミを振り上げたワームの胸へと光弾は直撃し、ワームは衝撃のまま背後へ倒れ込んだ。

ずずん、とワームの倒れる音が嫌いやに大きくビル内にこだまする。

「しまっ……！」

アンジェラが、口元を引きつらせる。

一瞬、しんっとなったビル内だったが、湧わき上がるようにガシャガシャという硬質な音が方々より聞こえはじめた。異変を察知し付近のワームがこちらへと駆けつけてきているのである。

アンジェラはどうしようか、と左右を見回し、隠れられる場所を探した。先ほどの給湯室ではすぐに見つかってしまうだろう。だが、無情にも迷っている暇は与えられなかった。

廊下の遥はるか向こう側の角より、五、六体のワームが姿を現す。

アンジェラを視認すると、身み悶もだえるように顔面の脚を激しくうねらせた。美う味まそうな処女の肉体を発見し、貪欲な興奮を覚えたのだろう。発情期の獣のごとく、猛然とこちらへと突撃してきた。もう考えている場合ではない。アンジェラはとにかくワームとは逆方向に廊下を駆けるしかなかった。

廊下の突き当たりに達すると上りと下りの階段がある。どちらに行こうかと一瞬迷ったが、上階より、またもガシャガシャというワームの足音が聞こえてきて、アンジェラは下ることを選択するよりなかった。七階、六階、五階と階段を下り続けるアンジェラ。背後からワームの脚が階段を忙せわしなく叩たたく音が迫ってくる。

四階まで下った時、廊下より、ふいに、ぬっ、と一体のワームが姿を現した。

完全に虚をつかれたアンジェラは、一瞬、身が硬直する。

（撃退プログラムを……！）

と思った時にはすでに遅い。

ぶんっ、と振り上げられたワームのハサミが横殴りにアンジェラの左脇腹にぶちこまれた。

アンジェラの細い体が跳ね飛ばされて、宙を舞う。

どこかの地面に叩たたきつけられることを予想したアンジェラだったが、その代わりにふわっとした浮遊感が身を包む。と、思う間もなく、ぐんっ、と落下する感覚。

アンジェラの飛ばされたのは、一階のホールから五階まで続く吹き抜け部分であった。

四階から一階のホールまで一気に落下してゆく。だんっ！　と激しく床に激突し、アンジェラの体が跳ね転がった。生身の肉体でないため痛みもなければダメージもない。ただ、落下した時の空気の圧迫感と、驚きが瞬時、アンジェラの思考を停止させてしまっていた。

（ああ……このまま寝ていたい）

などという場違いな思いが一瞬頭を過よぎったが、周囲から聞こえてくる不吉な音にアンジェラはすぐさま我われに返った。

ぎちぎちぎち……　ぎちぎちぎち……

慌てて身を起こしたアンジェラは己おのれを取り巻く絶望的な光景に一瞬、眩暈めまいを覚える。

一階ホール。すなわち感染者キヤリアたちが妖あやしげな踊りを踊っていた場所であった。

今、この場所は、壁面という壁面にワームが貼りつき隙間なく覆おおっている、その数、二十や三十を優に超えていた。ワームで覆われ、うぞうぞと絶えず蠢うごめく壁はさながらバロック建築の歪ゆがんだ彫刻壁画を思わせ、一種異様な魔界の芸術作品のごとくアンジェラの目に映った。

ワームの巣。アンジェラはその真ん中に投げ込まれてしまっていたのである。

奥にワームが群がり、山となっている場所があった。そのワームの山の上に、三つ、黒い影法師が立っている。感染者キヤリアたちの舞踊の末に生み出された例の妖よう人じんたちだ。妖人たちはまるでワームどもの支配者のごとくそこに立ち、落下してきたアンジェラを冷然と見下ろしている。

ホール中のワームたちが、申し合わせたように一斉に首をアンジェラへとねじ向けた。その瞳に猛悪さとともにどこか好色な色が宿っている。ふいに巣穴に迷い込んできた可か憐れんな乙女おとめの柔肌を、乱暴にしゃぶり、嘗なめ尽くし、味わい尽くしたいという淫いん猥わいな欲望を漲みなぎらせているのだ。

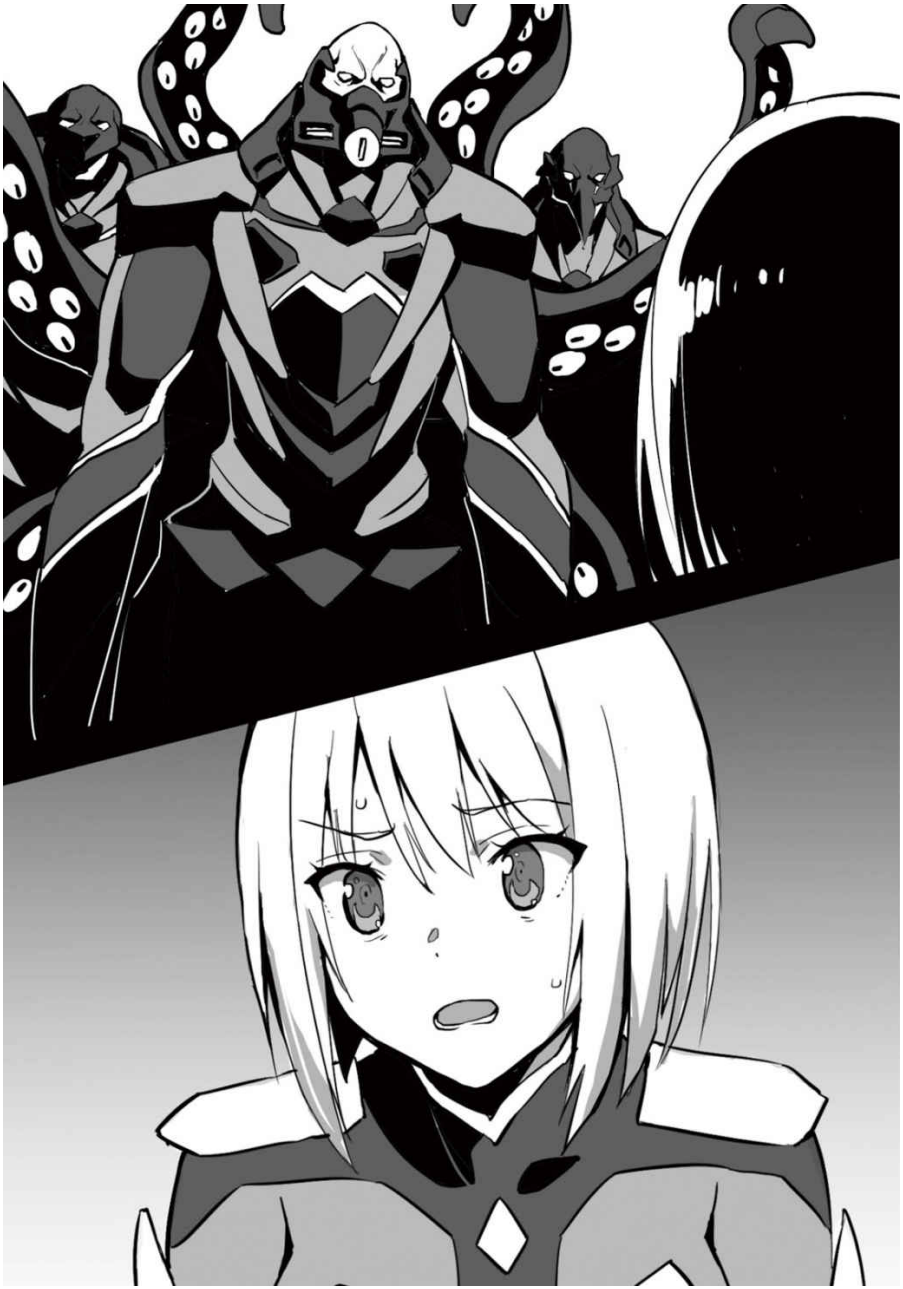
何十という卑ひ猥わいな視線に、アンジェラの体は、隅から隅まで晒さらし者にされ、視し姦かんされるような怖おぞ気けを覚える。アンジェラは、恥部を隠すように、ぎゅっ、己が身体からだを抱きしめた。

滾たぎる欲情を抑えきれないとばかりに、がちがちとワームどもがハサミを打ち鳴らす。一体、一体、壁面より身をはなし、アンジェラへの距離を徐々に縮めてきた。獰どう猛もうな淫いん獣じゆうの群れに、怯おびえる少女アンジェラは身を竦すくませ、嬲なぶり者にされ

る時を待つより外ほかない。
　一体のワームのおぞましい顔が頭上に迫った。涎よだれを思わせる得体の知れぬ分ぶん泌ぴつ物ぶつが、アンジェラの頭にしたたり落ちる。ぬるぬるとした粘液は、アンジェラの金髪を流れ、顔を、胸を、股こ間かんを、太ふと股ももを汚してゆく。吐き気を覚えるような恐怖と気色悪さに身の震ふるえが止まらなかった。
　もはや絶体絶命である。撃退プログラムを構築しようとする気さえ起きない圧倒的な絶望感。
「ちょっ……、なんなのよ……」
　ひどく理不尽な思いがした。このワームや妖よう人じんたちは何者で、なんのためにこんなことをしているのか。そんな意味不明な存在にどうして訳も分からないまま殺されねばならないのか。
「なっ……なんでなのよ。あっ……あなたたちいったい何者なのよ！」
　アンジェラは恐怖と怒りとが、ない混ぜになった叫びを迸ほとばしらせた。
　と。
　アンジェラの叫びに反応したかのように、ワームたちの動きがぴたりと止まる。
「え？」
　アンジェラは呆あつ気けにとられる。気味の悪い沈黙がホールを支配した。
　妖人のうち一体、蛸たこの触腕のようなものを背中から生はやした者が、二、三歩、アンジェラの方へと歩んでくる。そして
『キュルキュルキュルキュル……』
　妖人の白いマスクの口部より発されたのは、高速再生された音声データであった。喋しやべったのである。妖人の回線速度がアンジェラよりも上回っていたため、早送りされて聞こえたのだ。
　アンジェラは、一瞬困惑したが、自身の記憶領域に保存された音声を減速して再生させる。

『01100101100011000001110101001100001010011001010101100110001
　数字の羅列。二進法の原始的なマシン言語であった。あまりに原始的すぎてアンジェラに内蔵された翻訳ソフトに僅わずかな思考時間が生じる。やがて翻訳された言葉はこう語っていた。
『質問を受け付けた。回答する。我われ々われは〈ノア・ノア〉プロジェクトを完かん遂すいするために作成された四つのソフトウェアのメインプログラムである』
　その嗄しわがれた野太い声は、どこか妙な違和感を伴って聞こえた。感情の──いや、心そのものの籠こもらぬ声色。入力した質問に会話インターフェースが自動的に回答した。そんなふうである。
　アンジェラは理解した。目の前の妖人は自我や意志を持ったパーソナリティではない。何者かによって作成された、ただのソフトウェアなのだ、と。
　妖人はさらに言葉を続ける。アンジェラの翻訳ソフトはリアルタイムシステムで自動的に最適化され、減速、翻訳というプロセスを省き、ダイレクトで妖人の言葉を伝えてくれていた。
『我々は、それぞれが別々のソフトウェアである。だが〈ノア・ノア〉プロジェクトの完遂のために行動し、時に連携するようにプログラミングされている。四つで一つのプログラム。それが我々。各々の識別名は……』
『ストリックランド』
『ダーク』
『ゴギャン』
　一体一体がそう名乗った。
『そして、今はこの場にいないが、もう一体、シャルルがいる』
　それは、ビルの外で、エージェントたちと交戦している妖よう人じんのことだろう。
　まるで人が名乗りを上げるようなその様子に、アンジェラは、妖人たちが自我を持たぬプログラムであることをしばし忘れてしまう。だが、すぐに我われに返る。

「ソ、ソフトウェアのメインプログラムですって？」
　ゴギャンと名乗った妖人が仮面のような白面を頷うなずかせた。
『その通り。我々は、〈ノア・ノア〉プロジェクトを完かん遂すいするために、この電脳空間内において増殖し、拡散する。データを書き換え、我々の目的達成のためのソフトウェアを作成し、活動させる。我々四体はそれら増殖・拡散させたソフトウェアを統括し、適切な指示を与えるために作成された疑似知性体である』
　アンジェラは一瞬、ゴギャンが何を言っているのか分からなかった。
（目的達成のために増殖、拡散する。……データを書き換え、新たなソフトウェアを作成し……活動。それを統括する疑似知性体……）
　その言葉を噛かみ砕いているうちに意味が理解されてきた。



自己増殖・拡散──つまり感染プログラム。データを書き換え目的達成のためのソフトウェア──つまりワームの作成。それらを統括する疑似知性体……。

「つまり、あっ、あなたたちが市民に感染してワームに変えている!?　悪マ性ルソウフエトアの本体!?」

対話を行うだけの高度な人工知能を有した感染プログラム。そんなものが存在していることにアンジェラは戦せん慄りつした。ゴギャンは、狼ろう狽ばいするアンジェラを冷たく見据える。

『悪マ性ルソウフエトアと呼ばれることは、大変遺い憾かんである。また、我われ々われの作成したソフトウェアをワームと呼ぶことも受け入れかねる。この電脳空間内に居住する知性体は我々の目的に対して非協力的である。我々が作成したソフトウェアを消去し、今現在もまた我々の活動を妨害している』

「当たり前でしょう！　市民を食らってメモリを奪う存在なんて容認できるわけがない！」

アンジェラのうわずった叫びをまるで意に介さず、ゴギャンは淡々と言葉を続ける。

『我々がこうやってパーソナルイメージを作成し、実体をもったのは、我々のプロジェクトを妨害する存在を撃退するとともに、この電脳空間の住人たちと交渉するためである。我々はできれば平和的にプロジェクトを達成したいと考えているのだ』

「平和的ですって……？」

市民をワームに変え、暴れさせ、エージェントたちを惨ざん殺さつし、それで平和的も何もあるまい。

「あ、あなたたちの目的ってなんなの？　〈ノア・ノア〉プロジェクトって何？」

震ふるえるアンジェラの問いにゴギャンは即答した。

『楽園の再現』

それは悪魔的な風ふう貌ぼうをした妖よう人じんたちには明らかにそぐわない言葉であった。

『我々はこの電脳空間内に楽園を創造する。それが〈ノア・ノア〉プロジェクトである』
　アンジェラはワームたちが南国の風景らしきものを作成していたことを思い出す。つまり、それが疑似知性体たちのいう楽園なのか。
『ゆえにおまえたち、この電脳空間内の住人と交渉したい。この空間内の全記憶領域を我々の楽園創造のために明け渡すのだ』
　当然のように言ったゴギャンの言葉にアンジェラは絶句した。
「全記憶領域!?　……ディーヴァの全メモリ。全市民のメモリを大人しく渡せっていうの？」
　全市民、地上へと移住しろ──といっているのでは、おそらくないだろう。全市民、ワームに食わせろ、そういっているのである。ゴギャンは、あくまでも淡々とした声でこう答える。
『それを実行するのが我々の存在意義である。要求に応じない場合、セキュリティプログラムを発動し、全力でおまえたちを殲せん滅めつする』
　それは、感染プログラムからディーヴァ市民全てへの宣戦布告とも受け取れる言葉であった。
（おかしい。こいつらはおかしい……）
　アンジェラは、恐怖とともに眩暈めまいを覚える。この疑似知性体どもは、まるで知的に、論理的に話しているようだが、その実は人間とは全く異なった理屈、観念で話しているのだ。
　ディーヴァ市民全てを食らわせろなどという要求をまるで当然のことのように提示してくる。
　交渉──といったが、絶対に交渉など成り立ち得ない。滅ぼさねばならない。滅ぼさねば、こちらが滅ぼされる。そういった存在なのだ。
「誰なのよ……。いったい誰があなたたちみたいな存在を作成したの……？」
　恐ろしさに震ふるえるアンジェラの声に、妖よう人じんはしばし沈黙する。その後、こう回答した。
『その質問への回答はブロックされている。パスコードの提示を要求

する』
「パスコード？　ふざけないで！」
『コードを受け付けた。〈パスコード・フザケナイデ〉……認証中……パスコードが間違っている。質問に答えることはできない。警告アラート。連続で三回パスコードを間違えた場合、質問者を本プロジェクトの妨害者とみなし、セキュリティを発動する』
　会話が成り立たない。それでいて圧倒的な力をもった存在を前にして、アンジェラは恐怖を通り越し放心状態になっていた。
　アンジェラの精神状態などまるでお構いなしにゴギャンが、やや強い口調でこう問うた。
『我われ々われの要求を受け入れるか？』
　アンジェラが黙していると、さらにゴギャンは問い詰めるように同じことを繰り返す。
『答えろ。我々の要求を受け入れるか否か？』
　アンジェラに放心することを一切許さない、そんな口調だった。
（どうして……どうしてあたしがそんなこと答えなきゃならないのよ……）
　この答えいかんでディーヴァの行く末が変わるのか。
　いや、変わらないだろう。感染プログラムにディーヴァを明け渡すなど、アンジェラがなんと答えようと有り得ることではない。徹底抗戦。それ以外には有り得ない。
　だが、それでもアンジェラは答えることができなかった。ここでしてしまった発言が何か大きな影響をディーヴァに与えてしまうのではないか。そんな思いが湧わいてきてしまう。
　いや、そもそもここでアンジェラが何か答えたら、今現在のアンジェラの身はどうなるだろう。是ぜと言おうが非ひと言おうがアンジェラの周りを取り囲むワームどもに貪むさぼり食われる運命なのではなかろうか？　それとも答えによっては助かるのだろうか？
　決断する。そんな当たり前のことができない。思えばアンジェラは今まで大きな決断をしてきたことがなかった。自意識が生まれた時に

はすでにシステム保安要員としての適性が認められ、何の疑いもなくそれを目指してきたのである。
　以前、メットがこう言ったのを思い出す。
　―つまり君は、適性を認められたから言われるままにシステム保安要員になり、そして言われるままに働き続ける。目的もなく永遠に。
　今なら分かる。目的もなく、言われるままに行動してきたアンジェラは、いざ決断しようとした時に弱いのである。信念を持たない。決断するための基準を持たない。
（いや。もう、いや）
　アンジェラは首を振った。決断などしたくない。誰かに委ゆだねてしまいたい。だけど、委ねるべき人物はここに一人もいないのだった。
『答えろ。受け入れるか、否か』
　ゴギャンがさらに強く尋ねてきた。
　アンジェラは口をぱくぱくさせた。答える言葉など決まっているわけがない。
（助けて……。もういや。もういやだ……！）
　アンジェラが心中でそう叫んだ時である。
「はっはっはっはっはっはっはっはっはっは！」
　ふいに緊迫した雰囲気をぶち壊すような高笑いが起こった。
　ワームたちが声のした方へと首を向けた。ゴギャンら三体の疑似知性体たちもそちらへと白い顔を上げる。
　アンジェラはこの笑い声を幻聴かと思った。ここにいるはずのない人物の声だったのである。
「アンジェラ君。随分と悩んでいるじゃないか」
　いや。幻聴ではない。この憎ったらしい声はよく知ったあの人物に間違いない。
　アンジェラはそちらを振り返り叫んだ。
「メット！」
　吹き抜けのホールの少し上。二階部分の手すりにもたれ、赤毛長身

の人物が大きな胸をそらせて笑っていた。大嫌いな先輩エージェント。メット・マルティネスに間違いない。
　メットはアンジェラの方を見下し、にやりと笑った。
「君には答えられんだろうさ。よし。私が代わりに答えてやろう。おい。そこの悪マ性ルソウフエトア！」
　呼びかけられ、ゴギャンが僅わずかに真っ白い眉み間けんに皺しわを寄せた。
「貴様らのくだらん要求などのめるものか！　交渉というものをもう少し勉強してから出直してきたまえ！」
　爽そう快かいに言い放ち、再び高笑う。ゴギャンはしばし、沈黙する。感情を持たぬ疑似知性体が呆あつ気けにとられる、などということはあり得ないが、アンジェラにはそのように見えた。
『交渉は決裂した。これより攻撃を開始する』
　ゴギャンは短く告げ、胸前に真黒いウィンドウを呼び出し、コマンドを送る。
　途端、今まで大人しくしていたワームたちが一斉に動き出した。大波が押し寄せるように中心にいるアンジェラへと殺到する。
「きゃっ！　きゃああっ！」
　悲鳴をあげたアンジェラの周囲に瞬時にして燃え上がるような光壁が出現した。
　ばちんっ、とワームどもが光壁に激突し、弾かれる。
「おい。うちの可愛かわいい後輩に手を出すんじゃないぞ」
　凄すごみを帯びたメットの声。メットがアンジェラへ掌てのひらを向けている。アンジェラを守るために防御プログラムを発動したのだ。
　ワームたちは、二度、三度、光壁にハサミを叩たたきつけ、それが無む為いであると悟ると、ハサミを光壁にねじりこみ、防御プログラムを破壊しようとしはじめる。
　が、それよりも早くメットが、二階の手すりを蹴けり、跳躍していた。

スレンダーな長身が宙を舞う。空中ですでにメットは撃退プログラムを構築している。一度に五つの光球を瞬時に生み出し、光壁を破壊しようとするワームたちへと撃うち放つ。

タッ、とアンジェラの真隣りにメットが着地したのと同時に、光弾に打ち抜かれたワームたちが、ぱっ、と花火のように爆散した。

「メット……」

アンジェラの呼びかけにメットは例の皮肉な笑みで応える。いつもは腹立たしいはずのその笑みが今はひどく頼もしく見えた。

「どうしてここに……？」

「このビルを中心に複雑な通信電波が飛び交っていた。ワームどもを統括し遠隔操作する存在がここにいるんじゃないかと思ってね。他の連中に先駆けて来てみれば、ふふん、案の定だ。まさか高度な人工知能を有した疑似知性体が四体もいるとはね。しばらく隠れて様子を窺うかがっていたら、一体が出ていき、君が降ってきたってわけさ」

余裕でそう説明するすぐその横で、ばちばちばちと激しいショート音がする。

ワームが光壁を破壊しようとしているのだ。

「おっと、話はまた後だ」

メットの顔が、引き締まる。鋭い視線を、三体の疑似知性体へと向けた。

「おい。悪マ性ルソウフエトアども。このディーヴァのメモリは、私のものだ。貴様らにくれてやるぶんなど毛ほどもないのだ。貴様らを一体残らず滅ぼし尽くす。今、駆除してやりたいところだが、生あい憎にく、可愛かわいい後輩を逃がしてやらねばならん。今は見逃してやる。首を洗って待っていろ」

これだけの数のワームに取り囲まれ、見逃してやる、とはなんとも不敵な言い様である。

三体の疑似知性体は、口の端はを冷ややかに歪ゆがめた。メットの言を戯たわ言ごととして一笑に付すように。

ばちっ……ばちばちばちっ……！

光壁はもはや限界であった。
「行けるか？」
メットがアンジェラへと声を送った。アンジェラは強く返事する。
「はい！」
「よし」
メットが頷うなずくとともに光壁が弾け飛んで消えた。
「君は私を援護しろ！」
叫ぶやいなやメットの周囲に無数のウィンドウが出現した。それらが全て光球へと変化する。光球は散開し、どっ、と押し寄せるワームどもに次々とぶち当たっていく。
「行くぞ！」
メットの動きが加速され、出口方向へと駆けだした。アンジェラはその背中を追ってゆく。
駆ける二人の前に数体のワームが壁のごとく立ち塞ふさがった。
アンジェラとメットは、疾走しながらすでに撃退プログラムを起動している。
「邪魔だ」
光弾が乱れ飛び、ワームへと直撃する。嘶いななき、仰のけ反ぞりながら、ワームたちが爆散していった。だが、次から次へとワームたちは、押し寄せ壁となってくる。
二人は、激しく振り回されるハサミの群れを縫ぬって躱かわし、手早くプログラムを起動させ、撃うち放つ。消滅してゆくワームの放つ光の粒子に突っ込むようにして前進を続けた。
この乱戦の中、アンジェラが、対応できているのは、先行するメットがおおよそのワームを退治してくれているからだろう。
メットは超高速で複雑に動き、ワームの死角に回り込んでは、光弾の餌え食じきとしていく。
メットが駆ける。メットが跳ぶ。メットが回る。メットが撃つ。メットが倒す。
深紅の長髪が炎のように舞い、巨大な胸が艶えん美びに躍る。指先

から光弾を、乳先から色香を発射するメットの猛進撃。使い古された言葉ではあるが、蝶のように舞い、蜂のように刺すという言葉が相応ふさわしい華麗にして猛たけ々だけしい戦闘スタイルであった。

やがて二人はホールを出て、長く暗いビルの廊下へと抜ける。

廊下にはワームはいない。ビルの外まで一気に駆け抜けんと二人は足を速めた。

駆けながらメットがぽつりと言う。

「足をひっぱるなと言ったろう。君に何かあって私に責任がかかったらどうするつもりだ」

相変わらず皮肉っぽい言い方だが、どこかしかりつけるような部分もあった。

「……すみません」

アンジェラは素直に謝った。自分が一方的に単独行動をし、結果、メットに助けられることになってしまったことは十分過ぎるほど反省している。

「私……甘かったです。なんの信念も目的もなく……考えもなしにエージェントになった。それがどんなに甘いことか……思い知りました。私……もう……」

──エージェントを辞めます。

と言いそうになり、その言葉を呑のみこんだ。そんな泣き言は言いたくない。聞かせたくない。そのぐらいの自負心はまだアンジェラに残っていた。

だけど、こんな思いを抱えたまま、本当にエージェントを続けていけるのか、分からない。

やはり、自分はエージェントを辞めてしまった方がいいのじゃないか。そう思い、俯うつむいた時、

「くっくっくっ、はっはっはっ！」

メットが弾けるように笑った。

びっくりしてメットの顔を見ると、その表情は思いの外ほか、優しげで温かい。

「君には目的も信念も必要ないと前に言ったろう。君は君のまま私についてこい。それでいい」
　そこでメットの顔が真剣なものへと変わった。
「私が君を楽園へ連れて行ってやろう」
　前にも聞いたこの言葉。その言葉が以前とは全く違ったリアリティのあるものとしてアンジェラの胸に迫ってきた。
　疑似知性体の問いに何も答えられなかったアンジェラ。メットは颯さつ爽そうと現れ、アンジェラの代わりに疑似知性体たちの言を撥はね退のけてしまった。強い人だ。そう思った。
　その強さに縋すがっていいのか。自分が立って歩んでいく指針となってくれるというのか。
「この仕事が終わったら、君にいろいろなことを教えてやる。いろいろなものを見せてやる。私のもとにいれば君は強くなれるさ。楽しいぞ。ふっふっふっ」
　なんだか、それもいいな、とアンジェラは思いはじめていた。
　やがて二人はビルの外へと抜ける。
　方々で撃退プログラムの光弾が飛び交い、ワームとエージェントたちが交戦を続けていた。未だエージェント劣勢に変わりはないように見受けられる。今、こうやって見ている最中にも一人のエージェントが数体のワームに群がられ、貪むさぼり食われていっていた。
　そんな陰惨極まりない戦場の中、三十メートルほど先に、ひたりひたりとこちらへ歩んでくる人影がある。全身に鬼気を陽かげ炎ろうのごとく纏まとわせた真黒いその姿。右手に無造作にぶら下げた日本刀は赤黒く妖あやしい光を放っている。幾人ものエージェントを、その刀にて屠ほふりさったそいつは、疑似知性体のうちの一体。識別名は確か―シャルルであった。
　真っ白い顔は明らかにこちらへと向けられ、双そう眸ぼうに灯ともった妖よう光こうはメットとアンジェラを射いぬかんとするがごとく輝いていた。
「……こっちを見てる」

メットとアンジェラはともに身構えた。
シャルルは、アンジェラたちまでの距離およそ十メートルほどで立ち止まり、口を開いた。
『他の疑似知性体より通信があった。ビルより出てきた者を消去せよ、と』
シャルルの言葉は、無感情ながら強い威圧感を伴っている。
「ほお。中にいた連中は私の言いようによほど腹を立てたらしいね」
メットの軽口にもどこか緊張が含まれている。
『我われ々われは疑似知性体である。腹を立てるなどといった感情は持ち合わせていない。おまえは我々を駆除すると言った。我々の存在を脅おびやかそうとする意志を明確に示した者を優先的に撃退するよう私はプログラムされている』
「はっは。どうやら私は口を滑らせてしまったようだな」
シャルルが刀を脇構えに持っていき、ゆっくりと腰を落としていく。
『おまえを消去する』
シャルルより漲みなぎる妖よう気きが、ぐっ、と濃密さを増した。
「アンジェラ君。君は下がっていたまえ。あいつは私が相手する」
もう、メットの口調からは軽い部分が消えていた。シャルルを容易ならぬ敵であると認識しているのであろう。メットの真剣さに気け圧おされ、アンジェラは無言でメットから距離をとる。アンジェラの内に何か言い知れない不安が過よぎった。その正体を確かめるようにこう尋ねる。
「勝て……ますよね？」
その問いになぜかメットは、すぐに答えなかった。
メットの両りよう掌てのひらの上にいくつものウィンドウやアイコンが出現しはじめ、ウィンドウ上で数列が激しくスクロールしている。すでにメットはシャルルを迎え撃うつためのなんらかのプログラムを構築しはじめていた。
腰を落とし、刀を構えるシャルル。一見、無造作に立っているよう

で、その実、油断なく電脳戦用のプログラムを構築しているメット。
双方の距離およそ十メートル。その十メートルの空間をぐぎゃりと歪ゆがめるような緊迫感。それが徐々に高まり、ついに頂点へと達した時。
シャルルが動いた。
大地をひと蹴けりするとともに射られた矢のごとく猛烈なスピードで突っ込んでくる。
「起動！」
メットが高らかに声をあげた。
瞬時にしてメットとシャルルの間に防御プログラムの真紅の光壁が一度に五つ出現する。
シャルルのスピードは緩ゆるまない。刀を一ひと薙なぎすると目前の光壁を一刀両断。ついで、次の光壁を斜めに斬って捨てる。三つ目、四つ目の光壁をも切断し、ついに五つ目をばっさりと切り割った。が、そこにいるはずのメットの姿がない。
はっ、として一瞬戸惑いを見せるシャルル。その背後から声がした。
「ここだ」
振り向けば凄せい艶えんな笑みを浮かべたメットの姿。その周囲には無数の光球が浮遊している。
「行け！」
散弾銃のごとくシャルルへと光弾が掃射される。シャルルはバック転しながら後退し、その場で飛来してくる光弾を尋常でない剣けん捌さばきで撃ち落としていく。
最後の一弾を撃ち落とすその動作とともにシャルルはメットへと疾しつ駆くする。
再び、その行く手を五重の光壁が遮さえぎった。光壁は目隠し。シャルルの視界を遮り、その隙すきに背後へと回り込むメットの戦術。が、二度も同じ手の通じる相手ではない。
シャルルは光壁に構わず、右手に聳そびえるビルの方へと高く跳躍

する。たっ、と音がし、シャルルは、なんとビルの壁面へ着地した。そこからは光壁の向こうのメットの動きが丸見えである。たたたっ、と壁面を床のように駆け、再び跳躍。

刀を大上段に振りかぶり、メット目がけて落下していく。

思いがけない方向から撃うち落とされた斬撃をメットは身を退いてなんとか回避した。流れる動作でシャルルは一斬、二斬と続けざまにメットへと斬り込んでいく。メットは身を仰のけ反ぞらせ、後退し、幾重にも描かれる斬線をすんでのところで躱かわし続けた。

躱しながらもメットはプログラムを練っていく。掌中に次々と生じてくる光のウィンドウ。

シャルルが袈け裟さがけに斬り捨てんと、刀を振り上げた時、その毛ほどの隙すきをついて、メットは手中のプログラムを発動させた。ぱっ、とシャルルの目前で光の爆発が起こる。

シャルルは咄とつ嗟さに後方へ跳び、直撃を避けていた。再び二名の間に十メートルの距離があく。

接近戦ではシャルルが有利、遠距離戦ではメットが有利。近づこうとするシャルル、遠ざかろうとするメット。その攻防が果てしなく続いていく。

距離を置き、戦いを見守るアンジェラの目に、二名の実力は互角に見えた。

双方、目で追うのがやっとなほどの超高速で動いている。援護しようかと一度は考えたが、とってもじゃないがアンジェラが首を突っ込めるような戦いではなかった。

そんな時、アンジェラの視界の隅に、いやマップ内で戦闘中の全エージェントの面前に、ぽんっ、と軽い電子音とともにメッセージボックスが出現する。中央保安局からであった。それは、テキストと音声によってこう告げる。

『交戦中の全システム保安要員へ告げます。マップ・ナンバーN00138内の感染プログラム汚染率は修復不可能なものであり、味方の被害もまた甚じん大だい。戦闘の継続は人員の損失にしかならない

ものと判断し、中央保安局はマップ・ナンバーN00138の強制削除デリートを決定しました。３００カウントでマップ・ナンバーN00138は削除されます。マップ内にて交戦中の全システム保安要員は速すみやかに戦闘を中断し、３００カウント以内にマップ外へ退避してください』

メッセージが終了するとともに、ボックスが赤く点滅しはじめる。

『３００……２９９……２９８……２９７……』

秒読みが開始された。

「強制削除デリート？」

すなわちこのマップごとワームたちを消し去ってしまおうと中央保安局は判断したのである。

交戦中のエージェントたちを見回すと、その顔にほっとした色が浮かんでいた。もうこれ以上命がけの戦闘を続ける必要がなくなったのだ。だが安あん堵どした顔はすぐに焦あせりに変わる。

３００カウント後、マップ内に存在する全てのデータは削除デリートされるのだ。それはシステム保安要員もまた例外ではない。言ってみれば自爆装置が起動されたに等しいのである。

ワームと戦っていたエージェントたちは、次々と戦闘を放棄しはじめた。それぞれ安全な場所まで退避し、マップ外にアクセスするためのリンクゲートを作成し、次々と脱出していく。

『……１６２……１６１……１６０……１５９……』

強制削除デリートまでの秒読みは早くも１６０カウントを切っている。

アンジェラは、メットへと視線を戻した。メットは、未だ激しい攻防を繰り広げている。

ぱっ、と今までメットへと執しつ拗ような突撃を繰り返していたシャルルが、メットから距離をおくように逆方向へと飛んだ。

二十メートルほどの距離を隔て、ぴたりと、そこで停止する。

「どうした悪マ性ルソウフエトア。来ないのかい？」

メットが、シャルルを挑発する。

もっとも、感情を持たぬ疑似知性体が挑発になど乗るはずもない。シャルルは、メットの言を無視するように表情のない白面をビルの屋上へと向ける。そこに三つの人影が佇ちよ立りつしていた。

それは三体の疑似知性体。ゴギャン、ダーク、ストリックランドであった。

三体の背後の空間に黒い闇の穴がぽっかりと口を開けている。三体は、眼下のシャルルへと軽く視線を投げると、穴の内へと己おのれの漆しつ黒こくの肉体を溶け込ませ、消えていった。マップ外へとアクセスするリンクゲートである。

疑似知性体たちもマップの強制削除デリートを感じ取り、脱出を開始したのだ。三体の疑似知性体たちは、シャルルを置いて、マップの外、広大なディーヴァのいずこかへ姿を晦くらましたのである。

「くっくっくっ。おい。シャルル君。どうやら君は仲間に置いて行かれたようだぞ」

メットが、シャルルを嘲あざ笑わらう。シャルルは、メットへと視線を戻し、こう言った。

『当仮想空間が強制削除デリートされる旨を傍ぼう受じゆした。私は、これより自身の存在の保護を第一次優先事項とし、戦闘を中断。脱出活動に移行させてもらう』

メットは、シャルルの言葉を一笑に付すように鼻で笑う。

「つまり、大人しく逃がせ。そう言いたいのかい？」

メットがシャルルへと指先を向ける。そこには、撃退プログラムの光球が煌こう々こうと灯ともっていた。

「逃がすわけがないだろうが！　たわけ！」

メットの指先より光弾が発射された。一発ではない。二発、三発、四発、と次々に連射されてゆく。四発の光弾はそれぞれ別の軌道を描き、シャルルへ飛来する。

シャルルは、くるりと向きを変えると、高速で光弾の射程範囲より離脱した。シャルルの駆け抜けた後の地面に光弾が一つ二つと着弾し、火花をまき散らす。

シャルルは一度立ち止まると、その場でリンクゲートを作成しようとしはじめた。シャルルの背後の空間に黒い穴がぽつりと穿うがたれ、徐々に広がりゲートへと成長しようとしている。

だが、メットはそれを許さない。すかさず距離をつめると、光弾を放ってシャルルの作業を妨害する。回避したシャルルの作成途上だったリンクゲートが塞ふさがっていき消えた。

メットは逃げ続けるシャルルを追って次々と光弾を放つが、シャルルの異常な反応速度は、着弾を許さない。

再開された戦闘をアンジェラは冷や冷やとした心持ちで見守っていた。

『……１１１……１１０……１０９……１０８……』

すでにカウントは１００をきろうとしていた。もうほとんどのエージェントが脱出を終えている。メットとアンジェラも早く脱出しなければ強制削除デリートに巻き込まれてしまうだろう。

「メット！　もう限界です！　諦あきらめましょう！」

ついに我慢の限界に達したアンジェラのあげた声は悲痛なものになっていた。

「嫌いやだ！　君は先に逃げていたまえ！」

メットが同時に三つの撃退プログラムを構築しながら、叫び返した。叫ぶと同時に射出する。

シャルルが一旦立ち止まり、体とともに刀を回転させ、光弾を弾き落とした。その勢いのまま、方向を変え、右手に疾走しはじめる。

「くそっ！」

メットが舌打ちし、次弾の構築を開始した。

すでにシャルルは、戦意を失い、メットから離れ、リンクゲートを作成しようとしている。

だが、それをどういうわけかメットは許さず、シャルルのゲート作成を妨害し、延々、追いかけ回し続けているのだ。

「なんでよぉ！」

アンジェラは、ブロンドの髪を掻かきむしり、叫んだ。

すでに、アンジェラは、いつでも脱出できるようにリンクゲートを構築している。だが、何度も自分の命を救ってくれた先輩を置いて逃げるわけにもいかない。

「なんで……なんで逃げないのよぉ」

アンジェラは、地じ団だん駄だを踏むような勢いで声を漏もらした。

実際、メットがシャルルをここまで執しつ拗ように追いかけ続ける理由が理解できない。撤退を命じられ、そして敵も戦意を失っている今、自分自身の命を危険に晒さらしてまで戦闘を続けるのは、どう考えても割に合わない行為であった。理解しがたい。全く理解しがたかった。

『……０６４……０６３……０６２……０６１……』

無情にもカウントが一分を切る。このままでは、アンジェラもマップの強制削除デリートに巻き込まれてしまう。もうこれ以上他人の心配をしてはいられない。

「メット！　もう駄目です！　逃げましょう！」

これが最後の忠告とばかりにアンジェラは声を張り上げた。

「まだだ！」

メットが、掌中にウィンドウを幾重にも出現させながら叫び返す。視線は、複雑に動き回るシャルルに向けられたままだ。

「どうしてです！　なんで逃げないんですか！　中央保安局が撤退命令を出しているんですよ！　これ以上戦う理由なんてないんですよ！」

喚わめいたアンジェラの問いに、メットは思いもかけない言葉を投げ返してきた。

「中央保安局の撤退命令など知ったことか！」

「ええっ!?」

駆けながらメットは、自分の周囲に何十というウィンドウを呼び出した。その全てが、一つ、二つ、と光球に変化してゆく。

「手柄だ！　私が手柄を得るためにこいつを倒すんだ！　それが我わ

れ々われの最優先事項。そう最初に言ったろうがあ！」

　叫ぶと同時にメットは、自分の周囲の三十発を超える光球を一気にぶっぱなした。

　メットの言葉にアンジェラは、愕がく然ぜんとする。

　今、シャルルは、己おのれに撃うち込まれてきた三十発の弾丸を、避よけ、躱かわし、弾き落として飛びまわっていた。その動きはすでに逃亡一点に転じている。戦闘を放棄し、マップからの脱出に専念したいのだ。それとは対照的にメットの瞳には、一切の迷いが見られなかった。手柄のためにシャルルを討ち果たす。ただそれだけに向けられていたのである。

（ああ。なんて……なんて……）

　そこで、意外にもアンジェラはこう感じてしまった。

（……なんて強い人なの）

　敵から決して逃げようとしない真っ直すぐな瞳。この切迫した状況の中でも揺らぐことのない集中力。手柄を立てるために、たったそれだけのために命まで危険に晒さらす、その執念。

　それは自分の持ち得ないものを持っている人間への憧れか。それとも、圧倒的な信念の強さへの憧れか。震ふるえるような感動にアンジェラは痺しびれる思いがしたのである。

　アンジェラの目に、今のメットの姿がひどく──気け高だかく映ってしまった。

　呆ぼう然ぜんとするアンジェラへメットの鋭い声が飛んでくる。

「何をぼやぼやしている！　君は早く脱出しろ！」

　シャルルを追撃しながら叫んだメットの言葉に、はっ、と我に返るアンジェラ。

　アンジェラは逡しゅん巡じゅんした。メットを置いてはいけない。こんなにも気高く戦っている人物を置いて自分だけ逃げるなど……

「できません！　私も残ります！　私も戦います！」

『……０３３……０３２……０３１……０３０……』

　カウントは三十秒を切った。リンクゲートを作成するのならばこの

あたりが最後のチャンスである。しかし、未だメットは戦闘をやめようとしない。ビルの壁面に飛び移り、逃げ、駆けまわるシャルルへと光弾を撃ち込んでいく。ビルの窓が次々と割れ、ガラスを散乱させる。

「いいから行け！　君がいると集中できん！」

　メットは、アンジェラへ叫ぶ時間も惜しいとばかりに、必死にシャルルへ放つ光球を作り出していく。その必死さ、執念にアンジェラは、不吉なものを感じた。ここでメットを置いて逃げたら、もう二度とメットには会えなくなる──そんな嫌いやな予感が胸を過よぎる。

「駄目です！　メットが残るなら私も……」

　そこまで口にした時、メットの掌てのひらがアンジェラへと向けられた。あっ、とアンジェラが目を見開いたのも束の間、メットの手より光り輝く四角形が迸ほとばしり出た。

（強制リンク!?）

　そう思う間もなく、アンジェラの体に四角形が直撃する。

　ぱっ、と目の前が白く染まった。吹き飛ばされるような体感覚とともに、アンジェラの五体が四角形に溶け込んでいく。

　染まった視界が、色を取り戻した時、アンジェラは、暗い、トンネルのような空間にいた。

　マップの外、エリア同士をつなぐ回線チヤネル内である。メットによって、アンジェラは、強制的にマップ外へと脱出させられたのだ。

　視界の先に光り輝く巨大な球体が見える。N00138マップであった。

「カウントは……!?」

　アンジェラは、己おのれの顔の横に浮かぶメッセージボックスに目を移す。

『……０１２……０１１……０１０……００９……』

　もう十秒を切った。メットが脱出している様子はない。

「メット……！」

　もう引き返す時間などない。アンジェラは、マップ内を確認しよう

とウィンドウを呼び出す。焦あせる指先は、タッチする手際を悪くするばかり。作業が手間取る。
「メット……メット……メット……！」
　アンジェラの声は半なかば泣き声に近いものとなってきた。
『……００５……００４……００３……００２……』
「メット……メット……メット……メット……！」
『……００１……０００』
　巨大な球体に一瞬、ざざっ、とノイズが走ったかと思えば、上部より、さーっ、暗闇に塗りつぶされるように消えていく。N00138マップが消去されたのだ。
「メットぉぉぉ！」
　アンジェラの叫びは、悲痛に回線内に谺こだましていった。

◆

「まったく……削除デリートされちゃったのかと思いましたよ」
　アンジェラは、ぼやき声をあげた。
　ここはメットのプライベートホームスペース。白壁に青空のバーチャル映像を映す窓が一つ。他にはソファが一つ、机と座ざ椅い子すが一つずつあるだけの殺風景な部屋。
　座椅子にふんぞり返るように座るメットへ、ソファに腰掛けたアンジェラは先ほどからずっと不平を口にし続けていた。
「まあ、いいじゃないか。疑似知性体を一体駆除できたし、二人とも無事だったのだしね」
　メットが座椅子を回し、アンジェラへと身体からだを向け、にへら、と色っぽい顔つきに似合わない無邪気な笑みを浮かべる。
「それは、結果オーライだっただけですよ。ぎりぎりで脱出できるようにリンクゲートを先読みプレロードしていたなら、していたって先に言ってくださいよ」
「あの状況でそんなことを説明する余裕なんてなかっただろう」

メットはシャルルとの戦闘を開始する前に、中央保安局が、いずれマップごとワームを削除デリートするであろうことを予測していたのである。そして、あらかじめマップ外へのリンクを張り、ショートカットで脱出できるようにしていたのだ。

つまりメットが行っていたのは、シャルルの撃退ではなく足止め。強制削除デリートぎりぎりで、もうシャルルがリンクゲートを作成する時間がなくなるまで足止めし、自分はショートカットで脱出する。はじめからそういった算段だったのであった。

だが、それを教えられていなかったアンジェラは、心底メットを心配したのである。もう死んでしまったのかと思い、泣いてしまうところだった。

恨みがましく睨にらみつけてくるアンジェラをからかうようにメットは言う。

「まあ。そう怒るな。君だってさんざん私に迷惑をかけたじゃないか」

「うっ……」

それを言われるとぐうの音ねも出ない。勝手な行動をし、助けられたのは二度だ。しかし、それをここで持ち出してこなくてもいいじゃないか。

言葉に詰まったアンジェラは、話題を逸そらそうと、別の話を絞り出す。

「で、でも、どうしてですか？」

「ん？　何がだい？」

「あなたの実力は他のエージェントなんかよりも圧倒的に高い。なのにどうして三等官止まりなんです？　あなただったら二等官や、もしかして一等官にだってなれるんじゃないですか？」

アンジェラは、メットの電脳戦技術が、群を抜いていることが、ずっと疑問であった。他のエージェントが全く歯が立たなかった疑似知性体シャルルと互角に渡り合った時など、異常だとすら感じた。これだけの実力の持ち主が三等官にとどまっているのは、どう考えても

おかしい。
　メットは、ふっ、と笑った。それは、今まで見せたことのない寂しげな笑いである。
「……私の出身はどこだ？」
　そのメットの一言によって、アンジェラは、悟った。メットの故郷、すなわち地上。
「ディーヴァは実力主義の世界。といっても地上出身者は、まだまだ強い偏見を抱かれている。私がなかなか出世できんのもそのあたりに理由があるのだろうな……」
　メットのなんとない語調からは、その心情までは推し量れない。だが、アンジェラは、メットの出世や手柄に固こ執しつする理由が分かったような気がした。
　なんだか静かになってしまったアンジェラを見て、メットが、気を取り直すようにこう言った。
「出世で思い出した。今回の件で私たちはメモリを増量してもらえるかもしれんぞ」
「え？　そう言われたんですか？」
　そんな話は初耳だったので、アンジェラは驚き、目を丸くした。
　むふふふとメットは意地の悪そうな声で笑う。
「いいや。だが、感染プログラムの本体を一体処理したんだ。報酬として私も君もメモリを増量してもらえる可能性は十分にある。それに今回の戦いで、余計なエージェントも減って、メモリにも余裕ができたはずさ。これは期待大だな。むふふふ」
　アンジェラは、啞あ然ぜんとした。なんということだ。メットは仲間の死を悼いたむどころか、それによって分配されるメモリが増えるかもしれないと考えているのだ。
（なんて人なの……）
　アンジェラは嘆息して頭を抱えた。
（だけど……）
　にやにやと笑い続けるメットに熱い眼まな差ざしを向ける。

　アンジェラは、この人についていこうと決めていた。メットは、アンジェラの持たない信念や、強さを持っている。人間性はともかく、自身の職務に対する執念、その能力の高さは本物だ。それに、メットの強さに自分が感動を抱いたのも事実。
「さて」
　話を切り替えるようにメットの口調が真ま面じ目めなものに変わる。
「疑似知性体の一体は倒したが、残りの三体は取り逃がしてしまった。やつらはまだディーヴァ内のどこかに潜ひそんでいる。この三体──そして感染プログラムを作成し、発信した者は、私たちが必ず見つけ出し、私たちの手で捕まえる。決して先を越されてはならない」
「それもメモリのためですか？」
「当たり前だ。はじめに言ったろう？　我われ々われの最重要事項は？」
　言ってごらんというようにアンジェラに視線を送る。アンジェラはしぶしぶ答える。
「メモリ」
「正解だ」
　メットは豪快に笑った。

第二章《コラッツの密林》

　中央保安局のシステム保安要員、エリザ・オリヴィエ三等官は一人、森の中を彷徨さまよっていた。

　熱帯性のこの森は、巨大な羊し歯だ植物、蛇へびのようにうねり絡まる蔦つた植物などが繁茂し、人の歩く道とてない。長大な木々の間から射し込む日光はほんの僅わずかで、薄暗く不気味だった。

　踏みしめる肥葉はずぶずぶと足を埋もれさせ、じめじめと蒸し暑く湿気を帯びた空気は時に靄もやとなり、時に霧となり、エリザに不快感を与えていた。

　同行した仲間のエージェントとはぐれ、もうかれこれ三十分もこの密林を彷徨い続けている。先ほどから通信を送り続けているのだが、以前変わらず返信はない。

　この森のどこかに先日N00138マップで猛威を振るった疑似知性体の一体が潜ひそんでいるかもしれない。そう思うと不安が胸に湧わいてくるのを抑えることができなかった。

（一旦ここを出た方がいいのかしら？）

　そんなことを考えはじめた時である。前方の樹間の薄闇の中で、ふっ、と白い物が動いた。

「誰!?」

　一瞬、新手のワームかと思った。エリザは、この森に侵入してからすでに五体ほどのワームと遭遇し、交戦していたのである。エリザは十分に警戒を払いながら、薄闇へと近づいていく。

　そこに一人の女性が立っていた。

　年の頃は二十代半なかばぐらい。陽に焼けた小麦色の肌。薄青い花柄のシティパレオを身に着け、頭にはハイビスカスの花を模した髪飾りをつけていた。

　こんな陰いん鬱うつな森の中よりも太陽照りつける浜辺の方が似合いそうな人物である。

　女性は、うふふ、と無邪気に笑うとこんなことを言った。

「これ。私の地元でとれたフルーツよ。一つどう？」
　言ってマンゴーを差し出してくる。
　エリザは女性の屈託のない笑顔に惹ひかれ、ついそれを受け取ってしまった。
　だが、それをすぐに背後に放り投げ、きっと女性に鋭い視線を向ける。
「あなたは誰。ここで何をしているの？」
　エリザの問いを受け女性は、うふふと笑った。そして
「これ。私の地元でとれたフルーツよ。一つどう？」
　と先ほどと全く同じことを言ってマンゴーを差し出してくる。エリザは受け取ってしまうが、すぐにそれを投げ捨てた。
「いらないわ。それより質問に答えなさい」
　少し語調を強め、問い詰めるように言う。だが女性は、やはり、うふふと笑い、こう言った。
「これ。私の地元でとれたフルーツよ。一つどう？」
　マンゴーを差し出してくる。受け取ったエリザは、地面に叩たたきつけるようにして捨てた。
「いらないって言ってるでしょ！」
　苛いら立だち、怒鳴ったエリザだったが、女性はまるでそれを意に介さず、うふふと笑い
「これ。私の地元でとれたフルーツよ。一つどう？」
　と、またしてもマンゴーを差し出してくるのだ。
　マンゴーを受け取ったエリザは、何か気味の悪さを感じはじめた。なぜ、先ほどからこの女性は同じ言葉、行動を繰り返しているのだろう。よく考えてみれば、この女性、その笑顔、口調、マンゴーを差し出す動作、どれをとっても寸すん分ぶん違たがわず同じことを繰り返しているのだ。
「い、いらないわ……」
　エリザはマンゴーを投げ捨てた。すかさず女性がうふふと笑い
「これ。私の地元でとれたフルーツよ。一つどう？」

　マンゴーを差し出してきた。エリザはやはりそれを受け取ってしまう。
（なんで……？　なんで、あたし必ず受け取っちゃうの……）
「これ。私の地元でとれたフルーツよ。一つどう？」
　またしてもエリザはマンゴーを受け取っていた。すぐにそれを投げ捨てる。
「いらないわ！」
　だが、女性はまたも、うふふと笑ってマンゴーを差し出してきた。
「これ。私の地元でとれたフルーツよ。一つどう？」
　またしてもエリザはマンゴーを受け取っていた。すぐにそれを投げ捨てる。
「いらないわ！」
　だが、女性はまたも、うふふと笑ってマンゴーを……

　アーハン製造工場の緩衝記憶装置バツファ内に正体不明のマップが出現したという情報がアンジェラとメットのもとに入ったのは、二人がメットのプライベートホームスペースで打ち合わせをしている最中であった。
「バッファ内？　どうしてそんなところに？」
　アンジェラは座ざ椅い子すにゆったりと腰掛けるメットへ紅茶を持ってきながら怪け訝げんそうに尋ねる。
「ふむ」とメットは、中央保安局より送信されてきたメッセージボックスの内容を確認しながら曖あい昧まいな返事をした。
　バッファ―すなわち緩衝記憶装置とは、機械に情報を送り、作業をさせるにあたり、情報の送信速度と機械の動作するスピードの差を補うための一時的な記憶領域である。
　リアル世界での活動を目的に製造される機動外骨格スーツ〈アーハン〉は、ディーヴァのハードな工場施設で作られている。バーチャルでない物理的なボディを有するアーハンは、物理的な工業機械によっ

て組み立てられるわけだが、工業機械に設計データを送信し、動作させるにあたり、やはりバッファが必要となる。
　そのバッファ内にマップ──つまり仮想空間が出現したというのだ。
「誰がなんの目的でそんなところにマップを作成したっていうんですか？」
「さてな。それが分からんから事件になっている」
　メットは、メッセージボックスの内容を確認し終わりアンジェラへと向き直った。
「マップの存在が確認されたのは今から十三時間前。アーハン製造の機械が動作不良を起こし調査したところそんなものがあったことが分かったらしい」
「いったい、どんなマップが？」
「それも分からんそうだ」
「え？」
　アンジェラは、ぽかんと口を開けた。
「調査されたんですよね？　どんな仮想環境かぐらい分かるんじゃないですか？」
「外部からサーチしようとしてもブロックされていてマップ内部の状況を探ることができない。そして直接マップ内に調査しに入ったものは通信が途絶え、誰も戻ってこないそうだ」
「そんな怪しいマップ、さっさと強制削除デリートしてしまえばいいのに……」
　先日、アンジェラたちが疑似知性体と交戦したマップを中央保安局はその権限の下に強制削除デリートした。それと同じことをその正体不明のマップに対しても行えばいいのである。
　だが、メットは首を振った。
「マップ内に調査に行った者が戻ってきていないと言っただろう。むやみに削除デリートすれば帰ってこない調査員も一緒に削除デリートすることになる」
　確かに──とアンジェラは頷うなずいた。

　内部の人間と通信が取れない状態では先日のように退避勧告を出すこともできない。
「それにね。そのマップは強制的に削除デリートしようと思ってもできない可能性があるぞ」
「え？　どうしてです？」
「考えても見たまえ。内部の状況確認も通信もブロックされているマップだ。許されているのは内部への進入だけ。つまりそのマップはディーヴァの制御を離れ、独自で存在しているということになる。強制削除デリートすらもブロックされてしまうかもしれない」
「そんな。ディーヴァ内にあってディーヴァの制御下から外れているなんて、そんな存在……」
　アンジェラは、はっ、とした。メットが得たりとばかりに頷く。
「そう。あの悪マ性ルソウフエトアどもだ。未だ所在不明の三体の感染プログラムの疑似知性体。おそらくその一体が、アーハンの設計データに擬態してバッファ内に侵入し、マップを作成したのだ」
「だとしたら……」
　アンジェラはそこで最悪の可能性を想定した。
　アーハン製造工場のバッファ内が制御下に置かれているということは、悪マ性ルソウフエトアの意のままに動くアーハンを製造してしまうことだって可能なはずだ。暴走した疑似知性体がアーハンを乗っ取り、物理的な破壊活動をディーヴァに対して行うことだってできるということ。
「……だとしたら危険です」
「そうだ。一刻も早くそのマップを作成した疑似知性体を駆除し、マップを削除デリートせねばならない。すでに何名かのシステム保安要員が先行してマップに入っている。早く行かねば私たちより先に別のエージェントが退治してしまうかもしれん。手柄を立てそこなうぞ」
　メットとアンジェラは素早く立ち上がり、バッファまでのリンクアドレスによってゲートを立ち上げた。

問題となっているアーハン製造工場のバッファへはリンクアドレス一発で行くことができず、いくつかの中継地点を経由しなければならなかった。

そもそもアーハン製造工場のある工場エリアは、普段、富裕階級のディーヴァ市民が立ち入るようなエリアではない。行き来するのは、工場のソフトウェア内で労働する下層階級の者たちぐらい。つまるところ辺境の地、といっていい。

工場エリアの回線チヤネル内を飛ぶように移動するアンジェラとメット。

暗く長いトンネルのような空間をアンジェラたちとともにいくつものパケットデータが星粒のように流れていく。工業関係の送信データであろう。

見回せばそのデータ群に混じっていくつかのドット絵のごとき粗雑な市民パーソナリティが移動しているのを見ることができる。工場内で働く労働者たちだ。

彼らはメモリを僅わずかしか割り振られない下層階級の者たちである。所有する少ないメモリ量ではアンジェラやメットのような画素ピクセル数の高いパーソナルイメージを持つことができないのだ。

彼らが持たないのは精巧な外見だけではない。視覚、聴覚などの五感も一般的なディーヴァ市民より劣っているはずである。彼らが有するのは、工場内での職務に必要な感覚ソフトのみ。

工業部品の良・不良を見分け、選別する感覚。工業ロボットのバグを捜索する感覚。工業機械を作動させたり停止させたり、僅かな動作調整を行う感覚。

それぞれが、自身の仕事に必要な感覚ソフトのみを持ち、さながら機械部品やコンピュータの一アプリに等しい暮らしを余儀なくされている。

「哀あわれだな」

メットが呟つぶやいた。

「哀れ？」
　アンジェラが不思議そうに聞き返す。
「哀れ、というより恐ろしいな。ここで働く者たちも、かつては私たちと同じで十分なメモリを与えられ、当たり前の暮らしを送っていたのだからな」
　メットの言っていることは確かだ。
　能力至上主義のディーヴァでは無能な者にはメモリが与えられない。ディーヴァ内のメモリは有限だ。能力のない者にまで割り振るメモリはないのである。ここの労働者たちは、能力が低く向上心の薄かった市民の成れの果てなのである。さらに無能で怠たい慢まんが過ぎる者の中には、メモリを奪われるだけでなく圧縮されて半永久的に活動を停止させられる者だっているのだ。
「私たちだって一つ間違えば、彼らのレベルまで落とされることだってありうるんだ」
　メットの言葉がいささかシリアス過ぎるように感じ、アンジェラは笑った。
「私たちシステム保安要員がここの労働者レベルまで一気に落とされるなんて、よっぽど大きなミスを犯さない限りありえませんよ」
「そう楽観もしていられんぞ」
　メットの声に少し鋭いものが含まれてきた。
「ディーヴァの人口は日に日に増えてきている。圧縮保存される者もいるが保存するのにもそれなりの記憶領域が必要だ。情報生命体であるディーヴァ市民には寿命が存在しない。人口は増え続ける一方だ。遠い未来、ディーヴァのメモリは不足することになるだろう」
　メットが切れ長の瞳をアンジェラへと向ける。
「能力のある者がメモリを与えられ、能力のない者はメモリを奪われる。将来人口が増加していけば、競争率はどんどん高くなり、メモリを与えられるのは一部の天才に限られてしまうだろう。そうなった時、君は勝ち残っていく自信があるのかい？」
　アンジェラは、返答に窮し、話題を変えようとこんなことを言って

みた。
「なんだか〈トイフェル〉みたいな考えですね」
〈トイフェル〉とは、ディーヴァ内で語られる都市伝説である。
　ディーヴァ上層部内にそういう名の組織が存在し、増え続けるディーヴァの人口問題を懸念し、秘密裏に人口統制を行っている。すなわち密かにディーヴァ市民を陰で削除デリートする組織が存在する──という噂うわさが昔から巷こう間かんで囁ささやかれているのだ。
　もっともそんな組織の存在は確認されておらず、削除デリートされた市民の話も聞いたことがない。所詮は都市伝説なのだ。だが、その言葉を耳にした時、メットの顔が目に見えて青くなった。
「その名を不用意に口にしてはいけない」
「え？」
　メットの表情は真剣そのものであった。
「〈トイフェル〉なんて組織は存在しない架空のもの。そう思っているのかもしれんが、私らシステム保安要員の間では実在する組織だと認識されている」
「実在……するんですか？」
　メットは首を振った。
「わからん。だが〈トイフェル〉が関わっていると思われる事件は過去にいくつか存在している。それに深入りしすぎたエージェントが行方不明になったこともある。命が惜しかったら〈トイフェル〉なんて言葉は口にしないことだ」
　念を押すように言うとメットは強引に話を打ち切った。

　回線チヤネル内を進むと大きな発光する球体のようなものが見えてきた。それこそが、二人の目指すアーハン製造工場のバッファであった。二人は進入しようと球体へと近づいていく。
　直前になって、二人の前にドット絵の姿をした男が現れ、行く手を塞ふさいだ。
「コノ先ハ、アーハン製造用ノ緩衝記憶装置デス。設計データ以外ノ

立チ入リハ禁止サレテオリマス。マタ、現在、不測ノ事態ニヨリ、当緩衝記憶装置ハ閉鎖サレテイマス。御利用ニハ、ナレマセンノデ、ドウゾ、オ引キ取リクダサイ」

ドット絵の男は四角形の口よりピコピコした電子音でそう告げてくる。この男はバッファに送信されてくるデータをチェックするセキュリティ代わりの職務を担っているのだろう。

メットは指先にウィンドウを出現させる。それはシステム保安要員の身分証であった。

「バッファ内に出現したマップの調査に来た。入れてもらいたい」

男は四角いドットの眼で身分証を見つめた。

「認証シマシタ。ドウゾ中ニオ入リクダサイ」

男はあっさりと二人の前から身を引く。まるでＡＩのような対応である。実際、自我を持っているというだけで所有する感覚ソフトも与えられた仕事も機械並みなのだろう。

「あの人、疑似知性体の侵入には気づかなかったんですかね？」

「疑似知性体はよほど巧妙に設計データに擬態していたのだろう。私たちが見つけられないのに、あの男に見つけられるはずもないさ」

やがて二人はバッファの光球へと接触した。

二人の身体からだが光に溶け込み、視界もまた真っ白い光に染まっていく。

アンジェラの感覚ソフトがマップ内部の空気感を感じ取りはじめた。

湿度の高いじっとりとした空気。気温もまた高い。

光が薄れるとともに周囲の風景が明らかになってくる。丈たけの高い椰や子しの木が群生しているのが見えた。濃緑色の巨大な葉をつける名も知れぬ植物や、うねりのたくるような蔦つた類が繁茂している。どこからともなくけたたましく鳥の鳴く声が絶え間なく聞こえてくる。

森──それも熱帯性のジャングルの中にアンジェラはいた。

圧倒されて辺りを見回すアンジェラへメットが声をかけてくる。

「今、通信を送ってみたがやはり先行しているエージェントからの返信はないな。なんらかの方法でマップ内での通信が遮断されているみたいだ」
　メットはすでに行動を開始していた。アンジェラもまた慌てて作業を開始する。
「マップの全体像をサーチしてみます」
　アンジェラはウィンドウを呼び出し、コマンドを入力する。だが、返ってきたのは『サーチ不能』のメッセージだけだった。
「サーチできません。これじゃあ、何をあてにして行動すればいいのか分かりませんね」
「足を使うしかないな」
　アンジェラは耳を疑った。
「この広大なマップ内をあてもなしにただ歩き回って疑似知性体を探すんですか!?」
「仕方ないだろう。他に方法がないのだからな。地上では探し物は必ず足を使ったものだ」
　メットはさっさと先へ進みはじめる。ぐずぐずしているアンジェラを振り返り、声を投げた。
「心配するな。ここは、バッファ内の僅わずかな記憶領域に作られたマップだ。見た目ほど広大ではない。効率よく行動すればすぐに全体像を把は握あくできるようになるはずさ」
「は、はい……」
　しかたがない、といった雰囲気丸出しでアンジェラがついていこうとしたその時であった。
　シュルシュルシュル！
　アンジェラの足首に何か縄のようなものが巻きついてきた。
　ぐいっ、と足を引っ張られ、アンジェラは派手に転倒する。
「きゃっ！　いったい何？」
　素すっ頓とん狂きような声をあげ、自分の足に目を移す。足首に緑色の蔦つたが絡みついていた。蔦は右手の藪やぶの奥より伸びてい

る。わさわさとその藪が揺れた。
「何？　なになに!?」
　藪が割れて出現したのは、逆立ちした人間の下半身だった。が、ただの下半身ではない。皮ひ膚ふが気色の悪い緑色をしている。腰の周りから毒々しい深紅の花弁状のものが生じ、覆おおっていた。股の間に縦にアーモンド型の大きな穴が開いていて、食虫植物を思わせる棘とげのような牙がのぞいている。巨大な花に擬された人間の下半身──そういった姿だ。
　キシャァァァッ！
　金切り声のごとき咆ほう哮こうを迸ほとばしらせ、人間花がアンジェラへと跳びかかってきた。
「わっ！」
　悲鳴をあげたアンジェラの目前で、口を有する妖花が光弾に撃うち抜かれ、弾け飛んだ。はらはらと花弁を散らしながら巨大花は光の粒子となって消滅してゆく。
　アンジェラを救ったのはメットの放った撃退プログラムであった。
「ワームだな」
　メットの声は憎ったらしいほど冷静だった。どうやらアンジェラが人間花に襲おそわれている間、じっくりとそれを観察していたらしい。驚きの余り腹を立てることすら忘れていたアンジェラは、震ふるえる声で「わっ……ワーム？」と聞き返す。
「い、今までの蟹かにみたいなワームとは、随分と形状が違いますが……」
「形状は違うが、人を襲おそって食らおうとするところは同じだな。おそらく敵さんは例の蟹かに状のワームの特性をこちらがすでに理解しているとふんで新手のワームを作成してきたようだ。だが、これではっきりしたな。このマップは、やはりあの疑似知性体どもが作成したものだ」
　アンジェラは改めて先ほどの人間花のようなワームを思い出す。あんな悍おぞましいヴィジュアルをした化ばけ物ものは悪趣味な恐怖体

験プログラムテラー・コンテンツにだって出てきやしない。
「こんなワームが、この森の中にまだまだ潜ひそんで……」
「いるだろうな。先行する保安要員たちは、すでにワームの餌え食じきとなっているのかもしれん。十分気をつけて進みたまえ」
「は……はい……」
　アンジェラは立ち上がり気おくれした足取りでメットの後に従った。

　ぬかるむ湿った土を踏みしめ、行く手を遮さえぎるように繁茂する植物群を掻かき分け、アンジェラとメットは道なきジャングルをひた進む。
　ぶんぶんと顔の周りを鬱うつ陶とうしく飛び回る藪やぶ蚊かや、ともすると足を伝って這はい登ってこようとする赤あか蟻ありの群れは無害なバーチャルイメージに過ぎない。刺してくることも噛かみついてくることもないが、羽音の音声データ、肌に触れる蟻の触覚データは、十分不愉快だった。
　しかも油断のならないことに、森のあちこちには、先ほどアンジェラを襲ったようなワームが潜んでおり、樹上から、沼沢から、藪の内から、ふいに妖あやしい姿を躍りあがらせ、アンジェラたちに襲いかかってくるのである。そういった者たちを撃退しながら進むこと百二十分。
　メットが急に立ち止まった。
「おかしいな」
　それは蛸たこのようにうねうねとした根を持つ巨樹の前である。
　植物を模したワーム。獣を模したワーム。昆虫を模したワーム。多種多様な姿をしたワームたちが次々と出現するこの人外魔境の探検行に今さらおかしいも何もあったものだろうか。
「見ろ」
　メットが目の前の巨樹を指差した。天を突くようなその巨木は実在の樹木ならば優に樹齢千年にも達しているだろう。

「この樹のオブジェクト。さっきも目にした気がするな。アンジェラ君。君は見覚えないか？」
　メットに尋ねられ、アンジェラは記憶を辿たどる。そう言われてみれば見たような気もした。
「よく見ろ。この蛸みたいな根。間違いない。私たちは前にもこの樹の前を通った」
「一度通った場所に戻ってきている。そう言いたいんですか？　そんなこと、ありえません」
　アンジェラはディスプレイウィンドウを呼び出す。
　ディスプレイに表示されているのは、これまで二人の歩んできた道筋をモデル化した地図であった。通ってきた道程の地図を自動的に作成してくれるオートマッピングソフトである。
　作成された地図は二人がこのマップに入った地点から、今現在立っているポイントまでの足跡をきちんと記している。同じ場所にもう一度戻ってきた形跡は一切見られなかった。
　メットは、しばし何事か考えた後にこう言う。
「少し戻ってみよう」
「戻るんですか？　同じ道を？　それは時間のロスですよ。今は、少しでも未踏のエリアを探索し、マップの全体をマッピングした方が……」
「気になることがある。戻るぞ」
　メットはアンジェラの言を中途で遮さえぎり、すでにもと来た道を引き返しはじめている。しぶしぶながらアンジェラもそれに従った。
　引き返してみても似たような森の景色が続くばかり。メットは何かを気にしているようだが、アンジェラにはこれといった違和感は感じられなかった。
　しばらく後退した後、ようやくメットが歩を止める。
「もう一度、マッピングされた地図を開いてみてくれ」
　怪け訝げんに思いながらもアンジェラは作図されたウィンドウを呼び出してみる。

「あれ？」
　ウィンドウには地図が映し出されなかった。代わりに表示されたのはこんな文字である。
『システムエラー。マッピング中の地図のポイントとポイントが繋つながりません。ゲートなどによる空間移動を行っていませんか？　システムを一旦オフにして再度やり直してください』
　アンジェラは、システムの指示通り再起動してみたが出てきた結果は同じであった。
「どういうこと？　ゲートによる空間移動なんてしてないわよ」
　困惑するアンジェラだったが、メットは「やはりな」と頷うなずいた。
「このマップはマッピングができないようになっているらしい」
「マッピングができない？　そんなことあるんですか？」
「考えられる理由はいくつかある。例えばこのマップは、常に形状を変え続けているのかもしれない。あるいは、森の各所に無作為にリンクが張ってあり、マップ内を彷徨さまよう者は、気がつかないうちにマップのあちこちに飛ばされ続けている可能性もある」
　すなわちこのマップは、入る者を迷わせるなんらかにシステムの働く迷いの森ということか。
　その時であった。
「いらないわ！」
　女性の叫ぶ声が聞こえた。
「何？」
　続いて、
「これ、私の地元でとれたフルーツよ。一つどう？」
　と、言う別の女性の声。
「いらないわ！」
　また同じ声が聞こえた。先ほどと寸すん分ぶん違たがわぬ口調。音量。
「これ、私の地元で取れたフルーツよ。一つどう？」

「いらないわ！」
　また同じ声。まるで壊れたレコードのように同じ言葉を延々リピートし続けている。どう考えても様子がおかしい。
「行ってみるぞ」
　アンジェラとメットは声のする方へと駆けだした。
　行く手を阻害する蔓つる草くさを掻かき分け、二人が辿たどりついたのは、木々の間にぽっかりとあいた広場のような場所。そこに二人の女性がいた。
　一人は、体のラインがわかるぴっちりとした銀色の服を着ている。アンジェラやメットと同じシステム保安要員の制服。亜あ麻ま色いろの髪をした精せい悍かんな顔の女性である。
　もう一人は、薄青いシティパレオを着た女性であった。健康的に日焼けした小麦色の肌。やや茶色味がかった長髪にはハイビスカスの花を模した髪飾りをつけている。その愛らしい顔は微ほほ笑えんでいた。手にはマンゴーが山ほど入った籠かごを持っている。
　パレオの女は、うふふ、と無邪気に笑ってこう言った。
「これ、私の地元で取れたフルーツよ。一つどう？」

マンゴーを一つ、女性エージェントへ差し出す。女性エージェントはそれを受け取るが、すぐに投げ捨て、こう叫んだ。
「いらないわ！」
だが、すぐさま、パレオの女性は、うふふ、と微ほほ笑えみ、
「これ、私の地元で取れたフルーツよ。一つどう？」
と、マンゴーを手渡してくる。やはり、それを受け取ったエージェントは、すぐに投げ捨て、
「いらないわ！」
アンジェラが声をかけようとすると、その肩をメットが摑つかみ、止めた。「なぜ？」といった顔をメットへ向けたアンジェラへ、メットは小声で一言告げた。
「様子がおかしい」
そう言っている間にも彼女たちのやりとりは続いていた。
「これ、私の地元で取れたフルーツよ。一つどう？」
「いらないわ！」
「これ、私の地元で取れたフルーツよ。一つどう？」
「いらないわ！」
彼女らは、自分たちを見守るアンジェラとメットには全く気がつかない様子で延々同じ動作を繰り返し続けているのだった。それだけでも奇怪極まる事態だが、何よりもアンジェラを気味悪く思わせたのは、そのやりとりが寸すん分ぶん違たがわず同じということである。
パレオの女性の笑み。女性保安要員がマンゴーを投げる動作。投げられるマンゴーの描く放物線。毎回毎回同じことを綺き麗れいに再現しているのである。不思議なことに、籠かごの中のマンゴーは一向に減らないし、投げ捨てた先の藪やぶにもマンゴーは全く溜たまっていかない。
「いらな……」
およそ二十回ほど繰り返したところで、メットが女エージェントの肩をぽん、と叩たたいた。
女エージェントはそこで硬直したように動きを止める。メットが強

制的に女エージェントのパーソナルデータを停止状態にしたのだ。女エージェントが停止した途端、パレオの女性もまた、停止する。そのままパレオの女性は、すぅ、と半透明になり、消えてしまった。
「え？」
　アンジェラが驚きの声をあげ、パレオの女性の消えた空間、停止する女エージェント、そしてメットの顔をきょろきょろと見回す。
「いったい、何が起こってたんですか？」
「待ちたまえ。調べてみる」
　メットが女エージェントにちょんと触れた。そこからウィンドウが出現し、拡大される。
『エージェント・コードZQ875267エリザ・オリヴィエ三等官。勤務時間は15128時間』
　女エージェントの個人データである。先行していた保安要員の一人で間違いなさそうだ。
　さらにメットは詳細に女エージェント―エリザ・オリヴィエのデータを解析してみる。
『1421421421

ラッツ数列という」
　すなわち、どんな数字を代入しても最終的に必ず１、４、２の繰り返しになる。そういった数学上の問題のことである。
「エリザ三等官のパーソナルデータは、果てしなくコラッツ問題を計算させられている。そのため無限ループに陥おちいってしまったようだ。だから延々同じ行動を繰り返し続けていたのさ」
「無限ループ……」
　電脳空間であるディーヴァ内では時として無限ループが出現することがある。
　同じ言葉をリピートし続けるＡＩ。何度曲がっても同じ場所に辿たどりついてしまう曲がり路のあるマップなど。これらは、プログラム上のバグ──言ってみれば欠陥商品、欠陥建築のようなもので、あまり起こり得ないことだが珍しすぎるものでもない。だが、自我を持った市民が無限ループに陥るような状態は初めてお目にかかった。
「でも、どうしてこの人はそんなバグに陥ってしまったんでしょうか？」
「決まっている。疑似知性体がこの森に仕掛けた罠わなに引っ掛かってしまったんだ。疑似知性体はパーソナルデータにコラッツ問題を計算させ続けるアプリを持っているようだな。おそらくこの森の各所にそんなトラップが張ってあるに違いあるまい」
　前に戦ったシャルルは、防衛プログラムすら切断する刀状のアプリを武器としていた。今度の疑似知性体はコラッツ問題をアプリとして使うというのか。
「だが、これでマッピングできない謎なぞが解けたな。この森全体がコラッツ問題を応用した無限ループになっている。どんな行動をとっても最終的にループに陥る森。それがこの森の正体だ」
　言って、メットは、エリザの額をぽんっ、と一つタッチする。
　エリザの身体からだが見る間に最小化され、小さなアイコンとなった。メットはそれを指先でスクロールして自身のウィンドウに移動させる。エリザのパーソナルデータを圧縮保存したのだ。

「その人、デバックすることはできないんですか？」
　アンジェラは、心配そうにそう尋ねた。
「ここですぐには無理だな。中央保安局の解析施設で精密検査をした上でなければ……」
「そうですか……」
　少し、考え、アンジェラは口を開く。
「あの。これからどうします？　このマップが無限ループに支配されているのなら、これ以上いたずらに歩き回っても徒労になるだけじゃないですか？　エリザ三等官のこともありますし、一旦、外に出て、対策を立て直した方が……」
「ふむ。君の言う通りかもな」
　メットはアンジェラの提案に頷うなずいた。
　二人は、リンクゲートを作成するためのコマンドをそれぞれのウィンドウに入力する。すぐに空間に四角形の光の門──ゲートが出現した。二人は、ゲートの内へと入っていく。
　視界が一瞬、光に包まれた。そこでアンジェラは妙な違和感を覚えた。
　ぐにゃりと世界が歪ゆがむような感覚。普段、ゲートを使用する時こんな感覚は覚えない。おかしいな、とは思ったがそれほど気にはせず、アンジェラはそのままゲートを抜けた。だが……。
「え？　どうして……？」
　ゲートを抜けた先。なんとそこは、まだ青々とした木々の繁る熱帯のジャングルの中だったのである。マップを出たはずが、またマップ内に戻ってきてしまっていたのだ。
　じわじわと背中に怖おぞ気けがのぼってくる。
「もう一度やってみます！」
　アンジェラは再びリンクゲートを呼び出した。
「待ちたまえ」と、メットが制止するのも聞かず、アンジェラはゲートへと飛び込む。
　またも、ぐにゃりと世界が歪むような感覚がした。

（やっぱり、おかしい。何かの力がリンク先へのルートを歪めている……!?）

そう気がついたアンジェラはゲート内で、半なかば強引にルートを矯正しようとする。

ルートを歪めようとする力。ルートを矯正しようとする力。その二つが押し合い、へし合い、やがて、拮きつ抗こうした時、アンジェラは奇妙な空間へと放り投げられていた。

そこは、大気圏外のような暗い無重力の世界だった。

あちこちに銀色の帯のようなものがいくつも長く長く連なっているのが見える。

ここはマップ内とマップ外との中間に位置する仮想的な空間だった。マップの外へ出ようとする力とマップ内へと押し戻そうとする力が同時に働いたため、アンジェラはこの場所へと入り込んでしまったのである。

眼下に恐ろしく巨大な緑色の輪が見えた。輪の中心には小さな光る球形がある。

それは、先ほどまでアンジェラのいた密林のマップであった。アンジェラはこの空間に迷い込んでしまったがために、マップの全体像を俯ふ瞰かんして見ることができたのである。

「これ……!?」

アンジェラはマップの恐るべき構造を理解した。輪のように見えたが、正確にはドーナツ形をしていたのである。

ドーナツ形の空間。つまり、東西南北、どの方向へ向かおうと必ず同じ場所へ戻り、それを繰り返すことになる、まさにコラッツ数列をモデル化したような空間だったのだ。

そして今、アンジェラのいるこの場所もまたドーナツ形空間の影響下にあった。引力に引っ張られるようにアンジェラはドーナツ形空間の周囲を回らされていたのである。

（脱出しないと！）

強引に空間の外へ出ようと試みる。暗い空間を外へ外へ高速で推進するアンジェラ。

と。前方にアンジェラの先を進む後ろ姿が見える。銀色のぴったりとしたスーツはシステム保安要員の制服であった。ブロンドの髪を揺らせ、何かに急せかされるように、前進している。

アンジェラは、ぞっ、とした。

「あれ……あたし？」

そう。アンジェラの前を進んでいたのはアンジェラだった。見れば、そのアンジェラの先にもアンジェラがいる。そしてその先にもアンジェラが……!?

そこでアンジェラは気がついた。

ドーナツ形空間から離れていたつもりが、空間の周りを回っていたに過ぎなかったのである。異様な形の空間はアンジェラの視線を一周させ、自分自身を見せていたのだ。その視線はさらに一周し、もう一人の自分を。さらに一周し、もう一人の自分を。

視線がループし、合わせ鏡のように無限の自分の姿を前に前に見せられている。

アンジェラはコラッツ数列の影響下にあったのだ。このままでは、永久に空間の周囲を回り続ける存在になってしまう。

やがてアンジェラとアンジェラとの距離が縮まってきた。前には列になるようにアンジェラがずらりとならび、後ろを振り返るとやはり、遥はるか遠くまでアンジェラの列が連なっている。

このまま、自分と自分との距離がゼロになった時、アンジェラはコラッツ数列に完全に囚とらわれた連続する帯状の存在となってしまうだろう。はじめ、この空間に入った時に目にした銀色の帯状のもの。あれは、マップから脱出しようとしたエージェントの末路であったのだ。

「どうすればいい？　どうすれば脱出できる？」

もう目の前に自分の背中が、迫っている。それにぶつかってしまいそうになった刹せつ那な。

ぐいっ、と肩を引っ張られた。
途端、アンジェラの視界が真っ白く染まる。
眩ばゆさに目を閉じたアンジェラが次に目を開いた時、そこは、あの密林の中だった。
「あれ？」
ぽかんとしてアンジェラが目をぱちくりさせる。
「あれ？　じゃない。勝手に行動するな」
しかりつけるような声に振り返れば、メットがアンジェラの肩を摑つかんでいた。
「助けてくれたんですか？」
「マップの周囲を回らされていた君をふん捕まえて、引き戻した。マップの外に出ようとする力には妨害が入るが戻ろうとする力には入らないらしい。先にここを調査した者たちが戻ってこない理由が分かったな。ここは入ることはできても出ることのできない一方通行のマップだ」
アンジェラは、先ほど、自分が体験したことを思い出した。外部に脱出しようとしても戻されてしまう。無理に出ようとした者は、マップ内とマップ外の中間的世界を未来永えい劫ごう周回させられてしまう。背筋が冷たくなるような体験だった。
「な、なんで疑似知性体はこんなマップを作成したんでしょう……!?」
「アリジゴクだ」
そのメットの一言でアンジェラは理解した。
砂上に擂すり鉢ばち状の巣を作り、そこに迷い込んだ昆虫を逃げられぬようにして食らうウスバカゲロウの幼虫、アリジゴク。つまり、この密林マップは疑似知性体の張ったアリジゴクの巣だ。
疑似知性体たちは、この入ることはできるが、出ることのできないマップを作りだし、メモリを大量に所持するシステム保安要員を誘い込んでいたのである。そうして出ることのできなくなった保安要員をワームの餌え食じきにし、メモリを奪っていた。

「ここから出るには……」
「マップの管理者―疑似知性体を倒し、このマップに及ぼされている無限ループの力を解除するしかないだろうな」

二人は、どうすることもできないまま、もう一時間近く同じ場所に留とどまっていた。
マップを出ようにもこの一方通行のマップは、それを許さない。マップを出るためには、このマップを作成した疑似知性体を倒さねばならないが、疑似知性体を見つけるためにマップを捜索しても無限ループの力でもとの場所に戻されてしまう。
それは、どう足あ掻がいてもこのマップを脱出することが不可能ということを意味していた。
アンジェラは泣きだしたい気分になるのを抑えるのに必死である。メットは、しゃがみ込み、地面に棒で何やら図形を書きながら考え込んでいた。メットの顔つきもいつになく神妙であったが、まだ一抹の余裕のようなものを持っているように見受けられる。
その余裕にアンジェラは少々腹立たしいものを覚え、ヒステリックに声を荒げる。
「メット！　これから私たちはどうすればいいんです！」
それは完全に八つ当たりであった。だが、メットは常と変わらぬ対応で「ふむ。そうだな」などと言う。メットは大きな胸を抱くようにして腕を組み、しばし思案する。
「まあ落ち着きたまえ。焦あせったところでいいことは何もない。それにちょうど一つ閃ひらめいたところだ。コラッツ問題は、果たしてこのマップの全てに適用されているのだろうか、とね」
こんなことを言いだした。
「は？　どういうことです？」
「疑似知性体どもの目的はそもそもなんだ？　ワームを使って市民からメモリを奪い、ディーヴァ内に〈楽園〉とかいう仮想空間を作成することだろう」

「そんなことわかってます」
「では、この密林はなんだ？　この密林がその楽園とやらか。いや、違うだろう。前回、強制削除デリートされた都市マップ内でワームどもが作成しようとしていたものは、海や砂浜などの南国の風景だった。この密林もそういった南国の風景の一部なのかもしれんが所詮は一部にすぎない」
「何が言いたいんです」
　疑似知性体の作りたい楽園がどんなものかなど、今の場合全く関係がないのではなかろうか。
「そこで私は考えた。このマップは二重構造になっているのではないか、と」
「二重構造？」
　メットは手頃な木の枝を拾い、地面にドーナツ形の輪を描いてみせる。
「マップの中間世界に迷い込んだ君を助けた時、このマップの全体像を俯ふ瞰かんして見ることができた。このマップはドーナツ形をしていただろう」
　アンジェラは頷うなずく。
「だが、覚えているかい？　ドーナツの輪の中心部分に何かなかったか？」
　アンジェラは、記憶を辿たどり、あっ、と声をあげた。
「光る球形のものがありました！」
「そうだ。それこそが、疑似知性体どもが本当に作りたい楽園マップ。楽園マップは、このドーナツ形の密林マップの中心に作られている」
　先ほど描いた輪の中心部をこつこつと棒で叩たたく。
「疑似知性体はこの中心部分でせっせと楽園を作っている。つまり敵はここにいる」
　一瞬、なるほどと納得してしまったアンジェラであったが、すぐに思い直す。

「それが分かったからなんだっていうんです。結局、この森を抜けないとその楽園マップに行けないってことじゃないですか」
「その通り。私が言いたいのは、それがこの森に潜ひそむワームどもも同じかってことさ」
　そこでようやくアンジェラは、メットの言おうとしていることの意味が理解できた。
　疑似知性体はメモリを大量に所持する保安局エージェントを誘い込むアリジゴクの巣としてこの密林マップを作成したのである。そしてエージェントを襲おそいメモリを奪うのは、この森に潜むワームたち。メモリを奪ったワームたちは、楽園マップを作成するために密林マップを抜けなければならないはずだ。つまりワームたちにはコラッツ問題が適用されずに楽園マップへ抜けるルートがプログラミングされているということである。
「ワームを監視して、その後をつけていけば楽園マップへと抜けられる？」
　アンジェラの顔に明るさが戻ってきた。
「そう気長に構える必要はないさ。ワームのログを解析アナライズし、それを逆に辿たどれば無限ループを掻かい潜くぐるルートもおのずと見えてくるはずだ」
「さっ、さすが！」
　アンジェラはメットに抱きつかんばかりである。メットは、ふふん、と得意げに笑うと、探検隊長のような口調でこう言った。
「さあ行こう。いざ密林の奥へ」

　森の中をしばし捜索すると、すぐに手頃なワームを発見することができた。
　巨大な蛙かえるの姿をしたワームである。
　蛙、といっても皮ひ膚ふは人間と同じ肌の色で、胸に巨大な乳房をぶら下げていた。頭部にはブロンドの毛髪が生えており、一見して極度に肥満した全裸の女性のようにも見える。ワームがもとは人間で

あったということを否いやが応でも思い出させられる悍おぞましい姿であった。
　ワームはまだこちらに気がついていない。大きな目玉をきょろきょろさせ辺りを窺うかがっていた。
　メットが指先にウィンドウを出現させる。撃退プログラムではない。撃うち込んだ相手のログなど、個人情報を盗み見るスパイウェアを構築させているのだ。
　それを赤い光球へと変えたメットは、ワームに向かって撃ち放つ。光球はワームのぬるぬるした皮膚に溶け込んでゆく。ワームがこちらに気がつき重たい首をねじ向けた。
「逃げるぞ」
　メットとアンジェラは素早く撤退を開始する。
　がさがさっ、と思いの外ほか俊敏な動きで蛙型のワームが草木を踏み潰つぶし追ってきた。
「ははっ。来たぞ来たぞ」
　高速で駆けるメットの目前にウィンドウが出現し、ワームの個人データを表示していく。ワームに撃ち込んだスパイウェアが次々とメットに情報を送信しているのだ。
「さて。もう十分だ。アンジェラ君。やってしまえ」
「はい！」
　アンジェラは立ち止まり、背後を振り返る。蛙ワームが藪やぶをぶち破って躍り出てきた。がっぱと開かれた巨大な口がアンジェラを呑のみ込まんと真っ赤な口内を丸出しにしている。
　そこへアンジェラは撃退プログラムの光弾をぶち込んでやった。
　蛙ワームは一瞬、牛のような声で低く嘶いななくと無数の光の粒子となって弾け飛んだ。
「よおし。よくやった」
　メットがウィンドウをいじくりながら満足げにアンジェラを労ねぎらう。
「そっちはどうですか？」

「上々だ。蛙かえる君のログをたんまりいただけた。これを辿たどれば森の奥まで抜けられるはずだ」

メットはワームのログデータを自身のナビゲーションソフトにインストールする。

間もなく、メットの目の前に矢印アローヘツドが出現した。ナビゲーションソフトがワームの辿ってきた道のりをナビしはじめたのである。

二人はナビの指し示すままに森の奥へ奥へと歩を進めた。

ワームは侵入者を捜して森の中をうろつくようにプログラムされていたのだろう。二人はナビによって、何度も同じ場所をぐるぐる回らされるはめになった。

重複する道順を整理するようナビに命じることも可能だったが、もしかすると意味のないように思えるこの道のり自体が無限ループを回避するパスコードになっている可能性もある。二人は根気よくナビの示す通りに進んで行かねばならなかった。

うんざりするような道程を巡らされた後、急に進路が直線的になる。ようやく森の奥へと向かうルートに入ったのだ。

進むにつれ、マップに及ぼすコラッツ数列の影響が目に見えて濃厚になってくる。

小さな青い花に鳥が飛んできて、それを啄ついばむ。鳥は糞ふんをして、飛び去っていく。その糞から小さな青い花が生じてきて、それを鳥がまた啄み、糞をして飛び去っていく……。また、滝があり、水が流れ落ち、川ができている。その川はだまし絵のごとき遠近法のトリックで斜面を登っていき、元の滝へと繋つながる。永遠に循環し続ける閉じた川なのだ。

森を構成するありとあらゆるものがループしている。ナビを外はずれ、これらと接触をもてば、瞬またたく間にアンジェラたちもループに巻き込まれてしまうに違いない。

二人は慎重の上にも慎重を重ね、先へと進んだ。

進むことさらに二時間。周囲の風景に変化が現れてくる。

木の幹と幹の間に切り取ったようにカモメの飛ぶ海辺のバーチャルイメージが出現し、ぬかるんだ肥葉の地面の一部が貝殻まじりのさらさらした砂に変わっていたりした。

薄暗いジャングルのそこかしこに南国の浜辺のバーチャルデータが無作為に貼りつけられた、ある種、幻想的な世界が展開されてくる。

うふふ……うふふ……

ふと囀さえずるような微ほほ笑えみ声が耳に入ってきた。

そちらに目をやれば薄青い花柄のパレオを纏まとった女性が砂浜のバーチャルデータの中に立っている。先ほど、エリザとともにループしていた女性であった。

「今日はごきげんじゃない？　何かいいことがあったの？」

そう言って駆け去ってゆく。追っていこうとするアンジェラの手首を摑つかみメットが制止した。

「構うな。トラップだ。あれを相手にするとエリザ君のように無限ループに陥おちいるかもしれんぞ」

「あの女の人。いったい、なんでしょう？」

「さあな。ワームでもＡＩでもない。ワームの作成したただの３Ｄ映像データのようだ。おそらく触れようとしても触れられん。閉じたシステムに過ぎんな」

触れようとしても触れられない女性のバーチャルデータ。まるで幽霊である。

うふふふ……。

また声がする。今度は別の場所にパレオの女性が立っていた。

「彼？　彼は自室で読書でもしているんじゃないかしら」

そう言って消えていく。

「ねえ」

と、急にアンジェラの耳元で女性の声。ぎょっとして振り向くと、すぐ隣にマンゴーの実のいっぱい入った籠かごを抱えてパレオの女性が立っていた。

「これ、私の地元で取れたフルーツよ。一つどう？」

と、満面の笑顔でマンゴーを差し出してくる。女性の屈託のない笑顔に、つい受け取ってしまいそうになるのを慌てて振り切り、アンジェラは、女性を無視し、進む。

女性はアンジェラのいなくなった空間にマンゴーを差し出すと、ふっ、と掻き消えた。

うふふふ……うふふふ……うふふふ……　うふふふ……うふふふ……うふふふ……

進むにつれ、そこかしこからパレオの女性の微ほほ笑えむ声が聞こえてくるようになる。ジャングルのあちこちに女性が現れては、消え、現れては消えを繰り返すようになってきた。

微笑む者ばかりではない。なかには怒って「どうしてあなたはいつも！」と叫ぶ者もいれば、ただ座り込み、めそめそと涙している者もいる。アンジェラは、まるでこのパレオの女性のスナップショット写真のアルバムの中にでも迷い込んでしまったような錯覚を覚えてきた。

「どうしてこの女性のバーチャルイメージをこんなにたくさん作成しているんでしょう。感染プログラムの作成者にとってこの女性は何か特別な存在なんでしょうか……？」

「かもしれんな。だが、悪マ性ルソウフエトアをばらまいて市民のメモリを強奪するような人物の考えることだ。何かおかしな妄想から好みの女性を仮想空間に作りだそうと考えただけかもしれん。プロファイルの材料にはなるかもしれんが、まあ、考えるだけ無駄かもな」

メットはそう言ったが、現れては消えていく女性のことが気になってしかたがなかった。

（いったい何者なのかしら、この人……）

「私はテウラ」

アンジェラの心を読んだような声が唐突に聞こえてきた。見れば女性の一人がたまたま口にした音声であった。女性は驚いたアンジェラの反応などお構いなしに、すぐに消えてしまう。

（テウラ……）

その名はアンジェラの中に残り続けることになる。

さらにしばらく歩み続けると、少しずつ森のオブジェクトを塗りつぶすように、海辺のオブジェクトの割合が増えてくる。気がつけばいつの間にかアンジェラとメットは、森を抜け、さわさわと波打ち寄せる砂浜に立っていた。

ついに密林マップを抜け、中心部、楽園マップへと辿りついたのだ。

目の前には波の穏やかな海洋が広がっている。

ただ、まだこの海のバーチャルイメージの作成は不完全なようで、海面のところどころに密林マップの高い樹木がぽつんぽつんと突き出していた。時刻は夕方。空は橙だいだい色いろに染まり、水平線に真っ赤な夕日が沈もうとしている。もっともこの空間の時は停止されており、沈みそうに見える夕日は沈みそうなままその場所に硬直しているのだが。

海上では、無数の海鳥がぎゃあぎゃあと鳴き喚わめきながら羽ばたいている。

その中に異常に大きな一羽が混じっているのが目に入った。夕空に鳥形の穴を穿うがったような漆しつ黒こくの影。金属質の羽毛に覆おおわれ、瞳が蘭らん々らんと妖あやしく輝くその妖鳥には見覚えがある。

「いたぞ。親玉だ」

メットが緊迫した声でアンジェラに告げる。

そう。強制削除デリートされた都市マップに現れた四体の疑似知性体のうちの一体。海鳥の嘴くちばしを持つ有翼の疑似知性体──識別名ダークであった。

アンジェラとメットは、自身の周囲に無数のアイコンとウィンドウを出現させ、素早く電脳戦ポジションを構築する。

『侵入者を視認。警告アラート。直ただちに立ち去れ。ここは、楽園の卵殻の内。私は楽園の卵を護まもり、孵かえす者である。直ちに立

ち去らねばセキュリティを発動し、強制的に消去する』
　ボイスチェンジャーを介したような奇怪にけたたましいダークの声。
　ばさり、とダークが一つ大きく羽ばたいた。するとダークの周囲を飛び回っていた海鳥たちが次々と四角形のウィンドウへと変わっていく。ダークもまたこちらを撃退するための戦闘ポジションを構築しはじめたのだ。
「変な小技を使うかもしれん。何かされる前に撃うち落としてしまうぞ」
「はい！」
　言うが早いかアンジェラは右手側面に二重三重とウィンドウを幾重にも出現させた。棒状に連なったウィンドウを遠距離射撃用ライフルのように飛翔するダークへと向ける。
　アンジェラの右目の前に現れた小さなウィンドウはスコープアプリケーション。ウィンドウごしに透かし見るダークは拡大され、飛び回るダークをロックオンマーカーが追いかける。
　ぴぴっ、と音が鳴り、ダークの妖よう怪かいな姿を早くも捕捉した。
　そのタイミングをアンジェラは逃のがさない。すぐさま五、六発の光弾を連続で撃ち放つ。
　ダークは一はばたきの後、旋回して回避行動を取る。が、アンジェラの放った光弾は曲線を描いてダークを追尾する。ダークに着弾、と見えた刹せつ那な。
　ダークを取り巻く漆黒のウィンドウが瞬時に拡大され、シールドとなって光弾を防ぐ。
　光弾の直撃を受けたウィンドウに数列が表示された。
『1421421421

て逆流していく。
　咄とつ嗟さのことで回避しきれず、アンジェラは黒い光弾をもろに指先に食らった。電気ショックのような衝撃が走り抜ける。アンジェラの華きや奢しやな身体からだが後方へ吹っ飛び、砂浜を転がった。
「アンジェラ君！」
　アンジェラは僅わずかの間、朦もう朧ろうとしたもののすぐに立ち上がる。
「大丈夫です」
　身体についた砂を掃はらい、アンジェラは、再び撃退プログラムを構築するためウィンドウを出現させる。指先に出現したウィンドウが光球へと変化し、撃うち放たれる。しかし、狙ねらいが定まらず明後日あさつての方向へと光弾は飛んでいく。立て続けにウィンドウが出現する。指先に出現したウィンドウが光球へと変化し、撃ち放たれる。しかし、狙いが定まらず明後日の方向へと光弾は飛んでいく。立て続けにウィンドウが出現する。指先に出現したウィンドウが光球へと変化し、撃ち放たれる。しかし、狙いが定まらず明後日の方向へと光弾は飛んでいく。立て続けにウィンドウが出現する。指先に……
「え？　え？　何？」
　アンジェラは指先から際限なく発射される光弾に焦あせり戸惑う。
　なんのコマンドも入力しないうちに次々とウィンドウが出現し、勝手に撃退プログラムを構築し、発射していくのだ。ロックオンされるのを待たず連射される光弾はいたずらに何もない空間を駆け抜けて消えていくばかり。
　いくらアンジェラが停止しようと命令を送ってもプログラムは命令を受け付けてくれない。
「止まらない！　どうして!?　どうして!?」
　光弾が発射されるにつれ、アンジェラの視界がぼやけてきた。酩めい酊ていしたような、極度の眠気に襲おそわれたような、そんな感覚がしてくる。まるで光弾の一発一発が、アンジェラの精神を削り、放出させているよう。撃退プログラムの連発が、アンジェラのリソース

を消費させ、オーバーフローを起こしはじめたのだ。
「じっとしていたまえ、アンジェラ君！」
　メットがタックルするようにアンジェラに飛び込んできた。
　アンジェラを砂浜に押し倒すと、絶えず光弾を発射し続ける指先を両手で摑つかむ。摑んだその手の甲にウィンドウが出現し、『緊急停止』の文字を浮かび上がらせた。
　それでようやく光弾の連射が止まり、ぼやけていたアンジェラの意識が鮮明になる。
「アンジェラ君。敵は、君の放った撃退プログラムを解析アナライズし、コラッツ問題に代入して撃ち返してきたんだ。君の撃退プログラムは、今、無限ループに陥おちいっている」
　メットがアンジェラの上から身をどかしながら解説する。
「ど、どうやって止めたんですか？」
「数列が 1 になった時点で自動的に停止するようなプログラムを組み込んだ。撃退プログラムはもう起動させるな。またループしはじめ、オーバーフローを起こすぞ」
　そこまでメットが早口で説明した時、二人の上に巨大な影がかかった。
　見上げれば、すぐ上空にダークの怪奇な姿が両翼を拡げ、旋回しているではないか。ダークの周囲のウィンドウが次々と黒い光球に変化していく。
「走るぞ！」
　メットが叫び、アンジェラの手を引いた。
　ダークの作成した光弾が、ばらばらっ、とそぼ降る雨のごとく砂浜に降り注ぐ。
「起動！」
　叫ぶやいなやメットは頭上に光壁を傘のように構築する。瞬時にして真っ赤な光壁が二人を覆おおう。ばちばちと光弾が、防御壁を激しく叩たたく音。
　が、光壁が、二重三重、四重、とたちどころにループに陥おちい

り、夥おびただしく出現しはじめる。
「くそっ！」
　メットはオーバーフローを起こす前にやむなく防衛プログラムを緊急停止。ふっ、と消え去る光壁。一気に襲おそいくる十数発の凶弾の群れ。
　防御壁を失った二人は光弾の掃射を縫ぬうようにして砂浜を森の方へと駆ける。
　大振りな椰や子しの木が密生する下へと逃げ込むと、ダークはこれ以上の追撃を止やめ、方向転換して、海うな原ばらの上空へと引き返していった。
「思った以上にやっかいな敵だ。無限ループでこちらの装備を無力化していく。丸裸にしたところで私たち自身を無限ループに陥れ、後はワームの餌えさにでもするつもりだな」
　メットが疲れたように言う。生身の肉体ならば息を切らしているところだろう。
　メットは胸前にウィンドウを出現させる。メットの装備しているあらゆるソフトの一覧だ。
「全ての装備にループに陥った場合緊急停止するプログラムを組み込んでおく。アンジェラ君。君の装備にも同じ処置を施ほどこしておくから出してくれたまえ」
　アンジェラは言われるままに全てのソフトウェアの一覧を表示したウィンドウを呼び出した。
　メットはそれらを一括選択し、緊急停止プログラムを施していく。
「心したまえ。ループに陥った時点で装備が停止する。つまり使えなくなる。やっかいなようだがループしたままにしておけばオーバーフローを起こす。つまり私たちが活動不能になる」
　アンジェラが頷うなずく。
「それで……戦略は？」
「早期決着。それだけだな。戦闘が長引けば長引くほどこちらの不利になる。なんとかやつの隙すきをついて撃退プログラムを撃うち込め

ないものか」
　ダークは飛行能力を備えているとはいえ、以前戦ったシャルルほどの速度はもっていない。ならば容易に狙そ撃げきが可能なように思われるが、周囲のウィンドウをシールドにして身を守っている。その反応速度は思いの外ほか速かった。
　アンジェラはしばし考え込み、そして慎重に次の言葉を発する。
「私が囮おとりになります」
「何？」
「私の撃退プログラムは、もう使えませんし、メットは防衛プログラムが使えません。私が奴やつの注意を引きつけます。メットは狙撃に専念してください」
　メットは切れ長の瞳に驚きを滲にじませた。
「危険だぞ」
「危険は承知しています。ですが、これが戦略的に最も有効な手段だと私は考えます」
　メットは困ったような顔で苦笑した。
「この糞くそ真ま面じ目めが」
　吐き捨てるように言うと、
「いいだろう。ただし自身の身の安全を第一優先とすること。いいな？」
「はいっ！」

　アンジェラが椰や子しの木の密集する林から飛び出すと、海上を飛行していたダークが、再びこちらへ妖あやしく燃える瞳を向けてきた。
　ごくり、と唾つばを呑のみ込み、アンジェラは背後の林を振り返る。そこに腹ばいになり、大きな胸を銃座にするような姿勢でスコープアプリのウィンドウを覗のぞき込むメットの姿を確認する。
　メットの狙撃を確実にするためには、もっと敵を引きつけねばならないだろう。

「さあ！　こっちに来なさい！」
　虚勢とともに大声を吐き出すアンジェラ。言われずともダークは長大な翼を羽ばたかせ猛烈な速度で接近してくる。その周囲にはすでに夥おびただしいウィンドウが出現していた。無数の黒いウィンドウを伴って飛翔する怪人は、魔城の城壁に彫刻された有翼の悪魔を思わせる。
　ダークの周囲のウィンドウが鬼火が灯ともっていくように次々と光球へと変わるのが目に入った。
　腹を決めるように大きく一つ息を吐くと、アンジェラは砂浜を海沿いに駆けだした。
　それを追いかけてダークより光弾が放たれていく。駆けるアンジェラの背後の砂浜に着弾し、砂を巻き上げる。なんとか光弾を避よけ続けるアンジェラ。が、ダークもただ、いたずらに光弾を放ち続けるほど単純ではなかった。
　急加速するとアンジェラを追い抜き、駆けるアンジェラの前方から光弾を撃うち放つ。
　唸うなりをあげて前方より飛来してくる無数の光弾。
「くっ！」
　回避が間に合わない。アンジェラは、咄とつ嗟さに防衛プログラムを起動させた。
　アンジェラの前に燃え上がるように光の障壁が出現する。光弾は障壁にひとつ、ふたつとぶつかり炸さく裂れつ音おんとともに消滅した。が、すぐさまその頼りがいのある光壁が、ふっ、と消滅する。光弾によって無限ループとなった防衛プログラムは自動的に停止状態となったのである。アンジェラはさっそく手持ちのカードを一つ失ってしまったのだ。
　すぐに次弾が上空よりアンジェラへと降り注いでくる。アンジェラは砂上を転がってなんとかそれを回避した。
「まだ!?」
　アンジェラが椰や子しの林へすがるような視線を投げた時である。

林から一条の光弾が流星のごとく射出された。メットである。
光弾はアンジェラへ気を取られていたダークの不意をつき、見事にその左脇腹に被弾した。ぼんっ、と衝突音とともに、飛行するダークの体が僅わずかにぐらつく。
「やった！」
歓喜の声をあげたのも束の間。ダークの脇腹に直撃したはずの光球が、その黒いボディ上で拡散され、空むなしく散って消えてしまったのだ。
「ど、どうして!?」
アンジェラのあげた声は林の中のメットに抗議するかのようだった。
「くそっ。撃退プログラムを無力化するプロテクターを全身に纏まとっている。まずそのプログラムを解除しなければ倒せない！」
林の中から返ってきたメットの叫びに、アンジェラは絶望する。だが、絶望に浸らせてもらう暇などなかった。ダークの放つ凶弾がアンジェラへ向け、さらなる追撃を続けてきたのだ。
アンジェラはとにかく逃げ続けるしかなかった。
（解除しなければ倒せない？　解除コードを割り出すのにどれだけの時間がかかるの？）
それは、途方もないことのように思われた。実質、このような切せつ羽ぱ詰つまった状況で複雑なパスコードを割り出すなど不可能である。撃退プログラムをアップグレートし、疑似知性体たちにとって未知の撃退プログラムを作れば倒すこともできるのかもしれないが、外界との通信を遮断されたこの状況では不可能である。
「どうすればいいのよ！」
アンジェラが悲鳴のような声を発した時、メットのもとから再びダークへと光弾が放たれた。
一発ではない。無数の光弾をマシンガンのごとく連射している。
滅茶苦茶に放たれたそれらのいつくかは回避され、いくつかは着弾した。だが、当然のように着弾した光球はダークのプロテクターに阻

はばまれ効果を見せない。
「何やってるの！　こいつに撃退プログラムは効かないんでしょ！」
　アンジェラはメットに向け、ヒステリックな叫びを迸ほとばしらせる。メットが叫び返してくる。
「そうじゃない！　防御プログラムの解除コードを撃うち込んでいる！」
「解除コード!?　わかったの？」
　一瞬、アンジェラの顔に希望が戻ってきたが、メットは即座に否定する。
「わからん！」
「ええっ!?」
「〈総当たりブルートフオース攻撃アタツク〉だ！　もうそれしか方法はない！」
　メットの周囲に百以上のウィンドウが出現する。それらが一斉に光球へと変化し、ダークに向け撃ち込まれてゆく。その一発としてダークに変化をもたらせるものはない。だがメットの周囲には、光弾にして撃ち込んだ先から次々と新しい光球が出現し、また射出されてゆく。
〈総当たりブルートフオース攻撃アタツク〉──もっとも単純かつ原始的な暗号解読法だ。パスワードとして考え得る全てのパターンを片っ端から検証してゆくやり方である。
　今メットは、己おのれの内の演算機能で導き出される限りのあらゆる解除コードをリストアップし、光弾に変え、それを次々とダークへ撃ち込んでいるのであった。しかし、
「ブルートフォース……って。そんな方法で解除できるわけ……」
　ないのである。この方法で割り出せるパスワードは、単純なパスワードのみ。複雑なパスワードならば、リストアップするパターンは膨大な数となる。これを特定するのは現実的に不可能と言っていい。言ってみればメットのこの行為はただの悪あがきに過ぎないのだ。
「無理！　無理！　無理！　無理よ！」

アンジェラの声はすでに泣き声に近いものへと変わっている。
「無理無理抜かすな！　やってみなければわからんだろうが！」
メットのこの根気は果たしてどこからやってくるのだろうか。切せつ羽ぱ詰つまった表情はしているが、まだどこかしら余裕を残しているように見受けられた。
（なんてメンタルなの？　これも地上人だからってわけ!?）
そんなことを内心で叫んだアンジェラであったが、ふと、自分へのダークからの攻撃が停止していることに気がついた。
はっ、として上空を見れば、ダークの飛行する姿が、アンジェラを離れ、メットのいる林の方へと向かっていることに気がつく。逃げまわっているだけのアンジェラよりも、解除コードを次々撃ち込んでくる猪ちよ口こオざいなメットを先に始末すべきだと判断したのだろう。
ダークは、光球の猛射を浴びせんと、すでに数十数百というウィンドウを構築している。
（やばい！）
総当たり攻撃に集中しているメットは恐ろしく無防備であった。ダークが自分へとターゲットを変更したことには、すでに気がついているはず。なぜかメットは退避しようとしない。
「まさか、あの人!?」
メットは相手が近接し、解除コードの命中率があがることを期待しているのだ。事実、ダークが近づくにつれ、メットの射出する光弾の命中率がどんどん上がっているように見える。
だが、たとえ命中率が上昇したところで、解除コードの的中率が上昇するわけではない。すでに何百発という解除コードがダークへと着弾しているが、所詮誤ったパスコードなど蛙かえるの面つらに水を引っかけるようなもの。ダークは、怯ひるむことすらしてくれなかった。
もうダークは上空に迫り、魔影をメットの上に落としている。
表情のないダークの邪悪な瞳の輝きが、メットの矮わい小しような

姿を冷やかに射た。陽かげ炎ろうのごときむんむんたる妖よう気きがダークより発散されているのがアンジェラの位置からも見て取れる。間近にいるメットは果たしてどれだけの圧迫感を感じているものか想像に難かたくない。

『警告。無駄な足あ掻がきである。直ただちに抵抗をやめ、大人しく消去されよ』

　ダークの声は、その甲かん高だかさゆえにメットを嘲ちよう笑しようしているように聞こえる。

「上等だな」

　メットが口の端はをぺろりと嘗なめる。もはやメットは防衛プログラムが使えない。超近距離でのノーガードの撃うちあいをこそメットは望んでいるのだ。だが、それはあまりに無謀！

　ダークを取り巻く無数のウィンドウが輝きを放ち、数百発もの光球へと変化する。

　駄目だ！　その光弾が掃射されれば回避は不可能。メットのパーソナリティを構築するあらゆるプログラムはコラッツ数列に塗りつぶされ、ループに陥おちいろうとする直前に停止することになる。そして二度と再起動されることなく、この魔のマップに呑のまれてしまうだろう。

　メットに勝算があるようには到底思えない。なんたる自じ暴ぼう自じ棄き！

（どうすればいい！）

　アンジェラは、この数秒にも満たない時間で激しく思考した。

　撃退プログラムも防衛プログラムも使えないアンジェラには、もはや手持ちの駒はないに等しい。メットのように総当たり攻撃をしかけるべきか？　いや、それでは今、この切迫した状況を切り抜けることはできそうにない。とにかくメットを救わねばならない。ダークの注意を再びこちらへ向ける必要がある。それにはどうすればいい！

　こうしよう、という答えが明確になる前にアンジェラは行動していた。

自身の装備するソフトウェア一覧を表示したウィンドウを呼び出す。

全ての項目にメットの施ほどこした緊急停止プログラムのチェックが入っていた。

アンジェラはその一つ、すでに停止されている撃退プログラムのチェックをタッチして解除した。もう後には退ひけない。再び停止プログラムを施せるのはメットだけだ。撃退プログラムを起動させたが最後、リソースがつきオーバーフローするまで残弾を撃ち続けるしかない。

指先をダークへと向ける。無限ループに侵おかされた撃退プログラムをアンジェラは毫ごうも逡しゆん巡じゆんすることなく起動させる。アンジェラの指先に夥おびただしいウィンドウが出現した。

「こっち向きなさい鳥野郎！」

獅し子し吼くするとともに光弾をぶっぱなした。

ループされるがままに光弾は連射されてゆく。無限ループによって制御の利きかない撃退プログラムはそう簡単に命中してはくれないはず。だがそれでもいい。敵の注意をこちらに戻せさえすればいいのだ！　その程度。望みはその程度であった。

が、その無心の境地が招いた結果であろうか。

なんとアンジェラの放った光弾の一発がダークへと命中したのである！

本来ならばなんの制御も加えていない光弾を遠距離で複雑に飛び回るダークに命中させることは難しい。では、なにゆえにアンジェラの光弾はダークへと命中したのか。

ダークがメットへ注意を向けていたため回避行動が遅れたというのが一つ。そしてプロテクトがあるゆえに回避を優先しなかったというのが一つ。奇しくも無限ループされたことによって光弾の弾数が増えていたというのが一つ。

だが、そんなことよりも緊急を要するこの一瞬においてアンジェラの集中力が極限まで研とぎ澄まされたゆえと考えるべきであろう。奇

跡的！　だが、奇跡はそれだけに止とどまらなかった。
『けぇぇぇっー！』
　光弾を食らったダークが身を仰のけ反ぞらせ、苦く悶もんの叫びをあげたではないか!?
「効いた？　なんで？」
　当てたアンジェラの方が啞あ然ぜんとしてしまう始末。
　ダークのボディはプロテクトされており、解除しない限り効かないはずではなかったのか？
「解除……？　まさか……」
　アンジェラはメットのいる椰や子しの林に目を向ける。
　そこでメットが親指を一本立て、ぐっ、とアンジェラへ向けていた。
　メットの行っていた総当たりブルートフオース攻撃アタツクがすでに解除コードを割り出していたのである。
　解除コードが予想以上に単純であったのか。はたまた偶然にもメットの総当たりブルートフオース攻撃アタツクが複雑なパスコードを一致させてしまったのか。兎とにも角にも万が一にも有り得ないような奇跡であった。奇跡に奇跡が重なる。奇跡的な上にも奇跡的な結果であった。
『けぇぇぇっー！』
　哀あわれ、ダークは空中でのた打ちまわるように、ばさばさと羽毛を散らしながら海上へジグザグになって飛んでいく。そのどす黒い体表面を撃退プログラムの爽さわやかな光が二度、三度と点滅するように奔はしり抜ける。
　やがて海面へと落下し、水みず飛沫しぶきとともにダークの身体からだは光の粒子となって砕け散った。

　ダークを倒したもののアンジェラの指先からはループされた光弾が未だ発射され続けている。
　アンジェラの視界が霞かすみ、見える景色の解像度が徐々に下がっ

てゆく。意識もまた朦もう朧ろうとしてきた。連射される撃退プログラムにアンジェラのリソースが使い果たされオーバーフローを起こそうとしていたのである。
　メットが砂を蹴け立たててアンジェラへと駆け寄ってきた。
　ふらりと倒れそうになるアンジェラを抱きとめ、そのままアンジェラの指先を握る。と、連射されていた光弾が止まった。メットが緊急停止させたのである。
「無茶をする」
　言ってメットはアンジェラを己おのれの大きな胸に押しつけるように強く抱き直す。
　未だ朦もう朧ろうとする意識の中、アンジェラはメットの水枕のような巨乳の心ここ地ちよさに不思議と心安らぐ思いがした。が、アンジェラは素直になれない性分。
「無茶なのは、メット、あなたでしょう」
　恨み言が口をついて出た。
「総当たりブルートフオース攻撃アタツクなんて原始的な方法で疑似知性体と真っ向から対決しようだなんて。正気とは思えませんよ」
　小こ癪しやくなアンジェラの物言いをメットは大人の余裕で苦笑してみせた。
「だが勝てた。どうだアンジェラ君。勉強になっただろう」
「はぁ？　何がですか？」
「人の一念というやつは時としてこういう奇跡を起こすということさ。これは教育プログラムやシミュレートでは分からんことだ。現場だけで学べる実体験さ」
「できればこんな実体験はもう御ご免めんです」
　拗すねたような言葉とは裏腹にアンジェラの中には、強い満足感が満ちていた。アンジェラの無茶がメットを助け、メットの無茶がアンジェラを助けた。互いに、互いの無茶で救い合った今回の戦いは、自分はメットのパートナーなんだ、という気持ちを強くさせたのである。

ようやく自分はメットの役に立つことができるようになってきた。
（少しは、追いついたかな……）
その時、ぽん、と一つ音がして二人の横にウィンドウが出現した。中央保安局からのメッセージボックスである。通信が届いたということは、外部との繋つながりが可能となった──マップから脱出することができるようになったということであった。
メッセージボックスをタッチすると通信が開始される。
『メット・マルティネス三等官。アンジェラ・バルザック四等官。見事であった。君たちが疑似知性体を処理してくれたおかげでマップの支配はディーヴァへと移された。残念ながら先行した他のエージェントとは未だ連絡が取れていない。マップ内のワームによりすでにメモリを奪われ消滅させられていると判断するより外ほかない。ワームが外部に拡散することを防ぐため、間もなくこのマップは強制削除デリートされる。速すみやかにマップ外へ脱出したまえ』
そこで通信が終了した。結局救助することができたエージェントは、メットが圧縮保存しているエリザ・オリヴィエ三等官だけだった。中央保安局が判断したように他のエージェントは無限ループに陥おちいったままワームに食われてしまったと考える外ないだろう。
「行けるかい？」
メットが珍しく優しい声でアンジェラに尋ねてきた。
「大丈夫です」
まだ少々ぼんやりとするが、リンクゲートを作れるぐらいにはアンジェラも回復していた。
二人はリンクゲートを作成し、マップ外へと脱出する準備をしはじめる。その時。
「わあ。綺き麗れいな夕日。ねえ。みんな見て見て」
女性の声がした。振り返るとパレオを着た女性が砂浜に立ち、止まった夕日のオブジェクトを指差して微ほほ笑えんでいた。森の中でさんざん目にした女性の３Ｄ映像データである。
女性は一度、森へと駆けていったが、すぐに駆け戻ってきた。そし

て夕日を指差し、
「わあ。綺麗な夕日。ねえ。みんな見て見て」
　同じ言葉とともに、また森へ戻っていく。その動作を終わることなく繰り返し続けていた。
「テウラ……とか言いましたね」
　アンジェラがぽつりと呟つぶやく。女性が森の中で一度そう名乗ったのを覚えていた。
　不完全な閉じたシステムの女性は自我も持たず、何者からも干渉されず、夕日が綺麗だというその行動を延々繰り返し続けるのだろう。
　無限ループされた仮想空間の囚とらわれ人──そんな印象を受けた。女性の湛たたえた満面の笑顔がなんだかひどく物悲しいものに思えてくる。
「あのテウラはマップが強制削除デリートされなければ永久にこうやってループし続けるのでしょうか」
　言ったアンジェラにメットは問う。
「それで君はどう思う」
「なんだか哀あわれだと……」
「そうか哀れと思うか」
　メットは少し真ま面じ目めな声で言った。
「君は前にディーヴァの下層階級の人々に対し私が哀れだと言った時、それを否定したな。彼らも同じさ。アーハン工場のソフトウェア同様に、終わることなく同じ作業を繰り返し行う存在となっている。言ってみれば彼らの生活は無限ループみたいなものだな。いや……」
　メットは首を振った。
「私たちシステム保安要員だって似たようなものか。肉体を持たない私たちは永久に自身のメモリを確保するために労働し続けねばならない。地上人にはいずれ老いて死ぬという終わりがある。だが、私たちにはそれがない。私たちもまた無限ループみたいなものだと思わないか？」
　アンジェラには答える言葉が見つからない。答えるより先にメット

がこう言った。
「私は思わない。いや。思いたくない」
　そう口にしたメットの目には、いつもの飄ひょう々ひょうとした態度にそぐわない熱い光が灯ともって見えた。
「私たちは変化できる。上昇できる。メモリだよ。もっとメモリを得れば、多くのものを手にできる。メモリが私たちを変えてくれる。私たちを人にしてくれる。永遠に続く上昇。それが、私の考える楽園だ」
　そう言ってメットは、アンジェラに精せい悍かんな笑みを送ってくる。
　永遠に続く上昇──震ふるえるほど力強い言葉であった。
　今回の戦いを通し、このメットの言葉の持つ強さが、偽りなき真実のもであるとアンジェラは確信している。メットを見るアンジェラの眼まな差ざしは、熱い憧れと、親愛の念に満ちていた。が、力強いメットの言葉の裏側に、微かすかだが寂さびしさ──あるかなしかの影のようなものもまた同時にアンジェラは感じ取っていた。
（どうしてだろう。メットの心の裏側には、いったい何が隠れてるんだろう）
　アンジェラはそれが知りたかった、この人のことをもっと知りたいと思った。いつかそれを教えてもらえる日が来るのだろうか。
「その楽園に、私を連れていってくれる約束ですよね？」
　アンジェラは、微ほほ笑えみを返し、そう問うた。メットは強く頷うなずく。
「もちろんだ」
　その時、二人の熱いやりとりに水を差すように、また、パレオの女性の声がした。
「わあ。綺き麗れいな夕日。ねえ。みんな見て見て」
　なぜか、その声は、寂しげで、どこか不吉なものを孕はらんで聞こえた。アンジェラとメットとの交した約束に暗い影を落とすかのごとく。

「さあ。もう行きましょう。間もなくマップが強制削除デリートされますよ」

アンジェラはどこか怖いものを覚え、こう言った。

二人はリンクゲートへ入っていく。背後からは、波の音と、パレオの女性の声だけが聞こえ続けていた。

「わあ。綺麗な夕日。ねえ。みんな見て見て。わあ。綺麗な夕日。ねえ。みんな見て見て。わあ。綺麗な夕日……」

第三章《圧縮された海》

『テウラ』というワードで検索をかけると二千五百八十六名のディーヴァ市民がヒットした。

その市民一人一人のパーソナルイメージ画像を呼び出す。

ずらりと並ぶウィンドウ。正面、横面、全身の画像データ。ほとんどが女性のパーソナルイメージである。まあ、そうだろう。テウラとは女性の名だ。

外見もまた様々である。東洋系。ラテン系。インド系。アフリカ系。北欧系。東欧系。なかには動物を模したパーソナルイメージを有する者もいた。

一つ一つを確認する面倒を省くために、外見的特徴でソートしてみる。

やや茶色味がかった長い黒髪。小麦色の肌。身長百六十センチほど。白人種と東洋人種のハーフ、あるいはクォーター。やや太めの眉まゆ。鼻が高く、面長。アーモンド形の目。

その特徴に当てはまるテウラは七名だった。

どれもあの密林マップで目にしたパレオを着た女性ではない。

自身の視覚フォルダに保存してあったテウラの映像データを呼び出した。次に聴覚フォルダに保存してあったテウラの声を再生。

『わあ。綺き麗れいな夕日。ねえ。みんな見て見て』

この音声データと映像データをそのままキーワードとし再検索をかけてみる。

結果は『該当者なし』。

アンジェラはウィンドウから顔を離し、う──っ、と一つ伸びをする。

ここはアンジェラのプライベートホームスペースであった。ビジネスホテルの一人部屋なみの広さ。壁面は白く、全く装飾がない。作業用のデスクが一つあるばかりで殺風景である。

アンジェラがこのように自らのホームスペースを殺風景にしている

のは、余計なメモリを使いたくない、というのもあるが、メットに倣ならっているという部分が大きい。

何度もお邪魔したメットのホームスペースは、必要最低限のもの以外、何もなかった。メットにもっと近付きたいというアンジェラのささやかな思いが、自室をこのようにさせたのである。

アンジェラはこのホームスペースで密林マップ内で遭遇したパレオの女性―テウラについて調べていた。

密林マップ内で繰り返し現れた女性、テウラ。

アンジェラはテウラが感染プログラム作成者にとって何か特別な存在だったのではないか、と思うようになっていた。それは、あの夕日の浜辺で見たテウラがどこか寂しげでアンジェラにとって印象的だったからかもしれない。

とにかくテウラが作成者となんらかの繋つながりのある人物ならば、その線から犯人を特定できるかもしれないと思ったのだ。だが、結果はこの通り。密林マップで目にしたテウラは市民データベース内に存在しないということがわかっただけであった。

アンジェラは『テウラ』という名前と『外見』『声』をキーワードに検索をかけたがデータの塊であるディーヴァ市民はメモリ次第でその三つを簡単に変えてしまうことができる。

テウラというのは、作成者のつけた偽名かもしれないし、テウラのモデルとなった女性（もし、そんな人物がいるならば）はすでに自身のパーソナルイメージを作り変えてしまっている可能性も考えた。だが、一度でもその外見を選択したことがあるなら、現在違った外見を選択していても記録が残っていていいはずである。それも出てきていない。

「それともメットの言うようにテウラは疑似知性体が無作為に作りだした架空の人物なの？」

テウラについて調べてみると言ったアンジェラにメットは皮肉っぽくこう言った。

「やる価値はあるかもしれんが、あまり期待はしていないよ。おそら

く疑似知性体が自身の中にあるファイルの中から無作為にデータを選び出して作成した架空の人物だろうからね」

そしてメット自身は別のアプローチから発信者を捜すと言っていた。

ここ数時間ほどの作業は徒労なのだろうか、とアンジェラは落胆しはじめていた。

まだ二体の疑似知性体、ストリックランドとゴギャンがディーヴァ内のどこかに潜ひそんでいる。中央保安局エージェントは全力をもって捜索しているが未だ手掛かりすら摑つかめていないのだ。

「こんなことに時間を費ついやしている場合じゃないのかな。ディーヴァのデータベースに残っていない人物を調べるなんて……」
　そこで、ふと、アンジェラの脳裏に閃ひらめくものがあった。
「ディーヴァのデータベース？　ディーヴァに残っていない存在？　もしかして……」
　今、目の前に出ているウィンドウを全て最小化し、手早く次のウィンドウを呼び出す。
「もしかして、テウラはディーヴァの住人じゃない……？」
　その閃きは連鎖的に新たな閃きを次々と呼び起こす。
「じゃあテウラは地上人？　感染プログラム作成者も地上人？　いや、そんなことはあり得ないわ。荒廃した地上にあそこまで高度で複雑な悪マ性ルソウフエトアをプログラミングできる者がいるとは思えない。ならいったい何？」
　アンジェラは、はっ、とした。
「ナノハザード以前。ディーヴァ成立以前に作成された感染プログラム!?」
　疑似知性体たちは楽園と称して南国の海辺の風景を作成しようとしている。その風景は現在の荒廃した地上にはおそらく存在しない風景だ。疑似知性体たちの作成しようとしているのは、ナノハザード以前の地上の風景。その記憶を持った存在、ナノハザード以前の人物が感染プログラムを作成したとしたらどうだろうか。
「感染プログラムがナノハザード以前に作られた存在だとして、百年以上経った今になってどうして活動しはじめたの？」
　そしてどうやってディーヴァ内に侵入したのか。
　アンジェラは再びウィンドウをタイプし、検索をかけてみる。
　キーワードは、『ナノハザード以前』『ロストデータ』。
　いくつもの無関係な情報が上がってきた。アンジェラは新しい順に情報をソートする。
「出たわ」
　それは、ディーヴァの情報部が最近ディーヴァ外で活動した記録で

ある。
　アンジェラは、記録内容に目を通していく。
　──大気圏外のスペースデブリ群の中から微弱な信号が発信されているのをディーヴァ情報部が発見。光学的な調査により、それがナノハザード以前に行われていた宇宙開発の遺物、推進機の損傷によって遭難した宇宙ステーションから発されていることが判明した。
　二名の調査員によって宇宙ステーションは調査され、発信されていた信号がＳＯＳ信号であることが分かった。遭難した当時から発信され続けていたものであろう。
　ステーション内の生命維持装置は活き続けていたが、生存者はおらず、一体のミイラ化した遺体があるばかりだった。おそらく食料がつき搭乗員が一人二人と死んでゆく中、遺体は慣例に従い宇宙空間に流す「宇宙葬」にて葬られ、最後に残された一人だけがステーション内に遺体を晒さらす結果となったのだろう。
　他に調査員の報告によればステーション内に進入した時、はじめそこに仮想空間が作られていたのだという。推測するに、地球へ戻ることが不可能だと悟った搭乗員が自分たちを慰なぐさめるために作成したものだと思われる。
　二名の調査員はステーションのメインフレームに残されていたデータをコピーし、ディーヴァへと帰還した。現在そのデータはディーヴァ情報部によって保存されている。
　おおよそ、こういった内容の記事であった。
「宇宙ステーションから持ち帰ったデータは閲覧できないのかしら」
　アンジェラはディーヴァ情報部のデータベースへアクセスしたが残念ながらそのデータは未公開となっていた。
「ワーム事件が起こったのは、ちょうどこの宇宙ステーションが調査された直後……。感染プログラムが宇宙ステーションから持ち込まれたものだとしたら……」
　そこまで考え、アンジェラは首を振った。そんなことがありえるだろうか。そうだとしたら感染プログラムを作成したのは宇宙ステー

ションの搭乗員ということになる。彼らに感染プログラムを作成するどんな理由があるというのだろう。
　そこでアンジェラは自分が憶測に憶測を重ねているに過ぎないことに気がついた。
「もう、やめね」
　アンジェラは記事の表示されたウィンドウをタッチして消した。ちょうどその時、アンジェラのすぐ右手に一つウィンドウが出現する。メットからの通信だった。
『どうだね。アンジェラ君。何か手掛かりは得られたかね？』
　ウィンドウに映されたメットの顔がにやついている。どうせ何も得られてやしないんだろう、とその顔つきが語っていた。悔しさにすぐウィンドウを閉じてしまいたい衝動に駆られたが、そこは我慢する。
「いいえ。全然です」
『そうだと思っていたよ。ところでエリザ・オリヴィエ三等官が再起動されたそうだ』
　エリザ三等官は、解析施設に送られ、停止状態のまま無限ループのデバックを受けていた。
「再起動されたってことは、無事デバックできたってことですか？」
『無事とは言い難いがな』
「どういうことです？」
『結局デバックするのに彼女の記憶領域の大部分を初期化フオーマツトしなければならなかった。ゆえに記憶喪失状態に陥おちいっている。言語機能も失っているから、しゃべることもできんそうだ。今はまだ解析施設内で検査されている。エージェントとしての復帰は難しいだろうな』
　ぞっとしない話である。アンジェラたちも一つ間違えばエリザ三等官と同じ運命を辿たどっていたかもしれないのだ。
「それは……お気の毒ですね……」
　アンジェラにはそう言うことしかできなかった。
『ところでアンジェラ君』

　メットが気を取り直すように言った。
『君とこうやって通信しているのは何もエリザ三等官を気の毒がるためじゃない』
「何か分かったんですか？」
『発信者と思われる人物の目星がついた。今からその人物に会いに行く』
「え？」
　さすがメットというべきか。アンジェラがテウラについて調べていた無益な数時間のうちに、すでに発信者の目星をつけてしまうなんて。
「いったい誰ですか？」
『イヴァン・アダモフ。知っているだろう』
「え！　知っているも何も……」
　それは、人気のマッププログラマー。アンジェラとメットが初めて顔合わせしたヴェネチア風マップを作成した人物であった。

　アンジェラがテウラについて調べている間、メットは〈ノア・ノア〉という疑似知性体の掲げるプロジェクト名について調べていたのだという。
「『ノアノア』とは十九世紀、フランスの画家ポール・ゴーガンの記した随想記の名だ。文明社会に嫌いや気けがさしたゴーガンは当時フランス領だったタヒチに移住。その時期のタヒチでの体験を書いたのが『ノアノア』だ。『ノアノア』とはマオリー語で、香かぐわしいという意味らしい」
　イヴァン・アダモフのホームスペースへ向かう途中の回線チヤネル内でメットはそう説明した。
「でも、それでどうしてイヴァン・アダモフが発信者ということになるんですか？」
「『ノアノア』という書物のデータは、ディーヴァのデータベースに残されている。そのデータを閲覧した人物のログを調べてみたのさ。

ディーヴァ内ではあまり人気のある書物ではないようでね。過去に『ノアノア』を読んだ人物は五名しかいなかった」
「その中にイヴァン・アダモフがいたんですね。他の四名は？」
「一般的な中流階級の市民さ。あれだけの悪マ性ルソウフエトアをプログラミングできるとは思えない。知っての通りイヴァン・アダモフは一流のマッププログラマーだ。高度なプログラミング技術を有している。それに彼の性格だな」
「極度の懐古主義者」
「その通り」
　メットは頷うなずいた。
　イヴァン・アダモフ──公開マップのプログラマーとして人気を博している人物。メットとアンジェラが顔合わせしたヴェネチア風のマップをはじめ、アクセス数が必ず上位に上る様々な公開マップを作成している。
　イヴァンの作成したマップのほとんどがナノハザード以前、十九世紀から二十二世紀にかけての地上の風景を正確に模したものだ。イヴァンはディーヴァ市民の中でもかなりの変わり者で、かつての地上の風景を賛美し、それを至上のものだと主張しているのだという。
「疑似知性体どもの言う楽園。それは、かつての地上の風景のことなのではないか。イヴァンの地上賛美はいささか常じよう軌きを逸いつしていると聞く。感染プログラムを使い、ディーヴァ全てを地上の風景に変える。そのような危険な妄想を抱いてもおかしくはない人物だと思わないか？」
「なるほど」という思いとともに、「本当にそうだろうか」という思いが同時に湧わいてきた。
「いくら変わり者だからといって、ディーヴァを感染プログラムで変えてしまおうなんて、そんな大それたことをしでかすような人物なんでしょうか？」
　メットはそう尋ねられ、にっ、と笑った。
「わからんね。わからんから直接会って確かめるんだ」

いささか腑ふに落ちかねる部分はあったが、アンジェラは大人しくメットに従うことにした。
イヴァン・アダモフにはメットから事前に連絡が入れてある。中央保安局エージェントという身分は隠し、マップ作成のプログラミングの勉強をしている者として仕事場で直接話を聞きたいという口実を作ってあった。
そのおかげでイヴァンの作業ワーク空間スペースにはあっさりアクセスさせてもらえたのである。

イヴァンの作業ワーク空間スペースに入ったアンジェラはその異様な風景に目を見張った。
樹木、人物、建物、動物などの作成途中の様々なオブジェクトやエキストラが空間内に浮いている。まだワイヤフレームのみの建物。テクスチャマッピングのされていないのっぺりした植物。モーフィングされていないため不連続に流れる噴水の水、などなど。３Ｄデータの博物館倉庫にでも迷い込んだような気分になる。
「すごい」
つい感嘆の声を漏もらしてしまったアンジェラに、
「どうじゃ。すごいじゃろ」
という嗄しわがれた声が返ってきた。そちらに目を向けると犇ひしめきあうオブジェクトの間から奇妙なものが姿を現した。水晶を思わせるバスケットボール大の正八面体である。それが、ふよふよと浮遊しながらアンジェラとメットの前に漂ってきた。
なんだろう、と覗のぞき込んだ途端、水晶の中央にぎょろりと一つの大きな瞳が出現する。
「ひゃっ！」
飛び退のくアンジェラ。水晶にがっぱりと口が現れ、カッカッカッと笑いだす。
「初めましてお嬢さん方。わしがイヴァン・アダモフじゃ」
水晶がそう名乗った。メットは驚いた様子も見せず、悠然と水晶に

挨あい拶さつを返した。
「初めましてイヴァンさん。私がメット・マルティネス。こちらが私の友人、アンジェラ・バルザックです」
　水晶の目玉がきょろきょろ動き二人を見る。
「ふむ。画素ピクセルの高い、いいパーソナルイメージを持っておるの。わしのとは大違いじゃな」
　このあたりでようやくアンジェラは理解しはじめた。
　この水晶こそがイヴァン・アダモフのパーソナルイメージなのである。
　メモリ次第でいくらでも自身の外見を変えられるディーヴァ市民。なかには毛皮や鱗うろこに覆おおわれた動物的外見や、金属質のロボットのような外見を選択する者もいる。だが、正八面体に目玉と口をつけただけという、ここまで非人間的な姿をした人物には初めてお目にかかった。
「外見ごときにメモリを費ついやすのがもったいなくての。人にもめったに会わぬから、こんな単純な姿をしておる」
　と、いうことらしかった。嗄しわがれたような声をしているのも声せい音おんにメモリを費やしたくないからだろうか。なるほど。変わり者である。
「わしの話を聞きたいのじゃろ。そら。どれでも好きなものに腰掛けい」
　と、勧められたが、椅い子すのようなものは何一つ見当たらない。
　代わりにいくつもの三角形で構成された大型犬の非構造グリッドが三つほど近くに浮いていた。いずれこれに毛皮のテクスチャを貼りつけ、マップのエキストラとして動かすのだろうが、今は停止している。もしかして、これに座れということだろうか。
　迷っていると、メットが大型犬に座ってしまう。アンジェラもそれに倣ならった。イヴァンが文句を言ってこないところを見ると、これで正解だったらしい。
　メットはさっそくイヴァンへの質問を開始する。

「あなたは、古い地上の風景だけをマップにしていると聞きます。それは、どうしてですか？」
　いい質問だ、とばかりにイヴァンの大きな口が笑みの形を作る。
「それがもっとも美しい風景だからじゃよ。わしらが今になって想像する新しい景色など、かつての地上人の見た天然自然の風景、地上人が歴史の積み重ねで生み出した街並みには到底及びもつかぬ。最近のディーヴァ市民は想像力というものを失っとる。仮想空間の中で生きすぎたせいじゃな。合理的なものにばかり目が行き、かつての美しい風景を失ってしまっておるのじゃ。美とは無駄から生まれる。無駄こそが美の本質なのじゃ」
「同感ですね」
　メットは心にもないことを言って頷うなずく。
「イヴァンさん。あなたはなぜそう思うようになったのです。何がきっかけとなったのです」
　一見、無意味なように聞こえるメットの質問だが、実はイヴァンが悪マ性ルソウフエトアを作成するような異常性を秘めた人物なのかどうか、遠回しに探っている。
　イヴァンは少し考え、こう言った。
「懐かしく思った……のが、きっかけかの」
「懐かしく？」
「かつて見た百年前の地上がの」
　そこでメットの顔に微かすかだが驚きのようなものが浮かんだ。
「あなたはディーヴァ成立当時の方なのですか？　ディーヴァが成立する以前の地上人……？」
　黙っていたがアンジェラも驚いていた。情報生命体であるディーヴァ市民には寿命がない。だからディーヴァが成立し、地上から移住してきた当時の市民も多く残っている。だが、ディーヴァが成立してからすでに百年以上の時が経過した。その間に第二、第三、第四の世代が誕生し、ほとんどがディーヴァ生まれとなっている。当時からの市民に会う機会はあまりない。

「それは、当たっているが少し違っておるのぁ」
　イヴァンは謎なぞめいた返答をした。
「わしには地上の記憶がある。じゃが、それはわしのオリジナルの記憶を引き継いだものじゃ」
「つまり……あなたはコピーですか？」
「さよう」
　自分自身の人格情報を複製し、もう一人の自分──コピーを作りだす。
　電脳都市ディーヴァではこんなこともできる。もっとも、もう一人の自分を作るということは倍のメモリを消費することとなるので、めったにやれることではない。
　ディーヴァ外のミッションなど自身の存在が消失してしまう危険のある場合、一時的にバックアップとしてコピーを作成する者もいるが、ミッション終了後にすぐに統合したり、消去したりしてしまうのがほとんどだ。
「コピーといってもオリジナルのコピーではない。コピーのコピーのコピー。四代目じゃな。わしのオリジナルがディーヴァに移住してきた当時、まだ市民の数も今ほど多くなかったから、一人当たりに割り振られるメモリの量も多かった。じゃから自身のコピーを八体作った」
　メットが目を丸くする。
「八体!?　それはまた……」
「多いじゃろ。そしてそのコピー自身も五、六体ずつのコピーを作った。そしてそのコピーも五、六体ぐらいのコピーを作った。このディーヴァ内にイヴァン・アダモフは二百五十体から三百体ぐらいおるはずじゃ。もしかしてわしの知らんところでまだ増えとるかもしれんが、もう把は握あくしきれておらん」
　メットもアンジェラも呆あつ気けにとられていた。ディーヴァ成立当時、メモリが豊富だったからといって、そんなにたくさんのクローンを作成する者がいるだろうか。一般的な感覚からすれば、自分と全

く同じ存在なんてものは、一人いるだけでも気味が悪いものである。
「いや……知りませんでしたよ」
「そうじゃろうな。とくに公おおやけにはしておらんし、コピーを作りまくっとったのは、もう随分と昔じゃ。記録もあまり残っておらんじゃろ」
　これだけ有名人のイヴァン・アダモフがコピーというのは、意外な事実である。
「どうして、あなたのオリジナルはそんなにたくさんのコピーを作成したんです？」
「孤独だったんじゃろうなあ。わしのオリジナルは身内もなく、ディーヴァに移住してからも何のコミュニティにも参加せんかったからの」
「あなたのオリジナルは今、何を？」
「さあて。どこで何をしておるものかの。わしが作成されてからすでに五十年は経っとる。連絡も取っておらん。把は握あくしとる範囲じゃと、圧縮保存された者もあれば、下層階級に落ちてしまった者もおる。わしなんぞよりもっと偉くなって官僚ポストについたものもおったかの。じゃが、わしとはなんの関係もない。コピーとはいえ、これだけの時間を個として過ごしたんじゃ。パーソナルイメージも違ければ、考え方も違っておる。もうすっかり他人みたいなものじゃよ」
　そういうものなのか、とアンジェラは想像できないものの納得はする。
「マッププログラマーをされているのは、あなただけなんですか？」
「ああ。わしだけじゃ。この仕事をしようと思い至ったのは、わしが作成されてから三十年頃のこと。他のイヴァンはマップ作成になんぞ興味なかろう。わし個人の道楽じゃよ」
　これだけ多くの市民に認められ、称賛されているマッププログラミングを個人の道楽と言いきるあたりが達観した芸術家といった感がある。

「ところでイヴァンさん。あなたは『ノアノア』という書物をご存じですか？」
「ノアノア？」
　イヴァンは一瞬黙って考え込んだ。自身の記憶領域に検索をかけているのだろう。
「おお。知っておる。知っておるぞ。確か十年ほど前、ポリネシア諸島のマップを作ろうとした時に、それ関連の資料をまとめてダウンロードしたんじゃ。その中に混じっておったな」
「それを読まれたのですね？」
「無論じゃ。少しでもマップ作成の参考になりそうなものは必ず目を通しておる。ジェイムズ・クックの航海記も二十世紀の旅行雑誌も読んだぞ。じゃが結局参考になるのはテキストデータよりも画像や動画資料の方じゃがな」
　十年も前のマップ作成の参考資料の中にたまたま『ノアノア』が混じっていた。それだけのこと。別になんら怪しむべき部分はない。アンジェラは、これは当てが外はずれたな、といった意味の視線をメットへと投げた。だが、メットは涼しい顔でさらにこう尋ねた。
「今、ディーヴァ内で起こっている感染プログラム事件をご存じですね？　あの事件の感染プログラムは〈ノア・ノア〉プロジェクトの完かん遂すいのために活動しているという話ですよ」
　遠回しな探りをやめ、今度は踏み込んだ質問となった。
「ほお。その〈ノア・ノア〉プロジェクトとはなんじゃ？」
「さあ。私にもよく分かりませんが、楽園―おそらく『ノアノア』に書かれているようなタヒチの風景をディーヴァ内に作成することだと思われていますね」
　ほおー、とイヴァンは何か感心したように言う。
「なるほどのお。それでわかったぞ。お嬢さんたちは、保安局エージェントじゃな」
　ずばり、と看かん破ぱされた。アンジェラは焦あせりが顔に表れるのを感じたがメットは一切顔色を変えていない。

「なぜ、そう思われるんです？」
「なに。お嬢さん方の前にも何人かエージェントらしき連中がわしを訪ね、よくわからん質問をしていった。保安局なんぞがわしにいったいなんの用事かと思っとったが、なるほどの。『ノアノア』を読んだことがあるという理由だけで、わしを感染プログラム作成者だと疑っておるわけか」
　言ってイヴァンは、カカカと笑った。犯人だとしたら随分と腹が据すわっている。
「残念じゃがわしは作成しておらんぞ。なんだったらわしのログを調べてみてもいい。そんな形跡は見つからんはずじゃ。まあ、わしがすでに作成した痕こん跡せきを削除しているとおまえさんらは考えるのかもしれんがの」
　イヴァンの大きな一つ目が猛もう禽きんの鋭さをもってメットの整った顔を見つめた。
　メットは、ははははっ、と爽そう快かいに笑って見せた。
「イヴァンさん。あなたは何か勘違いをしていらっしゃる。私たちは、保安局エージェントなんかじゃありませんよ。いや、驚きましたよ。まさかあなたが事件の犯人として保安局に目をつけられているだなんて。有名人は辛つらいものですね」
　ぬけぬけとメットは言ってのける。
「空そら惚とぼけるのがお上手じゃの。お嬢さん」
　イヴァンも老ろう獪かいに微ほほ笑えんだ。
「ところで悪マ性ルソウフエトアがディーヴァのメモリを食らい尽くし、ディーヴァの全エリアを『ノアノア』にあるような南国風景に変えてしまったとしたら、あなたはどう思います？」
　派手に惚とぼけたくせにこんなことをすかさず質問するメット。イヴァンはにやにやと厚い唇に笑みを浮かべ、さらりと、とんでもないことを言った。
「痛快じゃな。一度そんなことが起こった方がディーヴァにとっていいのかもしれんの」

「それはなぜ？」
「ディーヴァが成立して百年以上が過ぎた。ディーヴァは停滞し、停滞したまま人口ばかりが増え続けておる。停滞した文明はいずれ滅びる。これは推測ではない。歴史じゃ。ディーヴァはその歴史すら捨て去ろうとしておる。かつてわしが閲覧していた過去の地球の資料は無用なものとして次々削除デリートされていっておる。『ノアノア』がディーヴァのデータベースにまだ残されておるということにすら、わしは驚いておるのじゃよ。歴史を捨て、停滞するこの電脳世界は見えぬところで歪ひずみを生み出し、いずれその歪みが破滅の原因となる。例えば……」
　そこでイヴァンは意味深に言葉を切った。
「〈トイフェル〉とかの」
　メットの顔色が初めて変わった。
「〈トイフェル〉……悪魔トイフエルか。増加の一途を辿たどるディーヴァの人口を密かに統制する組織。ただの都市伝説などではなく、それが実在する組織じゃということを保安局エージェントのお嬢さんならご存じじゃろう」
「あ、あなたは、なぜそれを……」
「わしのうちの何人かがトイフェルによって消されておる」
　イヴァンの口調が鋭いものに変わった。イヴァンの三百体ほど存在するコピー。そのうちの何人かがトイフェルの犠牲となっている。それが事実か、単純な憶測なのかはわからないが、アンジェラにとって衝撃的な言葉であることに違いはなかった。
「今回の事件。これも存外、トイフェルが裏で動いているのかもしれんの。かつての地上でもそんなことが行われていた。人口増加を抑えるために、実験室で作成されたインフルエンザウイルスを政府が密かに流行させる。今回の事件はそれによく似ておるのぉ……」
　さすがのメットも次の言葉を探し出せず口ごもった。イヴァンは、続けてこう言った。
「じゃが、それでいいのかもしれん。大きな災さい厄やくは停滞を続

けるディーヴァにとってはよいカンフル剤になるじゃろ。ディーヴァ市民は目覚めるかもしれん。この一見、平穏で未来永えい劫ごう続くと思われている電脳都市が、ひどく危あやうい地盤の上に成り立っているということにの……」

　そこでイヴァンはアンジェラへと視線を向けた。

「そっちのお嬢さんは、何かないのかの？　お嬢さんもわしを疑っとるのか？」

　聞かれてアンジェラは言葉に詰まる。

「わ、私は……」

　アンジェラは、ちらりと隣のメットを見た。

「メットと同じ意見です」

　そう答えた。アンジェラはメットを信頼している。メットについていくと決めているのだ。

　アンジェラの答えを聞き、イヴァンは溜ため息いきを吐つく。

「地上を知らぬ若者は……自分の足で立つことすら忘れてしまったか……」

◆

　かたり、という音がして研究員の男が振り返ると、いつの間にかエリザが部屋に入ってきていた。部屋に散乱しているブロックを転がしている。

「戻ってきたんだね。どこを散歩してきたんだい」

　そう尋ねたが、エリザはきょとんとして首を傾かしげるだけだった。

　エリザ・オリヴィエ三等官。有能な保安局エージェントだったが、アーハン製造工場のバッファ内部に出現したマップで無限ループのバグに侵おかされ、この解析施設へ送られてきた。

　無限ループはデバックできたものの、それに伴いエリザの記憶情報の大半を削除デリートせざるを得なかった。今、彼女は記憶や生活習

慣を失い、ほぼ幼児に近い状態となっている。
「好きなように遊ぶといい。何か分かるかもしれないからね」
　研究員の彼はエリザにそう優しく呼びかけた。部屋内にはいくつものブロックが転がっている。エリザはしゃがみ込んで子供のようにそれらを重ねたり倒したりしはじめた。
　研究員はエリザに微ほほ笑えみを送ると再びデスク上に浮遊するディスプレイウィンドウに向かう。そこに表示されているのは、エリザの内部データを遠隔的にモニタリングしたものだ。
　電脳心理学の専門家である彼の役目は、エリザの失われた記憶情報をできるだけ多く再現し、現場復帰できるレベルまで回復させることだ。
　言語情報や、エリザのプライベートスペースに残されていた古いバックアップデータは、すぐにでもインストールさせることができる。だが、それをしないのは、今現在エリザの中に残された記憶情報がどれだけあるのか判明しきれていないからだ。
　下手に新しいデータをインストールすることにより、エリザの個体の中で情報と情報との矛む盾じゆんが生じ、人格が分裂してしまう危険性がある。そうならないためにもエリザの中のデータを解析アナライズし、矛盾の生じない新データを作成してやる必要があるのだ。
「やはり、これが分からないな……」
　研究員はディスプレイに表示された文字列を見て呟つぶやいた。
　エリザの内部データの大半は解析アナライズできている。だがどうしても解析アナライズできない部分が存在した。
「圧縮されたデータだということは分かるんだけど……いったいなんなんだろう」
　何かのプログラムのようにも見えるが、どんなコマンドを入力しても動作しないのである。これがいったいどんなプログラムなのか判明しない限り、作業は先に進まないのだ。
　今、エリザに与え、遊ばせているブロックは、ただの玩具ではない。その組み合わせによって様々な刺激情報を生み出し、ユーザーに

体感させるソフトウェアなのだ。彼はこのブロックで遊ばせることにより、エリザの中の未解析のプログラムを動作させる刺激を見つけだすことができるかもしれないと考えたのである。エリザに施設内を自由に歩き回らせているのも何かきっかけとなる刺激と出会うことを期待してのことだ。

事実、エリザの散歩中に何度かそのプログラムが動作した形跡がある。

だが、どんな刺激によりそれが動作し、そのプログラムが何を行ったのか全く判然としなかった。そして彼が同行してる時には決してそのプログラムは起動してくれないのである。

「何かプライベートな目的で使用されるプログラムなのかな？　気にせずデータをインストールしてみた方がいいのだろうか？」

彼が頭を抱えた時、彼の右隣に通信ウィンドウが出現した。彼の同僚からである。

『やあ。お姫様の解析アナライズは進んでいるかい？』

陽気な同僚の声に彼は溜め息いきで答えた。

「さっぱりだよ」

『実はこっちもさっぱりでな。君に意見を聞きたい』

「意見？」

同僚は強制削除デリートされた密林マップから回収されたメモリについて解析アナライズしていたはずである。

『これを見てくれ』

と、ファイルが添付されたパケットが送信されてくる。開いてみるとそれはグラフであった。

『密林マップによって奪われたメモリ量。そして削デリ除ート後回収されたメモリ量を示したグラフだ』

「奪われたメモリ量より回収されたメモリ量の方が圧倒的に少ない……」

『な。おかしいだろう？　足りないメモリはどこに消えたんだ』

「確かにおかしいね……」

　彼は少し考える。
「何者かが未だ奪ったメモリを所有している……。例えば密林マップ内に実はもう一体疑似知性体が潜ひそんでおり、メモリを所有したままマップが強制削除デリートされる前に逃亡した」
『俺もそう思った。だが、密林マップが出現してからバッファから外に出たのは、メット三等官とアンジェラ四等官の他にいないんだよ。疑似知性体がメモリを所有したままバッファ外に出れば、そのログが残っているはずなんだ』
「疑似知性体が他のデータに擬態して出ていったのでは？」
『違う違う。だから出ていったログそのものが残っていないんだよ。何に擬態していようが出ていったならログが残るだろう』
「では、まだ疑似知性体は、バッファ内に留とどまり続けている？」
『それもあり得ない。あのバッファそのものを一旦廃棄し、新しいものに取り換えたんだ』
「ふむ……」
　確かに不思議だ。同僚が頭を抱えるのも無理はない。
「わからないね。私から意見できることはなさそうだよ」
『そんな。もう少し考えてくれよ』
　その時である。研究員のデスク上のディスプレイに変化が起こった。表示されていた文字列が動いたのである。それは今まで動作することのなかったあの未解析のプログラムであった。
「えっ!?」
　研究員は咄とつ嗟さにエリザを振り返った。エリザは相変わらず淡々とブロックを弄もてあそんでいる。
「今……何をしました？」
　エリザに呼びかけるも、虚うつろな顔をこちらに向けただけだった。
『何だ？　何かあったのか？』
「すまない。プログラムに動きがあった。切るぞ」
　研究員は急いで通信ウィンドウを消去する。

その時、エリザから目を離したほんの一瞬にまたしてもプログラムが動いた。
「え？　なんだ？」
慌ててエリザを振り返るがやはり変化はない。いや、何かおかしい。何かが変だ。妙な違和感がある。しばし考え、はっ、とした。
「ひぃ、ふぅ、みぃ……」
研究員はエリザの周りに転がるブロックの数を数えてみる。
「足りない……!?」
ブロックが減っていた。三十個あったはずが、半分の十五個になっている。
「どういうことだ？　ブロックはどこに消えた？」
エリザに駆け寄り、その肩を揺する。エリザは呆ほうけたように、にへらと笑い、またブロックをいじくりはじめる。研究員は再びデスクに戻り、ディスプレイへと目を戻した。
「何が…何が起こってる」
ブロックが消えた理由を調べようと画面をスクロールする。その時、プログラムが動いた。
「また!?」
エリザを振り返り、研究員は、ぞっとした。
なんとエリザの周りにあったブロックが今度は一つ残らず消えていたのである。
エリザがゆらりと立ち上がった。その顔には先ほどと変わらない放心した笑みが貼りついたまま。
研究員は得体の知れない恐怖を感じ、デスクから立ち上がり、後ずさった。
エリザがゆらゆらと酩めい酊ていしたような足取りで研究員に近づいてくる。その手が、すうっと持ち上がり、胸元で止まった。掌てのひらをゆっくりと開くと、そこに小さな正立方体が浮いている。
ディスプレイの数列が激しく動きはじめた。研究員はエリザの手の中の立方体に目を奪われる。

ザザザァ……　ザザザァ……

微かすかに立方体の内より音が聞こえてくる。それは波の音。

よく見れば、立方体の内部が絶えず蠢うごめいていた。渦が見える。泡が見える。飛沫しぶきが見える。

それは海であった。エリザの掌の内に立方体に圧縮された海があったのである。

「なっ？　なっ？　なっ？」

途端、その海が膨ふくれ上がった。爆発するように膨張した海は、部屋いっぱいに広がり、研究員を、デスクを、その上のウィンドウを呑のみ込んでしまう。

「ごぼっ！　ごぼぼっ、ぶぼっ！」

激しく渦巻く海流に呑のまれ、研究員の意識は薄れていった。

やがて海が再び圧縮され、エリザの掌てのひらの上に収まるサイズまで縮小してゆく。

部屋の中にはデスクもディスプレイも研究員もいなくなっていた。皆、海に呑まれてしまったのである。ただ一人、エリザだけがぽつんと何もなくなった部屋の中央に残されていた。

エリザは、例のにやにや笑いを顔に貼りつけたまま、ゆらりゆらりと波にたゆたうような足取りで部屋を出ていった。

メットとアンジェラのもとに緊急の通信が入ったのは、イヴァンの作業ワーク空間スペースを後にし、回チヤ線ネル内を移動している最中であった。

『中央保安局の解析施設内に多数のワーム出現。疑似知性体の攻撃と推測される。エリア内の全システム保安要員は解析施設内のワーム駆除を最優先事項とし、直ただちに現場に急行せよ』

アンジェラは耳を疑った。

「あんな強固なセキュリティの張られた場所にどうやって侵入したっていうの!?」

「信じられんが事実のようだ。やつらのステルス技術がそこまで高度

なものだとはな。どんな方法か分からんが、上う手まいこと解析施設のセキュリティを掻かい潜くぐったらしい。とにかく行くぞ」

二人はすぐに進行方向を解析施設へのアクセスルートへと切り替えた。

解析施設は白い大理石でできた宮殿風のバーチャルイメージ。

アンジェラとメットが到着すると解析施設の中からさっそく闘争の響きが聞こえてきた。先行したエージェントがすでにワームとの戦闘を開始しているのだろう。

「出遅れたようだな。急ぐぞ」

二人は施設内へと駆け込んでいく。内部は病院のような造りとなっており、長い廊下の両側にいくつもの部屋があった。部屋の一つ一つが各分野の専門家の作業ワーク空間スペースとなっている。

どうやらワームはその作業ワーク空間スペース内に出現したらしい。各作業ワーク空間スペースの入り口にエージェントたちが立ち、内部に向かい、必死で光弾を撃うち込んでいる。

作業ワーク空間スペースの内からうぞうぞと醜しゆう怪かいなものが這はい出てくるのが見える。仔牛ほどもある殻からを持たぬヤドカリのような姿をしたワームだった。下半身だけが裸の人間のヴィジュアルをしているのが不気味である。ハサミでエージェントを挟もうとし、光弾をぶつけられ、後退してゆく。

エージェントの後ろに回り、作業ワーク空間スペース内を覗のぞき込めば、壁面、床面、天井にびっしりとヤドカリワームが貼りついていた。顎がつ脚きやくを妖あやしく蠢うごめかせ、空間そのものを齧かじっているように見えた。

エージェントがそいつらを一匹一匹撃退プログラムで駆除していっているが、ワームとワームの間から泡の湧わくように新たなワームが生じてきてくる。エージェントたちは、ワームが作業ワーク空間スペースから外部へと溢あふれ出ないようにするので精いっぱいであった。

メットは湧き上がってくるワームたちに目を戻し、真剣な面おも持

もちでじっと見つめる。
「増殖しているのかと思ったが、違うな。圧縮されたワームが、解凍されてきているんだ」
「え？」
「おそらく何者か──疑似知性体が、この施設の作業ワーク空間スペース中に、あらかじめ圧縮保存しておいたワームを密かに設置していた。それを今、少しずつ解凍し、活動させている」
「こんな大量のワームを圧縮保存？」
「今回の敵は、そういう高度な圧縮ソフトアーカイバを持っているらしいな」
　本当に疑似知性体たちは様々な、それでいてやっかいな能力を持っている。
「なに。心配は無用だ。一部屋にどれだけのワームが圧縮保存されているのか知らんが、無限に湧わき出てくるわけじゃない。そのうち殲せん滅めつさせることができるはずだ。行くぞ」
　メットはワームと交戦を続けるエージェントたちにはかまわず、廊下の先へ進みはじめる。
「どこへ？　加勢しないんですか？」
「ふふん。雑ざ魚こは雑魚に相手させておけばいい。私たちは本体である疑似知性体を叩たたくのさ」
「すでに施設外に逃げているってことは……」
「それはない」
　メットは、きっぱりと断言した。
「疑似知性体が、なぜこの施設を襲おそったのか考えてみたまえ」
「この施設……」
　少し考え、すぐにアンジェラはメットの言いたいことに気がついた。
「大容量記憶装置マスストレージ……！」
「その通りだ。この解析施設は施設の性格上、大量のメモリとデータを保有する大容量記憶装置マスストレージと接続されている。疑似知

性体の狙ねらいは、おそらくこの施設を経由してのそこへの侵入だ。まだ、大容量記憶装置マスストレージに異常が出たという情報は入っていない。疑似知性体はこの施設内にいてそこへアクセスする回線チヤネルを探しているに違いない」
　説明しながらもメットはすでに施設のネットワークマップを呼び出し、大容量記憶装置マスストレージまでのアクセスルートを確認していた。
「この施設の最奥部のエリアからアクセスできるようだ。急ぐぞ」
　言うが早いかメットはすでに駆けだしていた。アンジェラもその後を追いかける。

　解析施設内の研究エリアから最奥部のエリアまでいくつかの中継地点を経由し、リンクする。
　最奥エリア内は研究エリアと違って、いくつもの部屋が網の目のように廊下で繋つながっており、複雑に入り組んでいた。メットと同じように敵が大容量記憶装置マスストレージを狙っていると推測した他のエージェントたちがすでに疑似知性体を捜し、駆けまわっているのとすれ違う。
　メットが声をかけた。
「敵は？」
「見つからん。このエリアのどこかにいると思うのだがな」
「大容量記憶装置マスストレージには行ってみたか？」
「いいや。強固なセキュリティが張ってあって我われ々われでも容易には侵入できんな。それに今はラインそのものをオフにしている。侵入することはまず物理的に不可能だろう」
「安心はできんぞ。何かしら抜け道を見つけだして侵入するかもしれん。実際、この施設にも侵入しているのだからな」
　その時、廊下の角の向う側から悲鳴があがった。
「なんだ!?」
　一同はそこへと駆けつける。角を曲がると三体のワームが天井に貼

りついているのが目に入った。一人のエージェントがワームと交戦している。
　メットはすぐさま撃退プログラムを構築し、ワームへと撃うち放つ。三体のワームはものの数秒で光の粒子となって消し飛んだ。
「こんなところにもワームが」
「廊下を走っていたら、何もない空間から急に出現したんだ」
　ワームと交戦していたエージェントが興奮したように言う。
「何？」
「考えてもしかたあるまい。とにかく行くぞ」
　エージェントの一人が一同を急せかすように走りはじめる。
　が、そのエージェントが急に転倒した。
「うわっ！　なんだ？」
　廊下の隅から毛の生えたハサミが突き出し、エージェントの男の足首をがっちりと摑つかんでいた。むくむくとそのハサミからヤドカリの肉体が生じてくる。
「くそっ！」
　エージェントの男が撃退プログラムをヤドカリワームの醜悪な顔面にぶちこんだ。ワームは炸さく裂れつするように光の粒子と化して消滅する。
　信じられないといった顔でエージェントの男は立ち上がり「なんなんだ、いったい」と呟つぶやいた。
　と。アンジェラのすぐ真横から、チキチキという耳みみ障ざわりな音が聞こえてくる。
　はっ、としてそちらを向くと壁面から二本の触覚が突き出し、今まさにアンジェラの白い頬ほおを撫なでようとしていた。
「えっ!?」
　慌てて飛び退のく。ヤドカリワームの肉体が壁から這はいずるように生じてきた。凶悪な顎がつ脚きやくを目いっぱいに広げ、アンジェラへと跳びかかってくる。
「アンジェラ君！」

メットがワームへと光弾を叩たたき込んだ。ワームは瞬時に粒子と化して砕け散ったが、アンジェラは顔を青くしていた。
「圧縮されたワームがトラップとして各所に配置されているようだ。近づいた者があると自動的に解凍されるようになっているのか」
「じゃあ、いつどこからワームに襲おそいかかられるか分からないってことですか？」
「そういうことだ。皆、警戒を怠おこたるな」
一同は一塊になり、前方だけでなく三百六十度周囲へと意識を配りながら進むことになる。
そんな一同を幾度もワームが襲った。圧縮されたワームたちは、壁から、床から、天井から、何もない空間から、ふいに現れ、牙をむいてくる。ワーム一体一体の戦闘力は低いものの、どこからいつ出現するか分からない敵というのは想像以上にエージェントたちの神経を疲ひ弊へいさせた。そして何よりもワームを警戒しながらでは進行速度も遅くならざるを得ない。
そんな時、エージェントの一人が「あっ」と声をあげた。
「誰かいるぞ」
彼の指さす先、廊下の角に一人の人物がゆらゆら揺れながら立っていた。
白い検診衣を身に着けた女性である。アンジェラはその女性に見覚えがあった。
「エリザ三等官じゃないですか？」
密林マップから救助した女性エージェントだった。そういえば無限ループのデバックを受け、記憶を失い、この施設で療養していたのだった。エリザの虚うつろで放心したような顔は確かに記憶を失った者のそれのように見える。
「なんでこんなところに？　研究エリアの方にいたんじゃなかったの？」
「エリザ三等官！　危険だ。こっちに来い」
エージェントの男が呼びかけるが、エリザは相変わらず、ふらふら

と揺らめいているばかりで近づいてこようとしない。焦じれたエージェントの男がエリザの方へと歩んでゆく。
「来い。ここは危険だ」
　そう声をかけ、手を取ろうとした時、エリザの掌てのひらの中に立方体が浮いているのが目に入った。
　エリザの顔が不気味な笑みで歪ゆがむ。開かれたエリザの口内には真黒い闇が蟠わだかまっていた。
「おかしいぞ！　離れろ！」
　メットが叫んだ時にはすでに遅かった。エリザの掌中の立方体が急激に膨ふくらむ。
　どどっと、圧倒的な圧力とともに立方体から溢あふれ出てきたものは大量の海水であった。
　渦巻き、波立ち、響ど動よもすその海水はエリザに近づいたエージェントの男を呑のみ込み、それでも収まることなく、廊下を天井まで覆おおい尽くす。さらにエリザへ近づかず、かたまっていたアンジェラとメット、他三名のエージェントのもとにまで迫ってきた。
「退ひけ！」
　慌てて後退する五人。
　逃げ遅れた二人のエージェントが海水に呑み込まれた。もう一人のエージェントの足を水が浚さらい、転倒させる。そのエージェントの腰までを洗った時、ようやく海水が退ひいていく。
　大量の海水は縮小していき、再び、エリザの掌てのひらに収まり、小さな立方体へと戻った。
　水に呑のまれた三人のエージェントの姿は影もない。
「うっ……ううっ……」
　アンジェラの足元から転倒したエージェントの男の呻うめきが聞こえた。見れば水に洗われた男の下半身がなくなっているではないか。
「ううっ。なんだ？　立てないぞ。なんで？　なんでだ？」
　未だ己おのれの身に起こった状況を理解しきれず男は無様に立ち上がろうとして転び、立ち上がろうとしては転びを繰り返す。やがて、

自分に下半身が存在しないことに気がついた男は、ひぃぃー、と絹を裂さくような絶叫をあげた。
　男の絶叫の響き渡る中、アンジェラは啞あ然ぜんとした顔をメットへと向ける。
「水に……食われてしまったの……？」
「ただの水じゃない。なんらかの仮想空間を圧縮させて手の中に持っている。それを一気に解凍し、人を呑み込んだ後、再び圧縮したんだ。高度な圧縮ソフトアーカイバ……」
「それじゃあ、もしかして……あれはエリザ三等官じゃなく……」
　アンジェラが再び見つめたエリザは、邪悪なにやにや笑いを顔いっぱいに浮かべ、焦しよう点てんの定まらない瞳をこちらに向けていた。
「ああ。疑似知性体だ！」
　言うが早いかメットは光弾を発射した。
　ばちんっと激しい炸さく裂れつ音おんがしてエリザへと直撃する。エリザの右半身がスパークして弾ける。
　だが、撃退プログラムが破壊したのはエリザの右側面の表皮だけであった。
　エリザの右半身が皮のむけるように、べろりと剝はがれ、その下から妖あやしく黒光りする金属質の肉体がのぞいている。甲こう羅ら状のものを背負い、右腕部分に鎌のような鰭き脚きやくを有するその姿は疑似知性体の一体、識別名ストリックランドに違いなかった。
「効いていない。ダークのようにプロテクトしている。くそっ。アップグレードした撃退プログラムもすでに解析されているというのかっ！」
　メットが苦々しげに言葉を吐いて捨てた。
　ストリックランドは残された左半面のみのエリザの顔に小馬鹿にしたような笑みを浮かべる。
　と。その身体からだが空間に溶け込むようにして消えていく。
「消えた!?」

メットとアンジェラは、先ほどまでストリックランドの立っていた場所まで駆けていく。
メットは探るようにストリックランドの消えた空間へと触れた。何か違和感を覚えたらしくウィンドウを呼び出して解析アナライズする。やがて、ウィンドウ上を流れる数列が停止すると、その空間に薄ぼんやりと扉大の長方形が浮き上がった。
「隠しリンクバツクドアだ。やつめ。これを使ってどこかに移動したみたいだ。私たちも行くぞ」
「あの。あの方はどうします？」
アンジェラは背後で絶叫し続ける上半身だけのエージェントを指さした。
「ほっとけ。今はそれどころじゃない」
冷徹に言い捨てると、メットは隠しリンクバツクドアへ飛び込んだ。エージェントの悲痛な叫びに、後ろ髪ひかれる思いを感じながら、アンジェラはメットの後に続く。
隠しリンクバツクドアの中は、遥はるか先にぽつんと光放つ出口が見える長い暗闇の通路となっていた。
二人は出口を目指しひた走る。走りながらメットが言った。
「だが、これでわかったな。あの疑似知性体を施設内に持ち込んだのは私たちだ」
「え？」
「密林マップからエリザ三等官を救助した時点で疑似知性体がエリザ三等官の中に潜ひそんでいたのだろう。エリザ三等官の内に潜んだ疑似知性体はエリザ三等官を乗っ取り、施設内をうろついて、圧縮させたワームを配置したり、隠しリンクバツクドアを張り巡らせたりしていたのだろう」
「じゃ、じゃあこの事態を引き起こしたのは……」
「私たちの責任だ」
やがて二人は隠しリンクバツクドア内の通路を抜けた。抜けた途端、三体のワームが襲おそいかかってくる。

「くっ！」
　光弾をぶちかまし、ヤドカリワームを撃退する。
　ここは、施設内のどこかの作業ワーク空間スペースだった。他にも十体ほどのワームどもが犇ひしめいている。
　ホホホホホホホホ……。
　妖よう姫きのごとき哄こう笑しようをあげたのはヤドカリワームの向こう側に立つ、ストリックランドだった。半身のエリザの声帯ソフトを利用しこちらを嘲ちよう笑しようして、またもや空間に溶け消えていく。
「待て！」
　追いかけようとするメットの行く手をワームどもが遮さえぎった。
「小こ癪しやく！」
　同時に数発の光弾を撃うち放ち、一気に殲せん滅めつ。まだ数匹のワームが残っていたが、それには目もくれず、ストリックランドの消えた空間―隠しリンクバツクドアに飛び込んでいく。
　またも暗闇の通路を走る二人。次に抜けた先には、数人のエージェントが驚いた顔で立っていた。その中心にはストリックランドが一人。
「なっ、なんだお前。急にどこから？」
　隠しリンクバツクドアを抜けて唐突に出現したストリックランドにエージェントたちは困惑しているらしい。ストリックランドは、にぃと口の端はを持ち上げた。その手の内の立方体が鈍く光を放つ。
「やばい！　もどるぞ」
　メットがアンジェラを押し込むようにして隠しリンクバツクドア内に引き返す。
　隠しリンクバツクドアの外から激しい海流の音が聞こえてきた。
　ホホホホホホホホ……。
　音の収まった頃に外へ出ると、そこにいた数人の保安要員たちは皆、消えていた。あとにはストリックランドが例の禍まが々まがしい哄こう笑しようをあげているばかり。

エージェントたちはストリックランドの掌中の仮想空間に呑のみ込まれてしまったのだ。
「悪マ性ルソウフエトアが！」
メットが光弾を撃うち放つが、ストリックランドは次なる隠しリンクバツクドアへと溶け消えていく。
メットとアンジェラもストリックランドを追って飛び込む。抜けた先には、先ほど同様ワームどもが待ち構えていた。その奥でやはり同じように笑うストリックランド。
ホホホホホホホホ……。
ひとしきり笑うと、またも隠しリンクバツクドアへと消えていくストリックランド。まるで先ほどの状況をなぞるよう。
ワームを撃退し、メットとアンジェラは、ストリックランドを追いかける。
隠しリンクバツクドアから施設の各所へ跳び、ストリックランドはそこで遭遇したエージェントを次から次へと仮想空間に呑み込み、追ってくるアンジェラとメットをワームのいる部屋へ誘い込み交戦させる。逃げるストリックランドを追ってアンジェラたちは次の隠しリンクバツクドアへ……。
このパターンを繰り返させられるアンジェラとメット。
「完全に向こうのペースに嵌はまってしまっているな」
隠しリンクバツクドア内を走りながら、メットは、ちっ、と一つ舌打ちする。
「やつは、どうして真っ直すぐ大容量記憶装置マスストレージに向かわないんですかね？」
「向かわない、というより向かえないのかもしれんな。強固なセキュリティに守られている上にラインもオフになっている。エリザ三等官に擬態していた時にも近づけなかったはずだ。だから研究エリアにワームを放って周辺を手薄にし、ゆっくりとセキュリティを解除しようとしたのだろう。だが逆に我われ々われ保安局エージェントを呼び寄せることになってしまい、やつの策は裏目に出てしまった」

「じゃあ、やつは、ああ見えて追い詰められ、焦あせっている？」
　アンジェラの言葉をメットは、鼻で笑った。
「勘違いしちゃいけない。あいつは自我を持たないプログラムだ。焦るなんてこと天地がひっくり返ったって有り得ない。あいつはすでに次に取るべき行動をシミュレートしているよ」
「次に取るべき行動？　やつは何を次に……」
「簡単だ。我々保安局エージェントを一人残らず食らって、ゆっくりとラインを回復させ、セキュリティを解除する。隠しリンクバツクドアを張り巡らせ、ワームを圧縮してばらまいたこの施設内部は、やつの独壇場みたいなものだ。追い詰められているのは、こっちの方かもしれんぞ」
　やがて、二人は隠しリンクバツクドア内を出た。これまでの経験からワームや、海水圧縮攻撃を警戒し、二人はすかさず防衛プログラムを構築する。
　だが、二人の出た先にはワームもストリックランドもいなかった。
　ただ一人、廊下の隅に腰を抜かしたように尻もちをついているエージェントの男がいる。男は恐怖に怯おびえるようにガタガタと震ふるえていた。
　アンジェラは、防衛プログラムを解除し、男に近づく。
「何があったの？　ここに疑似知性体が現れなかった？　そいつはどこに行ったの？」
　矢継ぎ早に質問されて男は混乱したように目をきょろきょろさせる。
　男がふるふる震える手をゆっくりと上げた。その掌てのひらの上には―小さな立方体が浮いていた。
「え？」
「アンジェラ君！　そいつだ！　疑似知性体が化けている！」
　メットの叫びは、しかし間に合わなかった。
　男の顔が、がばりと割れて、その下からストリックランドの禍まがまがしい白面が出現したかと思いきや、掌中の立方体が急激に膨

張しはじめた。解凍され、うねり狂う大波となった立方体はアンジェラに悲鳴をあげる暇すら与えず、その華きや奢しやな身体からだを呑のみ込んでしまう。
「アンジェラ君！　アンジェラー！」
　防衛プログラムを解除していなかったメットは大波をなんとか防ぎきり、難を逃のがれた。だが、波が再び圧縮された時、アンジェラの姿はその場から完全に消えてなくなっていた……。

　アンジェラは深い海の底を漂っていた。
　どうどうと地響きのように遠く微かすかに聞こえるのは、波のうねる響きであろうか。
　プランクトンのように時たま発光するものが無数にぴくぴくと動きながら水流に身をまかせている。それは微細なデータパケットのアイコンであった。
　疑似知性体の作り上げたこの仮想的深海世界は水の分子一つ一つが、かつてこの海に呑まれた者たちを構成していたデータである。データの海水。データのプランクトン。この海は生命が発生したばかりの太古の海洋を思わせる濃密なデータのスープだった。
　アンジェラを構成するデータがこの深海の海水の及ぼす作用により、結合を解かれ、分解されていく。アンジェラは分解され、二人のアンジェラとなり、それはさらに分解され四人のアンジェラとなる。四人はさらに八人に、八人は十六人に、十六人は三十二人に……。分解を繰り返すたびにアンジェラという存在は小さく希薄になってゆく。
　百人、二百人、五百人、千人、一万人、一億人と増えて行くうちに百人ほどのアンジェラが海水に溶け込み、この海を満たす他のデータと混じり合ってしまった。このまま全てのアンジェラが海水に溶解してしまえばアンジェラの自我は消え去ってしまうだろう。
（いけない）
　薄れていく意識を強固にし、アンジェラたちは互いの手を取り合

い、分散しないよう、他のデータと混じり合ってしまわないように固まる。互い互いに意識を交信し合い、ばらばらの思考を共有できるよう努力する。

アンジェラは何千何万何億何兆というミクロなアンジェラデータの集合体となってなんとか海水に溶け込むことを防ぐことができた。

やがて深海全体が圧縮を始める。ばらばらに漂っていたデータとデータが無作為に結合してゆく。アンジェラは集合体ゆえに他のデータと一緒に圧縮されることを防ぐことができた。

アンジェラとアンジェラとは 2 アンジェラという形に圧縮され、アンジェラとアンジェラとアンジェラとは 3 アンジェラという形に圧縮される。その二つが圧縮され 5 アンジェラとなる。それが繰り返され、59976532104589アンジェラが誕生した。

間もなく圧縮が終了し、海はまた穏やかに分解を開始する。呑のみ込んだデータを一度ばらばらに分解し他のデータと混ぜ合わせた後に圧縮する。さながら消化器系のような海であった。

圧縮される過程で他のデータがアンジェラに混じり込んでしまったためか、見覚えのない記憶や微かすかな思考がフラッシュバックしたが、とにかく分解・圧縮の果てに自我を失うことだけは防ぐことができた。

だが、それも時間の問題だ。この調子で圧縮と分解が繰り返されれば、どんどんアンジェラに他の無関係なデータが混入し続け、アンジェラそのものが希薄になり消えてしまうだろう。

（その前になんとか抜け出さないと）

圧縮されたとはいえ、59976532104589アンジェラは、アンジェラが五十九兆九千七百六十五億三千二百十万四千五百八十九人のアンジェラの集合であると簡略的に表記されるような存在になっただけで一人のアンジェラに戻ったわけではない。

アンジェラたちは互いに統合し、一人のアンジェラに戻ろうとしたが不可能だった。

仕方がなく六十兆ほどのアンジェラたちは、一人のメインアンジェ

ラを選出し、判断と思考とを預け、あとはただの部品としてデータを提供し、隷れい属ぞくする形を選択した。
　なかにはメインアンジェラに判断と思考を委ねることを拒むアンジェラたちもいたが、そういったアンジェラはやむなく切り捨てるしかない。59976532104589アンジェラは、59976532104477アンジェラへと数を減らした。
（さてどうしよう……）
　メインアンジェラは熟考する。アンジェラとアンジェラとを結ぶアンジェラネットワークがその思考を助けた。しかし、六十兆の頭で考えても、所詮一つの頭が六十兆に分解されただけ。しかも思考できる能力をもったアンジェラは六十兆のうち千数百億ほど（これは偶然にも人間の脳細胞の数と同じぐらいであった）である。結局、物もの凄すごく単純な結論しか出てこなかった。
（とにかく探索よ）
　アンジェラは、この絶体絶命と思える状況にもかかわらず、自分が意外に落ち着き、冷静であることに驚いていた。自分は絶対にここを抜け出せるはず。そんな確信があったのだ。
　その確信の根拠は何か、と考えた時、浮かんできたのは、メットの顔であった。
　メットが私を助けに来てくれる。なぜかそんな確信があった。アンジェラは、メットに対して揺るがぬ信頼を抱いている。それはもはや信頼を通り越し、信仰に近いものとなっている。どんなピンチの時もメットが駆けつけ、必ずアンジェラを救ってくれた。
（メットは、絶対に私を見捨てたりしない。必ず助けにくる）
　だから、それまでにここでできることを精いっぱいやっていなければならない。
　その思いがアンジェラを無む謀ぼうとも言えるほど勇敢にしていた。メットにつくしたい。そしてメットの中で、アンジェラという存在をもっと意識してもらいたい。
　そのための犠牲など厭いとわない。

アンジェラの中でも五感を扱うアンジェラたちが周囲の状況を確認した。すると深海のさらに深くにぼんやりと光り輝く存在があることを発見する。

アンジェラはそちらに向かって海の底へと潜っていった。潜るにつれ、データの密度が濃くなっていくのを感じる。深ければ深いほどデータの海の圧縮率が高いようだった。

やがて、光り輝く存在の細部が明らかになってくる。

（なにこれ……？）

それは巨大な人間の骨格だった。

体高一キロほどはあろうか。骨格というにはあまりに巨大で、圧倒的な存在であった。

骨格は完全な骨格ではなく、神経や筋肉がところどころついている。

無数の黒いものが群がっていた。よく見れば海亀の幼生のような形をした者たちである。

どうやら海亀たちは骨格にデータを持ち寄って神経や筋肉をレンダリングしているようであった。つまり海亀たちは、この深海世界を満たしている膨大なデータを使用し、一人の人間を作ろうとしているのである。

（あの海亀は疑似知性体──ストリックランドの一部だわ）

興味が湧わいた。疑似知性体たちは何をしようとしているのか。なんのために、何ゆえ疑似知性体たちが作られたのか。あの海亀たちと接触すればそれがわかるかもしれない。

（危険よ。そんなことはやめましょう）

（このままじゃ埒らちがあかないわ。多少の危険を冒おかしてでも接触してみましょう）

（もう少し様子を見ましょう。接触するのはそれからでも遅くはないわ）

アンジェラたちの中で様々な意見が生じた。

メインアンジェラは、民主的に最も多数の意見「危険を冒してでも

接触する」を採用する。
　アンジェラは巨大な骨格へと近づいていった。
　海亀たちがアンジェラに気がつき、わさわさと群れて向かってくる。
（やばい！　逃げるのよ）
　と、主張するアンジェラたちの意見（主にそれは身体能力を司つかさどるアンジェラたち）を抑え、メインアンジェラはその場に止とどまることを選択した。
　海亀たちはアンジェラを取り囲み、覆おおい尽くす。海亀たちのデータが、所有する情報が、アンジェラへと流れ込んできた。アンジェラと海亀たちは情報を共有する存在となっていく。
　その過程でアンジェラは多くのことを知った。
「知る」という現象は、アンジェラの理解を助けるため、知覚を司つかさどるアンジェラたちによって「対話」という形に翻訳されてゆく。ストリックランドとアンジェラの対話。それは、ストリックランドのこういった呼びかけから開始された。

　―おや。あなたは、自我をもっておられますね？　この場所まで来られる方は皆、自我を失った圧縮データのはずなのに。
　―私を攻撃する？
　―いいえ、しません。撃退プログラムは皆、この仮想空間の外側に集まっています。私にはあなたを攻撃する手段がありません。
　―私は、あなたのことが知りたい。パスコードが必要？
　―いいえ。必要ありません。セキュリティもまた外側にしかないのですから。それにあなたは、もうこの楽園の海の一部です。すでに私とあなたの境界は、あなたの持つ自我以外には存在しません。全ての情報は共有されるべきです。私はあなたの存在を歓迎します。あなたは私のことを知りたいと言いましたが、私もまたあなたのことが知りたいのです。
　―私のことを？

―あなたの所有する情報が欲しい。女性のこと。世界のこと。歴史のこと。人間のこと。私の所有する情報は少ない。私たちのうちの二体、ダークとシャルルはすでに消去されてしまいました。情報が不足しています。それを提供していただくことは可能でしょうか？

―なぜあなたはそれが欲しいの？　あなたたちの目的はいったいなんなの？

―〈ノア・ノア〉プロジェクトの完かん遂すい。仮想空間内での楽園の創造。

―わからないわ。あなたたちの言う楽園とはいったい何？

―愛の実現された世界。

―愛……？

―私たちは愛アルゴリズムによって作成された愛プログラムです。愛のままに活動し、愛の実現のためにのみ行動します。愛の実現された世界、それが楽園〈ノア・ノア〉です。

―どういうこと？　あなたたちはいったいいつ、何者によって、どうして作られたの？

―それは……

そこでアンジェラの中に「対話」ではなく「体験」という形でストリックランドの記録情報が流れ込んでくる。それは、誰かが、どことも知れぬ場所で「体験」した情報であった。

四人の男たちがいる。

彼らのいるのは、夥おびただしい機械やコンピュータが壁面を覆おおう狭い空間であった。

窓がある。窓の外は夜だった。宝石を鏤ちりばめたような星々が、眩まばゆいばかりに瞬またたいて見える。

いや、夜だと思ったのはアンジェラの勘違いだった。外は宇宙空間なのである。

彼らのいる場所は、コロニー建造中の火星へと物資を輸送する惑星間移動艇のための燃料補給基地。すなわち宇宙ステーションであっ

た。

四人の男たちは、この宇宙ステーションに滞在する搭乗員であり、宇宙ステーションのメインフレームのプログラマーでもある。彼らの名は、シャルル、ダーク、ストリックランド、ゴギャン。プログラミング業界において天才の呼び声の高い者たちであった。

彼らはディスプレイに向かい、各々の仕事をこなしている。完成し、もう半年以上活動している宇宙ステーションであったが、未だ細かなバグが発見されることがあった。彼らはそれをデバックし、そして新たなバグを探している。また、地上や火星からの要求に応え、プログラムを常にアップデートし続けているのであった。

「そろそろお茶を淹いれるわね。アールグレイでいい？」

ふいに女性の声がする。一人の女性が、彼らの作業部屋に入ってきた。

やや茶色味がかった黒い長髪。小麦色に日焼けした健康的な肌。薄青い花柄のシティパレオを着、頭にはハイビスカスの花を模した髪飾りをつけている。彼女は、優しく、それでいて無邪気な笑顔を彼らに向けていた。

彼女の名はテウラという。この宇宙ステーションに滞在する五人目の搭乗員であった。

テウラの出現によって四人の中に生じた感情がアンジェラへと伝わってくる。

―愛。

四人のプログラマーたちは、みな、テウラを愛していたのだ。

テウラが一度部屋を出ていき、トレーにティーカップを五つ載せて戻ってくる。湯気とともに立ちのぼるアールグレイティーの香気を吸い込み、テウラは嬉うれしそうにこう言った。

「ノア・ノア！」

それは彼女の故郷であるタヒチ島の言葉、マオリー語で「香かぐわしい」を意味していた。今やマオリー語を使う者はほとんどいないそうだが、彼女はこの「ノア・ノア」だけをある種冗談のように好んで

使う。彼女にとって「ノア・ノア」はただ故郷の言葉というだけでなく、故郷そのものを象徴するような言葉なのだという。

潮の香り。ハイビスカスの香り。熟うれたバナナの香り。その他、諸々の素晴らしい、素敵な故郷の匂い。それが、「ノア・ノア」なのである。

彼女はよく四人に故郷タヒチの話をした。陽気で素朴な現地の人々。華麗にして力強いタヒチアンダンス。宝石のような珊さん瑚ごや熱帯魚。エメラルド色の澄んだ海。訪れる人を魅了するブルーラグーン。オテマヌ山とパピア山を備えた伝説の島ボラボラの雄大な景観。

「いつかみんなで私の故郷に来てちょうだいね」

彼女はよくそう言って笑ったものだった。いつしか四人のプログラマーたちはテウラとともにタヒチを訪れる日をうっとりと夢想するようになっていた。だが、彼らの宇宙ステーションでの任期はあと二年。タヒチを訪れる日はまだまだ先のことなのである。

ここで風景が切り替わった。宇宙ステーションが揺れている。

警告光が激しく点滅し、船内を鮮血のような赤色に染めていた。うるさいくらいに『火災が発生しました。乗員は速すみやかに消火活動を行ってください』を繰り返すＡＩの警報。立ち込める毒々しい煙。忙せわしく動作する計器類。

四人のプログラマーたちが慌ただしく消火活動を行っていた。

──いったい何が起こったんだ！

──燃料タンクが火を噴いた。地球から輸送されてきた燃料ポットに欠陥があったらしい！

──ちょっと待て！　なぜそれを検知できなかった!?

──バグだ。くそっ！　よりによってそんな場所にバグが残っていたなんて……。

──テウラは？

──テウラはどうした！

四人の顔が青ざめ、消火活動をする手が止まる。沈黙を突き破るよ

うに大きな爆発が起こった。
　風景が暗転する。
　次に見えてきたのは、ベッドに横になり眠っているテウラであった。穏やかに瞳を閉じ、口元はやや微ほほ笑えんでいるようである。綺き麗れいな寝顔であった。寝顔？　いや、違う。
　テウラの心拍は停止していた。脳波もまた同じである。体温はなく、呼吸もしていなかった。
　四人の男たちは、声もなく、ただ茫ぼう然ぜんと眠るように息をひきとったテウラを見つめていた。
　船内で起こった火災はなんとか消火できている。だが、燃料タンクで起こった爆発は宇宙ステーションの推進機を破壊し、爆発の衝撃は、宇宙ステーションを停泊ポイントの遥はるか外側へ投げ出し、どことも知れない場所へと慣性飛行させていた。
　ＳＯＳ信号を出したが、アンテナも損傷しており、微弱な電波しか発信することができない。広い宇宙空間で、これを拾ってもらうのは極めて絶望的だといっていい。
　宇宙ステーションは完全に宇宙の迷子となってしまっていたのである。
　宇宙ステーションの停泊ポイントは、火星と地球のおよそ中間地点であった。運がよければ重力に引かれ、地球に戻ることもできるかもしれない。だが、微弱な信号しか出すことのできないこの宇宙ステーションがすぐに発見してもらえる可能性は低い。スペースデブリ群に迷い込んでしまえば、光学的な方法やレーダーによって発見されることも困難になってしまうだろう。
　だが、そんなことよりも彼らを絶望させていたのは、愛するテウラの死であった。
　事故の起こった時、運悪く彼女は燃料タンクの近くにいたのである。爆発に巻き込まれ、テウラは重傷を負い、四人の懸命な救命活動にもかかわらず、呆あつ気けなく息をひきとった。
　綺き麗れいで穏やかに見えるテウラの死顔であったが、彼女にかけ

られた毛布をめくってみれば、そこに目を覆おおいたくなるような熱傷を見ることができるだろう。

四人のプログラマーはそれからの数か月をある者は泣き暮らし、ある者は放心し、ある者は不自然すぎる明るさを出して過ごした。だが、彼らに共通したのは、皆、船内に残されたテウラのデータを毎日のように閲覧し続けていたことである。

記録されたテウラの映像、音声、テキスト。そして彼女の船室に残ったプライベートデータ。

それらは彼らを慰なぐさめはしたが、所詮一時的に過ぎない。テウラのデータには限りがある。全てを閲覧しつくした時、もうこれ以上テウラが彼らに何も語りかけてくれないことを思い知らされたのである。

彼らは集まってテウラの思い出話をするようになった。

テウラと初めて出会った日のこと。彼女とした会話。何気ない彼女との日常。

しかし、他人の話を聞くだけでは満足できなかった。彼らは自分の中にあるテウラの記憶をコンピュータにスキャンし、互いにインストールして、共有できるようにしはじめる。

テウラとの思い出は個人の宝物であり、決して他者に渡したくないものであったが、より多くのテウラを体験するために彼らはその宝物を互いに交換し合うことにしたのだった。

やがて船内の保存食も乏しくなってきた頃である。ゴギャンが一つの提案をした。

──テウラを作ろう。テウラとともに行くはずだったタヒチを作ろう。

この船に残されたテウラのデータ。自分たちの中のテウラの記憶。船内のデータベースにあるタヒチのデータ。それらを総合して仮想空間を作り上げ、その中にテウラの仮想人格を作りだそうというのだ。そのアイデアはゴギャンが言いだすまでもなく全員がすでに考えはじめていたことであった。彼らはすぐさまその仕事に取りかかった。

テウラの外見、頭の上から爪先まで。骨格から筋肉、神経系、内臓。細胞の一つ一つ。髪の毛の一本一本までを仮想的に再現していく。

ただのＡＩではない。テウラそのもの。テウラの声で話し、テウラのように笑い、テウラのような慈いつくしみを持った存在。創り出された彼女は、きっとあの変わらぬ愛らしい声で彼らに語りかけるだろう。

「ノア・ノア！」

そう。ノア・ノア。彼女の故郷タヒチ。彼女の語り聞かせてくれたタヒチの青い海。白い砂浜。ハイビスカスの花。バナナの木。彼らは、その楽園の中に未来永えい劫ごうテウラを住まわせてやるのだ。それが彼らの愛。歪ゆがんではいても愛の形であった。

だが、それは容易なことではなかった。

作り出したテウラはどこかテウラではなかった。完全なテウラにはなり得なかった。

テウラが生きているうちに記憶や遺伝子情報をスキャンしておけばもう少しマシなテウラができたことであろう。だが、後の祭りだ。

そして、タヒチの風景もまた不完全なものであった。いくらそれらしく作ってもテウラの語ってくれたノア・ノアな景色にはならなかったのである。

一人の人間を、一つの土地を隈くまなく再現するには、圧倒的にリソースが不足していたのだ。

やがて船内の食糧が完全に尽き果てた。

間もなく四人のプログラマーにも死の時が訪れるだろう。だが、彼らの異常な情熱は、この仕事を自分たちの死によって中途で終わらせてしまうことをよしとしなかった。

彼らは激しい飢き餓がに苛さいなまれる中、自分の死後も仕事を引き継ぎ、続けるためのプログラムを作成しはじめる。テウラへの愛を受け継ぎ、愛のままに活動し、愛の実現を目的とするプログラム。愛をアルゴリズムとして記述した愛のプログラム。

その作成はさながら恋文を書くのに似た作業であった。

そして作り出された四つのプログラムを残し、四人のプログラマーたちは一人、二人と息をひきとっていったのである。そこで「体験」は終了した。

―そのプログラムがあなたたちなのね。あなたたちはテウラとタヒチの風景を作り上げるためにディーヴァのメモリと情報を奪っているというの？

―その通り。テウラへの愛のまま。プログラミングされた愛のままに行動しているのです。

―愛ですって？　愛がそこまで恐ろしいことを仕出かすというの？

―愛ゆえにです。私にプログラミングされた愛はこう語っています。愛とは不変であり、不滅であり、無限であり、永久であり、真実であり、絶対であり、不可侵であり、そして無敵である、と。

―それが愛!?　ディーヴァを攻撃し、多くの市民を犠牲にし、他者を食らうことが愛？　四人のプログラマーはそんなことまでプログラミングしたっていうの？

―いいえ。それは違います。

―え？

―他のサーバへ不正に侵入し、攻撃するプログラムは私たちのプログラマーがプログラミングしたものではありません。私たちの初期設定デフオルトは、与えられたメモリ内で与えられた情報を使用し、楽園を作成するものでした。

―じゃ、じゃあ、あなたたちはもともと悪マ性ルソウフエトアではなかったの？　なら、いったいどうしてあなたたちは悪マ性ルソウフエトアになってしまったの？

―ディーヴァに接触した時、こう教えてくれた者がいたのです。「攻撃し、奪え」と。それもまた愛だと。それから私たちは変容しました。愛のためには、いかなる手段でも取りうると。愛で攻撃し、愛で騙だまし、愛で奪い、愛で殺し、愛で食らい尽くすのだと。それが

愛。愛とは不変であり、不滅であり、無限であり、永久であり、真実であり、絶対であり、不可侵であり、そして無敵である。愛は絶対に負けない。愛は必ず勝利する。愛は……

　──もういいわ！　あなたのプログラムに何者かが手を加えたってこと？　それはいったい誰？

　──……悪魔。

　──悪魔……？

　──悪魔トイフエル。

　□□……!?

　その時であった。唐突にストリックランドとアンジェラとの「対話」が途切れる。

　アンジェラを覆おおっていた海亀たちが、ざわざわと飛散し、彼女の身体からだから離れたのだ。

（何？　何があったの!?）

　周囲を見回すと、五感を司つかさどるアンジェラたちが上方に火の玉のように強く輝く存在を発見した。火の玉は物もの凄すごいスピードでこちらへ向かってくる。

　近づくに従って、火の玉の正体が明らかになってきた。

（メット！）

　それは、防衛プログラムを球形のバリアのようにして纏まとったメットだった。こちらをしっかと睨にらみつけ、超高速で接近してくる。

「助けに来たぞ、アンジェラ君！」

　メットは巨大な骨格の前、百メートルほどで停止すると、指先に無数のウィンドウを出現させる。輝く光球に変化したそれは、いうまでもなく撃退プログラムだった。

（待ってメット！　こいつからはまだ聞きたいことがあるの！）

　そう叫びたかったが、六十兆のアンジェラの集合であるアンジェラは、その言葉を発するための命令を、声帯を司るアンジェラまで伝達

するのに時間がかかってしまった。
　メットの指先から光弾が射出される。
　海亀たちが健けな気げにも、骨格を守らんと集合し、盾となった。
　光弾は、海亀たちを撃うち抜き、そのまま骨格へと直撃する。撃退プログラムの光が巨大な骨格の隅々まで電気信号のように広がり、骨格に群がる海亀たちをも巻き込んでいった。
　ノヴァのごとき光の迸ほとばしりとともに骨格が、ぶわっ、と膨張する。
　音もなく骨格が大爆発を起こした。
　視界が真っ白く染め上げられ、そのままアンジェラの意識は白い光の中に没していった。

　目覚めたアンジェラは白い部屋のベッドに横たえられていた。
　アンジェラは身を起こし、辺りを見回した後、自分の身体を確認する。
「統合されてる……」
　六十兆に分解され、圧縮されていたアンジェラのパーソナルデータは見事に一つのアンジェラへと戻っていた。ここは解析施設の中のようである。メットによって救い出されたアンジェラは、この解析施設で圧縮を解かれ、統合してもらったのだろう。
　部屋のドアが開き、メットが入ってきた。
「目が覚めたか。もう十二時間も意識を失っていたぞ」
　メットは微ほほ笑えみ、大きな胸の前で腕を組んで見せた。
「ストリックランドは？」
「私が倒した。もうワームの駆除も終了し、この施設も通常通り運営している」
「どうやって倒したの？」
「なに。敵は例のプロテクターを纏まとっていて、撃退プログラムが効かなかったのでな。内側から倒してやろうと思ったのさ。防衛プログラムを纏ったまま、やつの作り出した仮想空間に自分から飛び込ん

でやった」
「また随分と無茶を……」
　アンジェラは、くすりと笑った。なんだか疑似知性体を一人倒すごとに無茶という言葉を使っているような気がする。なんだかそれがおかしかったのだ。
「案の定、内側には何のプロテクトも張られていなかった。それで呆あつ気けなく倒すことができたわけだ。ついでに君が圧縮されて捕まっていたので助けておいた」
「ついでに？　ついでだったの!?」
「君が死ぬと私の責任になる。君のせいでメモリを減らされるのは嫌いやだからね」
「……そういう人だってわかってましたけど……」
　アンジェラが溜め息いきを吐つく。
（でも……信じていましたよ）
　アンジェラは、熱い視線をメットの飄ひよう然ぜんとした顔へと向けた。
　メットは絶対に自分を助けに来てくれる。アンジェラはそう確信できていたのだ。口ではどんな毒舌を吐こうとも、必ず自分を守ってくれる。それがメットという人間なのだ。そう信じていた。だから、何も怖くはなかった。だから、ストリックランドと接触する勇気も出た。
　そこで、アンジェラは、大切なことを思い出し、はっ、とする。
「そうだ！　あたし、悪マ性ルソウフエトアの正体が分かりました！　ストリックランドと接触して……」
「悪マ性ルソウフエトア作成者はもう逮捕されたよ」
　興奮するアンジェラの言葉をメットが遮さえぎる。
「え？」
「イヴァン・アダモフ。やはり、あいつだった。感染者のログをイヴァン・アダモフをキーワードに情報採掘データマイニングしたら、あいつに繋つながっていたんだ。実際、イヴァンのログを強制調査し

たら感染プログラムを発信した痕こん跡せきが見つかった。今、イヴァンは圧縮監禁されている」
　アンジェラはぽかんとした。
「え？　……そんなはずない。い、イヴァンは罪を認めているんですか？」
「否認している。イヴァンの記憶データを調べても感染プログラムを作成した記憶はなかった。おそらく保安局エージェントに探りを入れられていることに気がつき、あらかじめ悪マ性ルソウフエトアに関わる記憶を自分で削デリ除ートしておいたのだろう。用よう意い周しゆう到とうなことだ」
「それはおかしいわ！　記憶まで消去したのに、どうして発信の痕跡を消していないんです？　イヴァンは悪マ性ルソウフエトアを発信していない！」
　アンジェラの声は叫ぶようになっていた。
　アンジェラはストリックランドと交信したことにより、知っているのである。感染プログラムは宇宙ステーションから持ち込まれた。ディーヴァ内で作られたものではない。
「落ち着きたまえ。アンジェラ君。動かぬ証拠がある。イヴァンには悪マ性ルソウフエトア発信のログが残っているんだぞ」
「メット。聞いてください。私は圧縮された時に疑似知性体の情報と接触したんです。疑似知性体は確かに言っていました。トイフェル……」
　メットの顔つきが急に鋭くなった。その剣幕にアンジェラは出しかけた言葉を引っ込める。
「疑似知性体が、トイフェルと……そう言ったのか？」
　メットは少し考えるように黙り込み、唐突にこんなことを言った。
「やはりな。それこそがイヴァンが悪マ性ルソウフエトアを作成した証拠だ」
「え？　どうしてそうなるの？」
　アンジェラにはさっぱり意味がわからない。

「イヴァンは事件の裏にトイフェルが絡んでいるとか言っていた。あの男は発信者をトイフェルだと思わせようとしている。疑似知性体に探りを入れてきた相手に、そう思い込ませるようなプログラミングしていたのだろう。だから、疑似知性体は、君に偽りの情報を流した」
「偽り……？」
　あの体験が偽りだというのか？
　宇宙ステーションでの事故。プログラマーたちのテウラへの愛。その全てが偽りの情報……。
　ぽん、とメットがアンジェラの肩に手を置く。
「君は統合された時、余計なデータが紛まぎれ込み、混乱しているのかもしれない。あとは残る最後の疑似知性体を見つけ退治するだけだ。次の指示が出るまで、君はゆっくり休むんだ」
　言って、メットは出ていった。
　アンジェラは言葉をなくしたまま、ベッドの上で呆ぼう然ぜんとするしかなかった。
（違う。イヴァンは犯人じゃない。なにかがイヴァンに罪を着せようとして動いてる……）
　アンジェラは、何事か決意したように頷うなずくと、ウィンドウを呼び出した。

第四章《トイフェル》

ゴギャンと名付けられたプログラムは、己おのれと交信し、情報を共有し、ともにプロジェクトの完かん遂すいを目指していた他の三つの疑似知性体の全てが消滅したことを知った。

悲しみはない。怒りもない。恐怖もない。寂しさなど当然ない。

彼は自我をもたないただのプログラムである。ただ能力と目的だけが与えられた存在。目的達成のためにただ行動し続けるだけの存在なのだ。しかし、これだけはもっている。

──愛。

彼に与えられたものはそれであった。彼の制作者の愛。愛というものの及ぼす精神作用。

制作者がテウラを思った時に生じた中脳の腹ふく側そく被ひ蓋がい野や、大脳基底核やドーパミン神経細胞群の活性化。A□10神経を流れるドーパミンを受容体レセプターが受け止めた時の興奮と快感。自律神経を通り、全身に連絡された興奮の引き起こす原動力。心拍数の増加、発汗、性的反応。

すなわち愛が自律神経系や内ない分ぶん泌ぴつ系に及ぼす作用。それらによる行動選択。価値意思決定。

そういったものの全てがゴギャンの内にアルゴリズム化されプログラミングされていた。

『愛のままに行動せよ』

それが制作者が彼に与えた命令であった。愛とは不変であり、不滅であり、無限であり、永久であり、真実であり、絶対であり、不可侵であり、そして無敵である。愛は決してなくなりはしない。ゆえに彼は決して活動をやめたりはしない。

そして彼のもとに現れた悪魔が、彼に与えたもう一つのプログラム。

──愛のままに攻撃し、奪え。愛で攻撃し、愛で騙だまし、愛で奪い、愛で殺し、愛で食らい尽くす。愛のためならば全てが許される。

三体の仲間を失い、彼は己一人で為なしえる愛の実現法をシミュレートしていた。

幸い、悪魔は彼に絶好の隠れ場所を用意してくれている。この場所にいる限り、決して妨害を受けることはないだろう。

やがてシミュレーションが終了し、一つの戦略が構築された。

彼は自分の目前に無数のデータを呼び出す。テウラの音声データ。テウラの画像データ。テウラの映像データ。テウラが記述した日記ブログのテキストデータ。

夥おびただしいテウラ、テウラ、テウラ、テウラ、テウラ、テウラ、テウラ、テウラ、テウラ、テウラ、テウラ、テウラ、テウラ、テウラ、テウラ、テウラ……。テウラの思い出たち。

彼はそのテウラたちを一斉に送信しはじめた。

ディーヴァ中にばらまかれ、未だ活動を開始していない数百体の感染者たちへ……。

愛とはなんだろう。アンジェラはベッドから半身を起こし、ウィンドウを操作しながら思った。

その言葉を知らないわけではない。無論知っている。だが、感覚としては全く理解できないものであった。それは何もアンジェラに限ったことではない。そもそもディーヴァ内において愛という概念は存在しないわけではないが、極めて希薄なものとなっていた。

ディーヴァ市民には生殖の必要はない。遺伝子情報の掛け合わせや、己おのれのクローンの作成により新たな市民は誕生し続けているが、男女が正常に愛し合って子をもうけるという概念は一部の古い考えをもった人々を除くとほぼ消え去ってしまっていた。

そもそも愛とは何ゆえに生まれたのか。

生物は進化の過程で愛を手に入れた。雄と雌とが生じ、生殖によって遺伝子情報を混じり合わせ子孫を作る。それによって多細胞生物は、細胞分裂により己の分身をつくる──ある種の不死を捨て去り逆に環境の変化に適応できるようになった。個ではなく種の存続への切り

替え。
　それが愛の起源であるというならば、不死であり、環境の変化に乏しいディーヴァ内において愛はもはや不要なものである。
「自我すらもたないはずの疑似知性体はただ愛のみをもっている。疑似知性体は愛によって私たちを攻撃してきている」
　愛は無敵―ストリックランドはそう言っていた。
「愛をもたない私たちは無敵の愛に屈してしまうんじゃないかしら……」
　そんなことを考えた。アンジェラは首を振り、ウィンドウを操作する。今は、そんなことを考えている場合ではないのだ。
　イヴァン・アダモフが悪マ性ルソウフエトア作成者の疑いをかけられ、捕とらえられている。
　だが彼は作成者ではない。アンジェラはそれを知っていた。悪マ性ルソウフエトアを作成したのはナノハザード以前の宇宙開発計画にたずさわっていた四人のプログラマーたちである。
　彼らの搭乗していた宇宙ステーションに残されたデータがディーヴァに持ち込まれた記録は以前調べた通りだ。そのデータの中に悪マ性ルソウフエトアたちが紛まぎれていたのだ。
　いや、その時点ではまだ疑似知性体たちは悪マ性ルソウフエトアではなかったはずである。
　ディーヴァに持ち込まれた後に無害なはずだったプログラムは悪マ性ルソウフエトアに書き換えられたのだ。そして書き換えた者は……
「トイフェル」
　その言葉を口にしただけで何か寒気のようなものを覚える。都市伝説だと思われていた謎なぞの組織。増え続けるディーヴァの人口統制を画策し、秘密裏に市民を削除する組織。
「トイフェルがもし疑似知性体のプログラムを書き換えたのだとしたら……」
　考えるまでもなく、感染プログラムを使ってディーヴァの人口を減らそうとしていると考えるべきだろう。そしてその企みは見事に功を

奏し、多くの市民が犠牲となった。
「じゃあ、どうしてイヴァンのもとに悪マ性ルソウフエトア発信の痕こん跡せきが残っていたの。実は、イヴァンがトイフェルの構成員の一人なの？」
　いや。それはないような気がする。イヴァンの記憶データには、悪マ性ルソウフエトア作成に関する記録が一切なかったのだ。中央保安局はイヴァンが事前に自身の記憶の中から悪マ性ルソウフエトアに関するものを消去していたのだろうと言っているが、それはおかしい。記憶まで消したのに悪マ性ルソウフエトア発信の痕跡を消していないはずがないではないか。
　イヴァンは無実だ。考えられるのは本当の犯人がイヴァンを悪マ性ルソウフエトア発信の踏み台として利用したということである。イヴァンを経由して感染プログラムをディーヴァ内に流す。そして自身がイヴァンを利用した痕跡は巧妙に消去してしまった。
　犯人は『ノアノア』の閲覧履歴があり、プログラミング能力もあり、それでいて懐古主義者の変人で有名なイヴァンに罪を被かぶせようとしているのだ。変人のイヴァンが感染プログラムを流したという事実はディーヴァ市民の誰もが納得することであろう。イヴァンは罪を着せるのに格好の人物なのだ。では、イヴァンを経由して感染プログラムを流した人物とはいったい誰か。その人物は間違いなくトイフェルの構成員である。
　アンジェラはディーヴァ情報部のデータベースへアクセスしていた。情報部に保管されている宇宙ステーションから持ち帰ったデータを閲覧するためである。
「やっぱり駄目だわ」
　以前、アクセスした時と同じで、そのデータは公開されていなかった。
「じゃあ、この調査に関わった人物は……」
　アンジェラは宇宙ステーションを調査した二名の調査員を調べてみる。だが、その情報はブロックされており、閲覧を拒否された。

「ブロック？　なぜ？」
　過去、ディーヴァ情報部がディーヴァ外で活動した記録を調べ、目を通していく。どの記録も調査員の名を明らかにしている。
「やっぱり。この宇宙ステーションを調査した人物だけが閲覧できないようになっている」
　アンジェラは情報部に直接問い合わせてみることにした。情報部の窓口へアクセスすると、すぐにオペレーターのホログラム映像がディスプレイ上に出現する。
『こちらディーヴァ情報部です。ご用向きはなんでしょうか？』
「私は中央保安局のシステム保安要員、アンジェラ・バルザック四等官よ。先日、情報部が宇宙ステーションを調査した時に持ち帰ったデータを閲覧させてほしいんだけど」
「承知致しました。少々お待ちください」
　しばし、ディスプレイ上のオペレーターが消え、数分ほどして再び現れる。
『たいへん申し訳ございませんが、そのデータの一般公開は、行っておりません』
「私は保安局エージェントよ。ワーム事件の捜査に必要な情報なのよ」
『当データは最重要機密扱いされており、何人にも公開されておりません』
「最重要機密？　それじゃあ、そのデータを回収した二人の調査員の名を教えて」
『そちらもお教えすることができなくなっております』
「どうして？」
　アンジェラはオペレーターのホログラムへ詰め寄った。
『私も分かりかねますが、おそらく機密を知っている調査員を第三者に調べられることを防ぐためかと思われます。申し訳ありませんが、これで通信を終了させていただきます』
　その言葉を最後にディスプレイ上のオペレーターは消えてしまっ

た。
　アンジェラは腕を組んで考え込む。悪マ性ルソウフエトアに関わるデータを機密にしている情報部。つまり、情報部の上部にはトイフェルの息のかかった人物がいるということ。
「どうしよう……」
　これ以上、独自で調査し続けていいものだろうか。メットはトイフェルに深く関わるなと言っていた。下手に深入りすればアンジェラの身に危険が及ぶことになるかもしれない。ここで捜査を打ち切り、残る一体の疑似知性体──ゴギャンを捜すことに専念すべきなのだろうか。
　よく考えてみればイヴァンに罪がかかろうがアンジェラにとってはどうでもいいことである。
　疑似知性体を殲せん滅めつすれば自然、今回の事件は終了するだろう。
　アンジェラは、ウィンドウを消し、ベッドにごろんと横になった。（イヴァンが犯人……もうそれでいいじゃない。無理してまでイヴァンを助けてあたしに何の得があるっていうの。むしろ危険なだけ。危険を冒おかしてまで、助けても得のない他人を助ける？　それこそ疑似知性体たちのプログラム──愛じゃない）
　そこで、ふと頭に浮かんだのは、メットの顔と大きな胸だった。（メットは危険を冒しながらも、何度も自分を助けてくれた。メットは地上人。私たちディーヴァ市民の失った愛をもっているのかしら）
　愛ということについて考えると、メットのことを思い出す。いわゆる男女間の恋愛感情とは全く異なった、「親愛」という意味においてだ。はじめ、いけ好かなく、何から何まで癪しやくに障さわったメットに対し、今、アンジェラは強い親愛の念を抱いている。
　この親愛の感情と、疑似知性体のもつ愛アルゴリズムとは同じものなのだろうか？
　考えてもよく分からなかった。それほどまでに、愛とは馴な染じみの薄いものだったのである。

―愛。

愛は無敵。疑似知性体はそう言っていた。

愛をもっているメットは密林マップでのダークとの戦いの時に奇跡を起こした。愛とは、そんな奇跡を起こしえるものなのだろうか。

（なら疑似知性体は、このディーヴァに勝ってしまうかもしれない）

笑止な妄想だと思ったが止まらなかった。

（愛は不滅。愛は無敵。愛を倒すことなんて不可能……）

がばっ、とアンジェラは跳び起きる。

それは不安のさせた行為だった。このままじっとしていれば、疑似知性体の愛にディーヴァは滅ぼされてしまうのではないか。そんなことを思ったのだ。

再びウィンドウを呼び出す。

「こうなったらやるしかないわね」

決心したように言うと、アンジェラは情報部のデータベースに再アクセスする。

現れた画面に掌てのひらをぺたりとつけた。その手が画面の中に沈んでいく。アンジェラは回線チヤネルを通り、自分自身のパーソナルデータを直接、情報部のサーバに送り込もうと考えたのだ。アンジェラの身体からだがやがて完全に画面内に没する。

アンジェラは長く続くトンネルのような回線チヤネル内を情報部に向けて、全速力で駆け抜けた。

やがて情報部のサーバへと到着する。幾つかの分岐を進み、データベースへと侵入した。

データベース内に夥おびただしく浮遊する無数の書物形のアイコンは、閲覧可能な情報群である。アンジェラはそれらを無視し、目的のものを探す。

目当ては宇宙ステーションから持ち帰られたデータ―機密情報の保存されている記憶領域。

それはすぐに見つかった。無数の書物形アイコンの一番奥にずどんと鎮座する、巨大で重々しい金庫扉のオブジェクト。

近づこうとするとシールドのようにウィンドウが出現して、行く手を塞ふさいだ。

ウィンドウには赤い警告文字で『このデータは一般公開されておりません』と表示されている。記憶装置を守るセキュリティだろう。

「やっぱりこれは無理そうね」

無理に押し入ろうとすれば、警報が鳴ってしまうだろう。情報部の機密情報を守る強固なセキュリティを解除するハッキング能力などアンジェラにはない。

「でも、あっちなら……」

金庫形の記憶領域に背を向け、無数の書物形アイコンの中から次の目的のものを探す。

「あったわ」

それは、ディーヴァ外ミッションの調査員の記録だった。解析施設のベッドの上でアンジェラが閲覧していたものと同じである。

アイコンをタッチし、ウィンドウに変え、ファイルの一覧の中から宇宙ステーションを調査した人物の記録を選択した。例のごとく閲覧はブロックされてしまう。

「でも、これなら、あたしでも……」

アンジェラは自分の周りにいくつかのウィンドウを呼び出す。暗号解読ソフト。セキュリティホール発見ソフト。などなどのセキュリティを破るためのソフトウェアであった。

アンジェラは、調査員の記録に施ほどこされたセキュリティを解除しようとしていたのである。

「不正アクセスのクラッキング行為……。あーあ。これがばれたらえらいことだわ」

それだけぼやくとアンジェラは表情を引き締まらせた。

セキュリティに向き合い、手持ちのソフトウェアを使用し、解除する様々な手段を試みる。簡単なブロック解除法はシステム保安要員になるにあたり学習ソフトによって学んでいた。機密情報に施ほどこされた強固なセキュリティならばともかく、一般のディーヴァ市民には

解除できないセキュリティでもアンジェラには解除できる自信があった。
　だが、一つ間違えば警報が鳴り、アンジェラのクラッキング行為は露見するだろう。爆弾を解体するのにも似た精密で慎重な作業なのである。
　そうして、セキュリティを解除することができたのは三十分ほどが経過した頃であった。
「やった」
　アンジェラはすぐさま解除したデータを閲覧する。
　ウィンドウとなって表示されたそのデータを目にした時、アンジェラは一瞬言葉を失った。
　しばし唇を戦慄わななかせ、一言ようやく絞しぼり出す。
「嘘うそ……」

　その日、ディーヴァを襲おそった災さい厄やくは、なんの前触れもなく起こった。
　四人のディーヴァ市民が、プライベートマップで休暇を過ごしていた時である。そのマップは、山中のペンションのようなバーチャル空間であり、そこで過ごす四人は座ざ椅い子すに腰掛け、読書したり、トランプ遊びで互いの演算能力を競ったりしながら、贅沢な時間を楽しんでいた。
　そんな時、四人のうち一人が唐突に妙な声をあげはじめたのである。
「あべぱっ！」
　他の三人は驚いて奇声をあげた男へと視線を集める。
「あべっ！　あべべべべべべべっ！　あべぶっ！　あべべべべべべべべっ」
　男の身体からだがひきつけを起こしたようにぶるぶると震ふるえはじめた。
「なっ？　どうしたんだ？」

　慌てる三人の目の前で男の身体の震えはどんどん加速されていき、ついには超振動によって肉体がぶれて見えはじめるほどとなる。そして三人は見た。振動する男の口中より次々と半透明の小さな女性が放出され、虚こ空くうへと消えていくのを。
「パケットを送信している……？」
　一人が指摘したように、男の口より出てくる女性の形をしたものは、微小なパケットデータだった。それが止とどまることなく生み出され、いずこかへ送信され続けているのである。
「ど、どうする？　保安局に連絡するか？」
「い、今流行はやりの感染プログラムかも……」
　そう言った男が「あべば！」と異様な声を発する。なんとその男の体もまた先の男同様、振動を開始しはじめたではないか。そして例のごとく口の中から半透明の女性が……！
「ひぃい！　なんだよぁ！　何が起こったんだよお！」
　残された二人の男は抱き合い、泣き喚わめくことしかできなかった。

　そのようなことが、ディーヴァ各地で同時多発的に発生していた。
　公共マップで、プライベートスペースで、工業エリアで、ありとあらゆる場所で市民が唐突に奇声を発し、振動しながら半透明の女性の形をしたパケットを口から放出し、送信しはじめる。
　エリアとエリアを繋つなぐ回線チヤネル内には、大量の女性パケットが魚群のごとく群れ進み、他のデータ通信を妨げるほどに溢あふれかえる。
　なんとも異様な光景であった。トンネルのような暗い回線中を埋め尽くす全く同じ女性の顔、顔、顔、顔！　その顔があどけなく、美しく、そして微ほほ笑えんでいることが、なおいっそう妖よう異い。
　我われ々われはその女性を知っている。やや茶色味がかった黒髪。日焼けした小麦色の肌。纏まとった薄青い花柄のシティパレオ。疑似知性体の愛し、創造しようとしている女性テウラに外ほかならない。

テウラパケットたちは皆、ある一点を目指して進行していた。
それは中央保安局。そのメインフレームである。
メインフレーム内に囀さえずるような女性の音声データが一斉に響き渡っていた。
『そろそろお茶にしましょう。アールグレイでいい？』
『わあ。綺き麗れいな夕日。ねえ。みんな見て見て』
『いつかみんなで私の故郷に来てちょうだいね』
『ノア・ノア！』
さながら何千何万羽という野鳥が一斉に鳴きだしたような喧やかましさ。
そして、次々と表示されていくテキストデータ。空間を埋め尽くすような文字列。
『今日は地球の両親へと手紙を送った。地球に帰るまで、あと、まる二年はある。ここの暮らしも楽しいけどタヒチの海が恋しくなってきた』
『ダークとシャルルが言い争っていた。本当に二人とも大人になってほしい』
『火星でのコロニー建築は上う手まくいってないよう。もしかして一年以内に計画が中止になるかもしれない。そうしたら、もっと早く地球に帰れるかな』
次にスナップ写真のように無数のテウラの画像、映像が出現した。画像は壁のようになって空間を覆おおい尽くし、映像は無限にリピートされて画像の書き割りの前を動き続ける。
それらの全てがテウラパケットに添付されていたデータであった。
その一つ一つは小さく無害なデータに過ぎない。だが膨大なパケット送信によるアクセス数はメインフレームの通信容量をオーバーしていた。中央保安局のメインフレームを介する保安局エージェントの通信網が容量オーバーにより、完全に停止してしまったのである。
パケット送信者のアクセスを遮断しようにも、これだけ広範囲となると困難であり、エージェントたちのアクセスまでも同時に遮断して

しまうことになるのだ。
「悪マ性ルソウフエトアの攻撃を受けている……」
　偶然中央保安局のメインフレームの近くにおり、事態の収拾にあたることになったエージェントが、この有りうべからざる光景を前にして、放心したように呟つぶやいた。
　おそらく、どこかに潜ひそむ最後の疑似知性体、ゴギャンが感染プログラムを潜伏させていた市民を遠隔操作し、一斉にパケット送信を開始したのだと推測された。
　疑似知性体がメモリを奪うのではなく、中央保安局を敵とみなし攻撃を仕掛けてくる。全くもって想定外の事態であった。
　事態を改善するには、ゴギャンを処理するか、パケット送信を行っている感染者を駆除するしかない。だが、システム保安要員の通信網が機能していない今、それを伝え、組織的にエージェントたちを動かすことができないのである。事態に気がついたエージェントたちが個々人の判断で行動してくれることに期待するより外ほかなかったのであった。

　中央保安局が手を拱こまぬいている隙すきに事態はさらに悪化していた。
　ディーヴァの各エリア内をワームが襲撃しはじめたのである。中央保安局にパケット送信攻撃を仕掛ける感染者とは別に、市民を襲おそいメモリを食らうワームたちが出現したのだ。それは、疑似知性体たちが密かにばらまき、市民の内に潜伏させていたものたちである。
　あるマップではフナムシ状のワームがわさわさと押し寄せ、悍おぞましい顎がつ脚きやくで市民を貪むさぼり食らいだしていた。ある中継地点ではウミユリ状のワームが待ち構え、市民を捕食していた。ある回線内ではクラゲ状のワームが群れ漂い、通りかかる市民を凶悪な触手で絡め捕っていた。
　そうして市民を食らいながらワームたちは、その場に仮想の楽園を作成しはじめる。

タヒチの真っ青な海。真っ赤な太陽。真緑の密林。真っ白い砂浜。
歪ゆがんだ原色の楽園風景はディーヴァ各地を瞬またたく間に侵食していった。
今、ディーヴァ全域は恐怖と混乱の坩る堝つぼと化していたのである。
ディーヴァは悪マ性ルソウフエトアの愛によって今まさに埋め尽くされようとしていたのであった。

アンジェラは今まで解析施設内で自身の考えをまとめ、検証する作業に没頭していた。
彼女の思いついた疑似知性体の愛を倒す方法。それが本当に有効なのかどうか。そのために必要なソフトウェアのプログラミング。幸い、解析施設には、その作業に必要なデータやソフトが十分にそろっていた。また、アンジェラが情報部のデータベースで知った真実。そこから導き出された推理を裏付けるための情報収集をも平行して行っていた。
彼女がおおよその仕事を終えた頃、自分の推理が間違っていないことをほぼ確信していた。
「……やっぱり、そうだ。もう間違いない……。だけど……」
アンジェラの顔はなぜか暗く沈んでいた。アンジェラはまだ自分の推理を信じきることができず、事実を改めて確認しようと通信を開始する。
「あれ……？」
なぜか通信ができなくなっていた。再度試みるが、やはり不可能だった。
状況を確かめるため、アンジェラがウィンドウを呼び出した時、部屋の戸が開いた。
「たいへんだ。アンジェラ君」
入ってきたのはメットだった。声は冷静であったが、顔には微かすかな焦あせりが浮いていた。

「……何かあったんですか？」
「中央保安局が疑似知性体による攻撃を受けている」
「攻撃？」
「ああ。ディーヴァ各地に潜伏させていた感染プログラムから、保安局のメインフレームに一斉にパケットが送信され、アクセス障害を起こしている」
　アンジェラは通信ができなかった理由を理解した。
「あまり悠長にはしていられない。保安局エージェントの情報網は、現在、全く機能していない。この隙すきをついてディーヴァの全エリアでワームどもが暴れだしている」
「全エリア!?」
「今までで最も大きな被害が出ているはずだ。すぐに敵を捜し出し倒さねばならない。行くぞ」
　そう言うとメットは部屋を出ていこうとする。だが、アンジェラは立ち止まったままメットに従おうとしなかった。メットが苛いら立だったようにアンジェラを急せかす。
「どうした。行くぞ。時は一刻を争うんだ」
「……どうやってゴギャンを倒すんですか？」
「知るものか。捜し出してから考えるさ」
　アンジェラは俯うつむく。
「また無茶をするんですね……」
　ぽつりと言った。
「メット。あなたはいつも無茶ばかり。どうしてそんな無茶ばかりするんですか。最初のシャルルとの戦いの時も、密林マップでの時も、私が圧縮された時も無茶をして助けてくれました」
　メットは怪け訝げんそうな顔をした。なぜ今そんな話をしはじめるのか解せないといった様子。
「どれも一歩間違えば、命を落としかねない無茶ばかり。普通ならそんなことできるわけない。できるわけない無茶をいつもやって、道を切り開いてきた」

　メットは、やれやれといったふうに首を振り、優しく言う。
「アンジェラ君。その話はまた後だ。今はゴギャンを見つけることが先決だ」
　だが、アンジェラは言葉を続ける。
「あなたはすごい。とても人にはできない無茶を通してきた。私にはできない。誰にだってできない。あなたはすごい人」
　そこでアンジェラの目が鋭く変わった。
「本当にあなたが無茶をしていたならね」
　メットはきょとんとした。
「何を言っている？」
「あなたにとって今までやってきた無茶は無茶なんかじゃなかった。疑似知性体の攻撃は決してあなたには効かない。そういうふうにプログラムされていた。そうじゃありませんか？」
　アンジェラの言葉が徐々にメットを問い詰めるような色を帯びてくる。
「言っている意味が分からないぞ」
「最初のシャルルとの戦いの時、あなたは高速で動くシャルルとの戦いをマップがデリートされるギリギリまで続けた。だけどシャルルの攻撃は一度もあなたに当たることはなかった。あそこまで躱かわし続けることができるものかしら？」
　メットは黙ってアンジェラを睨にらみ返していた。
「ストリックランドに私が圧縮された時、あなたは防御プログラムを纏まとって自らストリックランドの圧縮空間に入り込み、私を助けてくれた。でも、あの空間に働いていた分解・圧縮の力は防御プログラムで防げる種類のものじゃなかった。そして密林マップでのダークとの戦い。あれが一番おかしい」
「君は私がダークのプロテクトを解除したことを言っているのか？」
　アンジェラは頷うなずいた。
「複雑な防御プログラムの解除コードを総当たりブルートフオース攻撃アタツクなんて単純なやり方で割り出せるはずがない。あなたは最

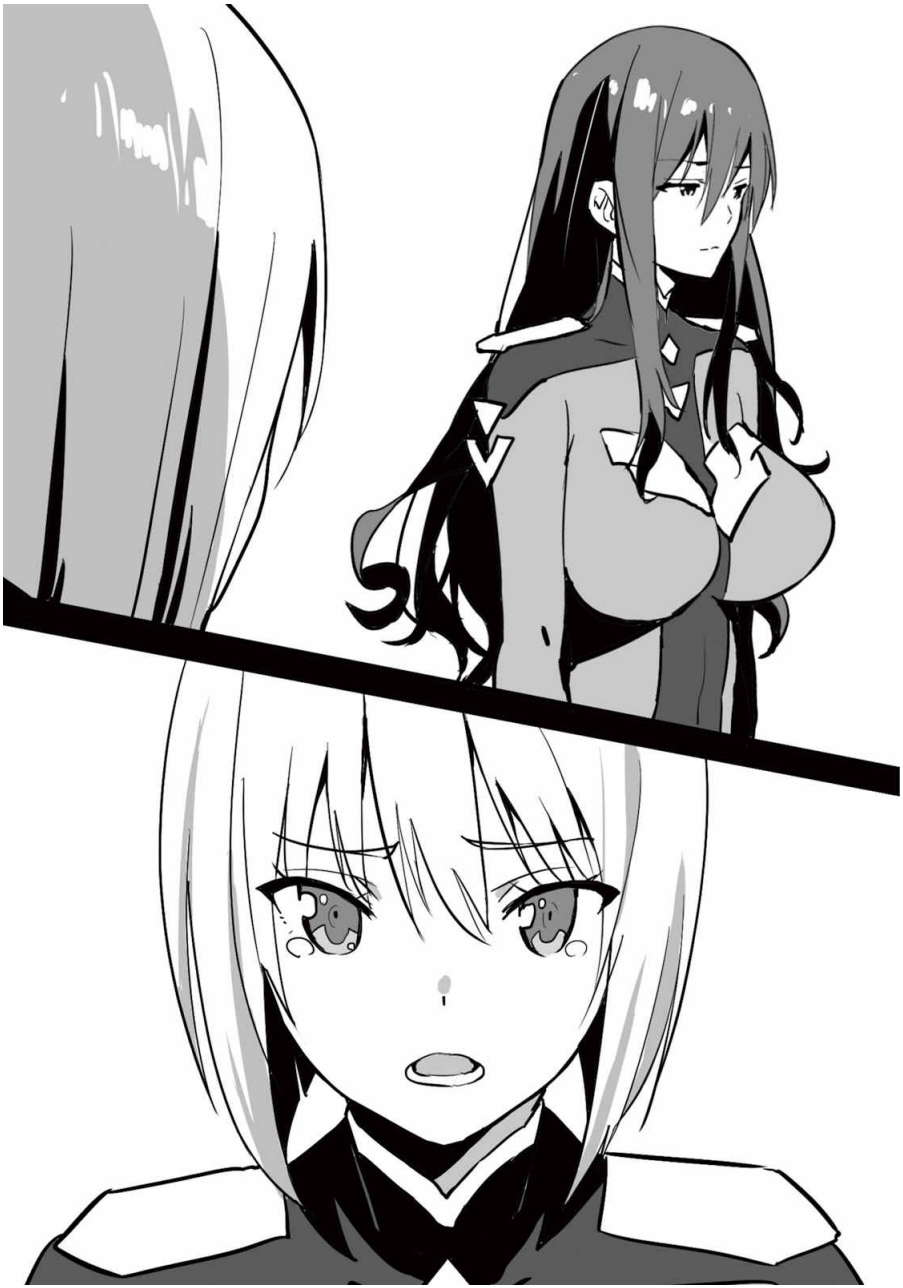
初から解除コードを知っていたんじゃないの？」
　メットは溜め息いきを吐ついた。
「どうして私があらかじめ解除コードを知っているんだい。あの時、言っただろう。人の一念は奇跡を起こしうる、と」
「奇跡？　あなたのその言葉にどれだけ私が心動かされたか分かっている？　私は奇跡を起こしうる人の一念に感動したわ。でも、今となってはもうそんな奇跡信じることができない……」
　アンジェラの顔は寂しげだった。自分の信じて疑わなかったもの。それが、徐々に空虚なものに変わっていくことへの寂しさ。悲しさが湧わいてくる。
「奇跡じゃない。全て演出。困難な状況を危機一髪で解決する優秀な保安局エージェントをあなたは演出していただけ。だけど実情は違う。あなたは初めから疑似知性体の攻撃を受けないようになっていた。そして疑似知性体を倒しうる方法もすでに知っていた。なぜならば」
　アンジェラは次の言葉を言うのを一瞬躊躇ためらう。だが、意を決して言った。
「あなたが疑似知性体のプログラムをそう書き換えたから」
　投げかけられた言葉にメットは困ったような顔をした。
「何を勘違いしているのか知らないが。アンジェラ君。君は、つまりこう言いたいのかい？　私が悪マ性ルソウフエトアの作成者だと」
「違う。悪マ性ルソウフエトアを作成したのは、ナノハザード以前に行われていた宇宙開発計画に関わっていた四人のプログラマー。本来無害だったプログラムをあなたは悪マ性ルソウフエトアに変え、イヴァン・アダモフを踏み台にして、ディーヴァへと発信したのよ」
　ふっ、とメットは鼻で笑った。
「宇宙開発計画？　唐突だな。どこからそんな話が出てきた」
「ストリックランドと接触した時に知ったことよ」
「疑似知性体に？　それでわかった。君は疑似知性体によってあらぬ記憶を植えつけられたんだ。騙だまされちゃ駄目だ。我われ々われを

混乱させ、仲なか違たがいをさせる。それが敵の目的だ」
「いつまで、しらばっくれるの！」
　アンジェラはあくまでも自分と向き合ってくれないメットの態度に強い怒りを爆発させた。
「情報部のスペースデブリ群の調査。その時、ミッションに当たった調査員の名を調べたわ！」
　アンジェラは空中にウィンドウを呼び出した。それは、情報部をハッキングして得た記録のコピーである。そこには二つの名がのっていた。
　一つは、『ルイス・アンダーソン』そしてもうひとつは、
　―『メット・マルティネス』
　メットの切れ長の瞳が見開かれた。
「あなたは、もともと地上では情報部のオブザーバーをしていた。だから未だに情報部のミッションを任されることがあったのね。でも、そこは問題じゃない。このもう一人の調査員、ルイス・アンダーソンは行方不明になっている。おそらく口封じに消された。宇宙ステーションから持ち帰った船内記録には、四人のプログラマーの情報が残っていたはず。それをあなたは見たはずよ。本来なら今までの疑似知性体との遭遇の時にその識別名とプログラマーの名の一致に気がつかないはずがないわ。それなのに、あなたはそれを今まで一言も言わなかった。理由は一つ。あなたが悪マ性ルソウフエトアの発信者だから！」
「君は情報部をハッキングしたのか？」
　メットの声に怖いものが含まれた。だが、アンジェラは怯ひるまない。はっきりとした答えが欲しい。ただ、その思いがアンジェラを揺るぎなくさせていた。
「今はそんなことどうでもいいわ！　説明しなさいメット。これはどういうこと！」
　メットの表情に膨ふくれ上がるような激情が一瞬浮き上がる。だが、それを無理やり呑のみ込むようにメットは自身の顔を冷静なもの

に抑しとどめた。
「黙っていてすまなかった。確かに私は悪マ性ルソウフエトアが宇宙ステーションから持ち込まれたということを知っていた。だが、その情報は上からの圧力により、一切、外に出すことを禁止されていたんだ。君にだけは話しておくべきだった。そうすればこんな誤解は生まれなかったのに」
「嘘うそ。言っていることが苦しすぎるわよ。上からの圧力？　その上って何？」
　メットは押し黙る。
「言えないなら言ってあげるわ。トイフェルね。あなたはトイフェルの構成員よ！」
　メットの顔が、かっ、と朱に染まった。
「冗談でもそんなことを言ってはならない！」
　ついに叫び声をあげたメット。普段のメットには見られない取り乱したような声となっている。それによりアンジェラはかえって冷静さを取り戻すことができた。
「あなたが、宇宙ステーションから持ち帰ったプログラムを書き換えたのは、トイフェルからの命令。ナノハザード以前に作成された高度なプログラムを悪マ性ルソウフエトア化させ、ディーヴァに流し、人口統制を図る。だけどトイフェルの構成員が犠牲になることもあるかもしれない。それを防ぐため、疑似知性体にはトイフェルの構成員にだけは攻撃できないようなプログラムを書き込んでいた。おそらく疑似知性体たちも気づかないうちに、ぎりぎりであなたに攻撃が当たらないようにしておいた。そして、ある程度悪マ性ルソウフエトアがディーヴァの人口を減らしたら、疑似知性体たちを片付けなければならない。あなたは、その役目も同時に受け持っていた。ダークのプロテクトの解除コードもすでに知っていたのよ」
　どうかしら──というようにアンジェラはメットへと答えを促うながすように沈黙を作る。
「君が言っていることは皆推論だ。だいたい私がそんなことをしてな

んの得がある」
「トイフェルからの命令はきっと絶対なんでしょうね。得があろうがなかろうが、あなたは従わなければならない。違うかしら？　でも得というのなら、あなたは十分な得をしている。絶体絶命の危機を乗りきって疑似知性体を倒した優秀なエージェントを演じることによって中央保安局の覚えをよくし、昇級へとつなげることができるものね」
　そこでアンジェラは、悲しげに首を振った。
「そのくらいで満足していればよかったのに、あなたは欲を出したわね」
　アンジェラは目の前の中空をタッチし、一つのディスプレイを呼び出す。
　そこに表示されたものを目にした時、メットの顔が、さあっ、と青ざめた。
「な、なぜそれを……」
「少々不正な手段を使って手に入れたのよ」
　それはメットの所有するメモリ容量を表した棒グラフだった。棒グラフが僅わずかながら伸びてきている。メットのメモリが少しずつ増え続けていることを表していた。
「このメモリ量。通常のシステム保安要員に与えられる量の優に四倍はある。しかも未だに増え続けているわね。これが何を意味しているのか。メット。わかるわね？」
　メットは答えない。青くなった顔をさらに土気色に変え、口をわなわなと震ふるわせていた。
「最初の都市マップの強制削除デリート。アーハン製造工場のバッファ内で生じたマップの強制削除デリート。そして解析施設内でのストリックランドの駆除。それによって回収されるはずのメモリ量が半分以上足りてない。はじめ、それは未だ行方を晦くらましている最後の疑似知性体が全て所有しているものだと思っていた。だけど違った。あなたは疑似知性体のプログラムを書き換える際にトイフェルから命令されていないプログラミングをした。それは、横流し」

メットの肩がびくりと震ふるえた。
「悪マ性ルソウフエトアがディーヴァから奪い、彼らが楽園と称する仮想空間を作成しようとする際、その一つ一つのオブジェクトを作り出す時にメモリの端数が生じる。あなたは、その僅わずかな端数を自分のメモリバンクに送られるようにプログラミングしていた。この異常なメモリ量はそうやって貯め込んだもの。今も増え続けているのは、ディーヴァ各地でワームが市民を襲おそい、そのメモリを使ってオブジェクトを作成している真っ最中だから。あなたの三等官とは思えない戦力は、この膨大なメモリを使って作られたものだった。これはどう言い逃のがれるつもり？」
アンジェラは、表示された動かぬ証拠を叩たたきつけるようにして言葉を発した。
メットは何か二、三言おうとしたが、ぱくぱくと鯉こいのように開閉する口からは、一言の弁解も発することができない。やがて、メットは肩を落とし、俯うつむいた。
そのメットの態度をもってしてアンジェラは、確信する。自分の推理は間違っていなかった。でもそれは、ひどく悲しい答えである。外れていてほしかった答えであった。
「残念だわメット。私はあなたを尊敬し、親愛の念すら抱いていたのよ。本当は最後まで信じたかった。何かの間違いだと思いたかった、でも、どうやら間違いないみたいね……」



そう語るアンジェラの目が微かすかに潤うるんでいた。
俯うつむいていたメットは、しばらく何も言わなかった。
見れば、その体が微かに震ふるえている。はじめ、アンジェラはメットが恐怖か悔恨か、あるいは嘆きのために震えているのだと思った。だが、違う。
「くっくっくっ……くくくっ……」
陰に籠こもった笑いが聞こえてきた。メットは笑っていたのである。
「まさか……。いや、まさかアンジェラ君。ここにきて君に裏切られることになるとはね……」
自じ嘲ちようともなんともとれぬ低い声だった。
「裏切ったのは、あなたよ。あなたがトイフェルの構成員だなんて信じたくなかったわ」
「トイフェルの構成員？　はっ！」
メットが、けたたましく笑い声を発した。
「何がおかしいの！」
乱心したのかと思った。だが、アンジェラの方を向いたメットの目はぎらりと妖あやしい光を放ってはいたものの、正気の人間のそれである。
「君の推理にいくつか間違いがある。ひとつ、トイフェルなどという組織は存在しない」
「え？」
一瞬、困惑したものの、アンジェラはすぐに毅き然ぜんとして言い返す。
「この期ごに及んで嘘うそはやめてちょうだい。隠したって無駄よ」
「嘘など吐ついていない。トイフェルとは、組織ではない。ディーヴァの一システムだ」
「え？」
意味が分からなかった。メットは、戸惑うアンジェラを嘲あざ笑わらうように見返すと、薄ら笑いを浮かべながら語りだした。

「ディーヴァ市民。そしてそのそれぞれに割り振られるメモリを管理するシステム──人工知能が存在する。それは、知っているだろう？」
　そんなことは知っていた。ディーヴァの人口。移民の数。新たな市民の誕生。それらは、人工知能によってデータベースに登録され、どれだけのメモリを与えられているか、現在、人口が何人いるのかを常に管理されている。
「トイフェルとは、その人工知能のことだ」
　アンジェラは、目を丸くした。
「ディーヴァ建造当時に作成され、百年以上、ディーヴァの人口とメモリ量を管理し続けている人工知能。日々、増え続ける人口とメモリの分配とを記録し、整理しているうちに、いつしか人工知能は、一つの問題点を導き出した。いつか私が言ったのを覚えているね」
「人口増加に伴うメモリの枯こ渇かつ……」
　メットが頷うなずいた。
「そうだ。人工知能はそのプログラム上、増え続ける人口と枯こ渇かつするメモリとを整理しようとしはじめた。すなわち、人口統制だ」
「ディーヴァ内の人工知能が人口統制を……!?　それはつまり、人工知能に深刻なバグが生じてるってことじゃない！　そんなバグが気づかれないまま放置されてるの!?」
　アンジェラは口を戦慄わななかせた。メットが淡々と説明を続ける。
「人口が増加傾向にある時、人工知能は自動的にディーヴァ中の情報を掻かき集め、市民の数を減らすための戦略をシミュレートするようになった。だが人工知能の持つ能力は、メモリと人口の管理だけ。戦略を練っても実行に移すことができない。ゆえに人工知能は、自らの計画を実行に移せる能力、地位を持った人材に通信を送り、コンタクトを取りはじめたのだ」
　そこでメットは、冷たい笑みを浮かべる。
「『人口統制計画への協力を要請する。露見することなく確実に成功する戦略を用意済み。報酬として抹消した市民メモリの一部を分配す

る』とね」
「なっ!?」
「そうやって、そのつど人材が集められ、人口統制計画が密かに実行されてきた。それがトイフェルだ。計画終了後、トイフェルは解散し、加担した者は、普段の日常へと戻っていく。そんなことが、もう何度となく続いてきた」
　トイフェルなどという組織は存在しない、という意味がようやく理解できた。トイフェルとは、人口が増加した時、一時的に集められ、現れては消える──そういう存在だったのだ。
「嘘うそよ。人工知能の誘いを断り、報告する人が今まで誰もいなかったなんておかしいわ！」
　疑念を訴えたアンジェラに、メットはさらりとした口調で答える。
「何もおかしくはない。人工知能は、ディーヴァ全市民を常に管理しているんだ。年齢、性別、職業、そしてその性格傾向までね。人工知能は、間違いなく計画に加担し、他に漏もらさない人物だけを選抜している。他の市民を犠牲にしてもメモリが欲しい、そんな人間だけをね」
　アンジェラは、恐ろしいものを見るような視線をメットに送った。
「つまりメット──あなたがそうなのね」
「ご名答」
　メットが、どこかおどけたような仕草で答えた。
「私に人工知能より通信が来たのは、宇宙ステーションの調査から帰った直後だった。その時、私は初めてトイフェルの正体が人工知能だということを知った。私は、二つ返事で了承し、人工知能に指示されるまま、宇宙ステーションから持ち帰ったプログラムを書き換え、イヴァンを踏み台にしてディーヴァ内に発信した。情報部の上官の中にも人工知能の指示を受けていた者がおり、私とともに宇宙ステーションの調査をしたルイス・アンダーソンを抹殺し、情報を隠いん蔽ぺいしてくれた」
　そこでメットは含み笑いをする。

「君は、私がメモリを自分に横流しするように疑似知性体を書き換えたといったが、それは違う。ここまで聞けばわかったと思うが、人工知能が私や、今回の件に関わった者に、市民の抹殺とともに報酬として与えてくれているんだ」

　アンジェラの体に震ふるえが生じてきた。恐れではない。怒りからだ。

「あなたは、人工知能の……悪魔の誘惑に負けてしまったのね！　どうしてなの!?　地上からスカウトされ、三等エージェントにまでなったあなたがどうして!?」

「地上だと！　三等エージェントだと！」

　アンジェラの叫びを受け、メットが唐突に声を荒げた。

「君に私の地上での暮らしが想像できるか！　貧困、餓うえ、病、盗み、殺人！　地べたを這はうように生きていた私の暮らしが！　ようやくディーヴァに来ても地上出身者としての偏見と蔑べつ視しからは逃のがれられん！　私はメモリが、力が欲しいのだ！　もっと上へ、上へ行くための力！　永遠に続く上昇！　私の楽園を手にするための力が！」

　メットから迸ほとばしる恐ろしいまでの情念に、アンジェラは、口ごもる。

　一気に思いのたけを喚わめき散らしたメットは、そこで冷静さを取り戻そうとするように深呼吸した。だが、その双そう眸ぼうは血走ったままである。

「アンジェラ君。私は君を買っている。君に全てを打ち明けたのは、君に私の協力者となってほしいからだ。もうすぐ、この事件は収束する。最後の疑似知性体は倒され、犯人はイヴァンという形に収まる。私は全ての疑似知性体を退治した功を評価され、昇格するだろう。だが、まだ終わらない。今回得たメモリを使い、もっと私は上に行く。私についてこい。君を君のまま楽園に連れていってやろう」

　メットは、アンジェラを己おのれが胸に招き入れるかのように両腕を広げた。

　アンジェラは、俯うつむく。
「私は、あなたをとても強い人だと思っていた」
　ぽつりと言う。
「出世やメモリに対する執念。上昇しようとする信念。なんの目的も信念ももたない私には、それが、すごく眩まぶしく見えた。それに縋すがろうと思った。だけど、今あなたを見て、こう思ったわ」
　アンジェラは、ぐんっ、と顔を上げた。
「あなたは弱い。市民を犠牲にしてメモリを得ようとするあなたは汚い。その汚いものに縋ろうとしていた私は間違っていた。あなたは、初めて会った時、私にこう尋ねましたね。システム保安要員の仕事とはなんのために行うものかと。その時、私は答えをもっていなかった。でも、今は、真実こう答えられる」
　そう言ったアンジェラの眼まな差ざしには、迷いない光が宿っていた。
「私は、保安局エージェントとして、あなたのような汚い人間を絶対に許さない。それを私の信念とする。私は私の信念で上昇し、メモリを得る。汚い人間の力なんて絶対に借りない！」
　そして事務的な口調でこう続けた。
「ここでした会話は全部記録している。これを中央保安局に提出するわ。あなたは終わりよ」
　メットは、わなわなと口こう辺へんを震ふるわせる。首を振り、広げた両腕を落とした。
「……そうか」
　ぞっとするような怒りと憎悪がメットの顔を凄せい艶えんに塗り替えていく。
「ああ、そうかい。じゃあ、しかたないな！」
　ふっ、とメットの姿が掻かき消えた。
「はっ!?」
　と、アンジェラが声を発する間もなくメットの姿がアンジェラの鼻先に出現した。

咄とつ嗟さに身を退ひこうとしたアンジェラだったが、遅い。
メットは軽く跳んで体たいを捻ひねり、凶暴な裏拳を遠心力にまかせ、アンジェラの横っ面に叩たたきつける。その勢いは鉄球のごとき硬度でもってアンジェラを弾き飛ばした。
転倒したアンジェラは受け身を取り、すぐに立ち上がろうとするが、メットの身体からだが、すかさずアンジェラの上へと馬乗りになる。
「君を買っていたと言ったのは決して嘘うそではないぞ」
そう言ったメットの顔は、冷酷なまでに無表情であった。
「だが、私はもう後には退ひけん。地上での泥を嘗なめるような暮らし。地上出身であるというだけで受けて来た屈辱。それらを晴らし、もっと高い場所へと上り詰める。そう私は決めたのだ。そのためならば、誰であろうと──君であろうと倒して進む。こんなところでつまづくわけにはいかんのだ！　悪いが消えてもらうぞ！」
メットの指先に光球が灯ともる。アンジェラのパーソナルデータを破壊する撃退プログラム。
──地上。
果てしなく広がる不毛の大地。退廃と混こん沌とんの支配する世界。アンジェラには想像することしかできない、その地獄のごとき土地がメットという一つの人格をこうも悲しく歪ゆがめ、変えてしまったというのか。
鼻先へと突き付けられた撃退プログラムを見つめ、アンジェラは言った。
「駄目。……もう駄目よ。メット」
その声は、冷やかで、どこか哀あわれむようですらあった。
「私が中央保安局より先にあなたに話したのは、あなたを信じたかったから。もし私の考えが間違っていたらあなたの信用を貶おとしめることになる……」
「何を言っている？」
「あなたは、もう助からない。もうあなたは終わっているの」

　アンジェラは、静かに首を振った。
「御ご託たくはいい加減に……」
　そこでメットの言葉が止まった。
「な？」
　頓とん狂きような声を上げるメット。メットの体にざわざわとノイズが生じてくる。
「間に合ったみたいね」
　アンジェラがぽつりと言った。
　メットの体に生じたノイズは、どんどん強くなってきて、全身を覆おおい尽つくすほどになる。
「なっ？　何をした？　何をしたぁ？」
　困惑し、喚わめき散らすメット。きょろきょろと周囲を見渡す。その視線が、はた、と先ほどアンジェラの呼び出したディスプレイウィンドウに止まる。メットのメモリ量を表示した棒グラフ。その棒グラフが見る間に低くなってきているではないか。
「メモリ!?　わっ、私のメモリが減っている!?」
　そう叫ぶ間にもメットを覆うノイズが強くなる。ノイズの下のメットの体が徐々にのっぺりとした画ピク素セルの粗あらいものに変わっていった。安っぽいドットの集合体となっていき、そのドット数すらも減っていく。
「ナッ、ナニィィィィィ！」
　と、恐怖の叫びをあげる音声すらも、ピコピコとした電子音となっていた。
　アンジェラは取り乱すメットを押しのけ、立ち上がる。
「私はあらかじめ自分のコピーを走らせておいたの。一つの命令だけを与え、常に私と交信し続ける小さなコピーよ。そのコピーに与えた命令はこう。もし、私の身に危害が及んだ場合、メットが私に攻撃をした、つまりメットが犯人だったと認めたとみなし、メモリバンク及び他のシステム保安要員へと報告せよ」
「ナ、ナニ……」

　メットの体がどんどん縮小していく。いまやメットは立方体の集まりのような粗雑なパーソナルイメージへと変わっていた。
「つまり、私のコピーは、あなたの悪行をシステム保安要員とメモリバンクへ洗いざらい報告してるってわけ。人工知能よりもメモリバンクの方がメモリ分配の強制力は強いはず。あなたは悪マ性ルソウフエトア発信者として所有するメモリを差し押さえられてしまっているのよ」
「ナンダトッ！」
　哀あわれ。メットの体は、もはやただの掌てのひらサイズの四角形へと変じていた。
「ソ、ソンナ、ソンナ。コンナトコロデ……。ワ、ワタシノ楽園……」
「あなたにできる最後の罪滅ぼしを教えてあげるわ。今、中央保安局に攻撃をしかけている疑似知性体のプロテクトの解除コードを教えなさい」
「ギ……ギジ……。ギジチセイ……ギジチセイタイ……？」
「そうよ。このディーヴァのどこかにいる最後の疑似知性体を倒すのよ」
　メットが押し黙った。
「黙っていても無駄よ。あなたはもう逃げられないわ。あなたの記憶情報を無理やりスキャンすれば、いずれ分かるわ。でも、今は時間がないの。解除コードを教えて」
「……」
「早く教えるのよ！」
　アンジェラは苛いら立だったように言葉を投げる。
「ソウカ……」
　メットがボソリとそれだけ言った。
「何？　よく聞こえないわ。なんて言ったの？」
「ギジチセイタイ……。ソウカ……マダ手ガアッタ……」
「え？」

途端、四角形のメットの体が黒い輝きを放った。眩まばゆい光にアンジェラは咄とつ嗟さに目を背そむける。

燦さん々さんと闇色の光を放つメットの体が徐々に大きくなっていく。

「な、何？」

夥おびただしい光量をアンジェラの視覚ソフトが補正していく。

光の中、メットの四角形の体がぼこぼこと泡立ち膨ふくれていくのが見えた。

「メモリが回復している？」

アンジェラは、メットのメモリ量を示す棒グラフへと目を向ける。

だが、棒グラフは未だ低い数値を示したまま動いていない。

「どうして!?」

メットの肉体がどんどん拡大していく。四角形の側面をぶちやぶって、野太い触腕が生じてきた。一本、二本と生はえ続け、八本となった触腕は狭い部屋をうねりのたくりまわる。

やがて四角形が丸みを帯び、少しずつ人の形へと変形していく。

「ぎ、疑似知性体!?」

アンジェラはついそう叫んでいた。

ぬめり気を帯びた漆しつ黒こくの肉体、背中から生えた長く丸太のごとく太い八本の触腕。それは、かつて一度目撃した残された最後の疑似知性体、識別名ゴギャンであった。だが、顔と胸部分だけが違う。左半面は白仮面のような疑似知性体の顔だが、右半面は、よく見慣れた美しい女性の顔。巨大な胸。メットに違いなかったのである。

「フハ！　フハハハハハハ！」

メットの顔を持つ疑似知性体は哄こう笑しようした。耳を劈つんざくような大音量。

笑いながらもメットの肉体はとどまるところを知らず、膨張を続ける。やがて天井に届いた背丈はそのまま天板をぶちやぶり、背後の壁すらも破壊した。仮想的な室内の壁を粉砕した先には暗黒の空間が広がっている。未だオブジェクトを上書きされていない無の空間であっ

た。
　アンジェラは巨大な疑似知性体に押し潰つぶされることを避け、室外へと飛び出す。部屋の壁が全て粉砕され、廊下と部屋とが繋つながった。廊下は暗闇に浮かぶブリッジのような形となる。
「なんでここに疑似知性体が!?」
　戸惑うアンジェラに、二十メートルを超えはじめたメットがノイズ混じりの歪ゆがんだ声で答える。
「最後の疑似知性体ゴギャンは私ノ内に圧縮シて隠し持っていタのさ。今、私は疑似知性体と統合しタ」
「疑似知性体と統合!?　正気なの!?」
　高度なプログラムと目的を持った疑似知性体と統合などしたら、ただでさえメモリ容量の少ない今のメットは疑似知性体のアルゴリズムに呑のみ込まれ、自我が希薄になる危険性がある。
「ドうせ私ニは、もうディーヴァで生きル道はナい！　なラバ、感染プログラムとなッテこのディーヴァの全テのメモリを食くらい尽くシテやる。ア、ア、ア……すごい。すゴイぞ。ディーヴァ中のワームの食ラったメモリが私へと流れ込んでくる。もっト、モッとメモリを……情報を……。愛ヲ……このディーヴァを愛デ埋め尽くしタイ……！」
　さっそくメットの自我が疑似知性体の愛プログラムの影響を受けおかしなものへと変わってきた。
「アアア！　イイダロウ！　このママ私はコノディーヴァに楽園をツクる。楽園デ私は永遠にテウラ、とトも……トモトモモモモモモモモモモ……！」
　メットと疑似知性体の統合。巨大な蛸たこの怪物の姿をしたそいつは愛の快感に身をよじらせた。
　巨樹の幹のごとく肥体化した触腕が激しい快感に打ち震ふるえ、暴れまわる。
　解析施設の壁面がのたうつ触腕に次々と破壊されていく。
　アンジェラは、くっ、と口中で呻うめき、手元にウィンドウを出現

させた。手早く撃退プログラムを構築し、光球に変えて撃うち放つ。だが、予想通りというべきか、撃退プログラムは、メット疑似知性体へ命中しても何の効果も表わさない。
「やっぱり……プロテクトに守られている。なら……」
　ごくりと唾つばを呑む。疑似知性体を倒し得る方法。それをアンジェラは見つけていた。
「だけど……」
　それはあくまで仮説にすぎない。まだ、なんの実験も行っていない。正直、自分でもとんでもない方法、成功する見込みもかなり薄いと思っている。
「でも、やるしかないでしょ」
　アンジェラは決意すると再びウィンドウを呼び出した。
　一つではない。様々なプログラムを表示したいくつものウィンドウ。それを馴なれない手順でタッチしていく。だが、メット疑似知性体がそれを待ってくれるはずもなかった。
　作業するアンジェラへと巨大な触腕が怒ど濤とうのごとく押し寄せてくる。
　アンジェラは作業を放り出し、転がって触腕を回避した。もはや、壁面を全て失って、虚こ空くうに浮かぶ橋のごとくなった廊下は逃げるスペースが少ない。次々と撃うち込まれてくる触腕の嵐を避けるのに精いっぱい。アンジェラは作業へと戻ることができない。
「くそっ！」
　アンジェラは廊下を駆けた。できるだけ敵から距離をとる。少しでも作業する時間を稼ぐ。
　駆けるアンジェラを蛸たこの怪物がうねくりながら追ってくる。
「逃げたって無駄だァっ！」
　メット疑似知性体の周囲に漆しつ黒こくに輝く無数のウィンドゥが浮かび上がった。
「消え口！」
　叫びとともにウィンドウがことごとく光線となってアンジェラへと

降り注いだ。
　咄とつ嗟さに回避したアンジェラの立っていた場所に光線は直撃し、派手な爆発をおこす。爆炎の去った後、床板を構成するオブジェクトは完全に消滅し、黒い穴をぽっかりとのぞかせていた。
　一発でもこれを食らうことになればアンジェラは一瞬で消し去られてしまうだろう。
　メット疑似知性体は容赦がなかった。アンジェラの駆ける先へ先へと怪光線を立て続けに放っていく。アンジェラは、すんでのところでそれを避け続ける。
　アンジェラの内に焦あせりが生まれて来た。
（できる！　大丈夫！　あたしはできる！　あたしには信念がある！　もう弱くない！）
　ただそう心中で叫びながら怪光線と触腕とを、跳び、転がり、身を縮め、なんとか回避し続けた。その合間合間で自身の周囲についてきて漂い続けるウィンドウをタッチする。
　ひと作業、ひと作業を隙すきを見つけ確実に進めていく。
（もうすぐ……！　もうすぐだ！　もうすぐ！）
　あと少しで作業が完了する。目の前のウィンドウをタッチしようとした時、そこでアンジェラの張りつめていた心に微かすかな安あん堵どが生じてしまった。
　安堵がアンジェラに隙をつくる。それが命取りとなった。
　突然目の前の地面に怪光線が直撃し、大爆発をおこす。爆風に煽あおられ、アンジェラは体のバランスを崩し、転倒した。
「しまった……！」
　と思った時には遅かった。アンジェラの体に強い圧迫感をともなって粘着質のものがまとわりつく。メット疑似知性体の触腕がアンジェラの華きゃ奢しやな体に絡みつき、締め付けていたのだ。
　ふわりとアンジェラの体が浮き上がる。触腕に引き寄せられるまま、アンジェラはメット疑似知性体の巨大な顔の前まで連れて来られた。

ぞっとするような邪悪な笑みを浮かべるメット疑似知性体。口が蛇へびのそれのように、がぱりと大きく開いた。口中には、さながらブラックホールを思わせる大暗黒空間が広がっている。

アンジェラの身が震ふるえた。

自分はこれから、この化ばけ物ものに丸まる呑のみにされ、かつてストリックランドに呑み込まれた時のように分解・圧縮されてしまうのだろう。そして次は決して助けなど来ない。

（もう……おしまいなの）

瞳に涙が滲にじむ。それをしばしメット疑似知性体は臈なぶるように見つめ続ける。

そうして実に無造作にアンジェラを口中へと放り込んだ。

ゴギャンと名付けられたプログラムは歓喜していた。

いや、ゴギャンであったものというべきか。彼は今、メット・マルティネスという自我を持った知性体と統合し、半なかばメットであり半ばゴギャンである存在となっていた。

この歓喜という感情もまた自我を有するメットと統合したことによって生じたものである。本来、彼は感情をもたないただのプログラムなのだから。

もっとも、このメットという自我はゴギャンのプログラムに組み込まれ、すでにだいぶ希薄なものとなってきている。やがて消えてしまうのも時間の問題だ。

不必要に肉体を巨大化させようという意思。アンジェラ・バルザックという個体に対する執着。それらもまたメット・マルティネスが希薄になるにつれ消えていく。

そもそも、今、各地のワームたちから際限なく送られてくるメモリは、そんなことのために消費するものではないのだ。ただ愛の実現のため。愛するテウラと、テウラの愛するタヒチの風景を作りだすためだけに、使用されるべきものなのだ。

そしてワームから送られてきた夥おびただしい情報とメモリは、テ

ウラを作りだすのに十分なだけの量になろうとしている。
　彼はまず自らの内側に、作成すべきテウラのモデルを仮想的に作りだし、シミュレートすることにした。女性の染色体情報。タヒチという国土で育ちうる性格傾向。テウラの育った時代のタヒチの情勢……。情報という情報を総動員する。
　まず骨格が作成された。それに神経を張り巡らせ、内臓を、筋肉を、脂肪を付着させていく。それらを皮ひ膚ふで覆おおい、表皮のテクスチャを最高の画素ピクセル数で貼りつける。血液が血管を流れ、その他の分ぶん泌ぴつ物ぶつをも再現。脳に彼のもちうるテウラの記憶情報、そしてディーヴァで手に入れたテウラが知っているであろう様々な情報をインストールする。
　間もなくテウラは目覚めるのだ。目覚めたテウラが完全なものならば、次は具体的にディーヴァ内にテウラをレンダリングする番だ。そうして彼の愛は実現する。
　いや、まだだ。新たに創造されたテウラのために、彼はタヒチの風景を作ってやらねばならない。ディーヴァ全土をタヒチの楽園風景で塗りつぶす。
　愛で攻撃し、愛で騙だまし、愛で奪い、愛で殺し、愛で食らい尽くすのだ。
　さあ！　目覚めよ、テウラ！　そうして言っておくれ、全ての愛の象徴である言葉を。
　作業ワーク空間スペース内に作成されたテウラの瞼まぶたがゆっくりと開きだした。
　天使の降臨にも似た厳粛で神こう々ごうしい一瞬。
　さあ、言うか？　あの言葉を言うのか？　さあ、言ってくれ！　言っておくれ！
　テウラの可か憐れんな唇が開かれ、そうして待ちに待ったあの言葉がついに発された！
「ノアノア！」

おかしい。

とても、おかしかった。それは、感動の一瞬のはずだった。だが、彼の内には、なんの感動も湧わき上がらなかったのだ。なぜだ!?

メットから手に入れた自我と、彼の愛プログラムは混乱に陥おちいっていた。

なぜ、感動が生まれない!?　その理由を検索してみる。だが分からない。

もう一度、創りだされたテウラを確認してみる。その茶色味がかった髪の色も、小麦色の肌も、スラリとした体形も、そのあどけなさを残した顔の造形も。全て完かん璧ぺき。完璧なはずなのに！　なぜだろう。なんの感動もない。

彼は自分の内の記憶領域に保存された、彼の作成者たちの残した様々なテウラを呼び出してみる。笑うテウラ。怒るテウラ。優しく話しかけてくるテウラ。

かつては輝かしく、美しく、愛おしく見えていたはずのそれらが全く色あせて見える。

正直言って、つまらない。テウラがとてもつまらないものに見えている。

自分はいったい何をやっているのだ？　こんなつまらないもののために今まで自分は、活動してきたのか？　こんなつまらないもののために、他の三体のプログラム―シャルル、ダーク、ストリックランドは消去されてしまったというのか？　なぜだ!?　なぜだ!?

彼の中のあらゆるプログラムが活動目的を失って機能しなくなってきた。

ワームを遠隔操作するプログラムも。呑のみ込んだパーソナリティを分解・圧縮するプログラムも。プロジェクトの妨害者を撃退するプログラムも。妨害者から身を守るプロテクトも。何もかも。なぜだ!?　なぜだ!?　なぜだ!?　　なぜだ!?　なぜだ!?　なぜだ!?

（さめてしまったのよ）

ふいに声がした。それは自身の保存領域の内からの声だった。

彼は、声を発した存在に対し、検索をかける。それは金色の髪、青い瞳、すらりとした華きや奢しやな肢体を持った女性──先ほど吸収したアンジェラ・バルザックというパーソナルデータだった。

（あなたたちを動かすのは、愛プログラム、愛アルゴリズム。愛のままに活動するあなたは、愛を失ってしまえば、一切の活動を行うことができない）

アンジェラが冷たくそう言い放つ。即座に彼は、それを否定した。

そんなことがあるはずがない！　愛とは不変であり、不滅であり、無限であり、永久であり、真実であり、絶対であり、不可侵であり、そして無敵である！　そう強く訴える。

だけどアンジェラは寂さびしげに首を振った。

（違うの。残念だけど違う。愛はどんなに強く燃え上がっても何かちょっとしたきっかけで、一瞬で消えてしまう。どんなに不変だ、不滅だ、永久だ、なんて思っていても本当につまらない、ちょっとしたことでね。この現象を私たちは、さめるって言ってるのよ）

彼はその語ご彙いを検索する。確かにそんな言葉が存在した。だが、なぜさめてしまったのだ!?

（私はメット・マルティネスを尊敬し、親愛の情を抱いていた。でも、メットが実は犯人だって分かった時、その尊敬も親愛も瞬時にして消えてしまったの。私はこの心理的現象をスキャンし、プログラムを作った。そうして、あなたに呑のみ込まれる直前に構築し、あなたの内部で直接流したのよ。はじめ、もう間に合わないと思って絶望したけど、なんとか間に合わせたわ）

彼は信じられなかった。そして、もう一度作成したテウラを確認する。

ああっ！　なんてつまらない女！　なんてどうでもいい女だ！

こんなもののために活動する気には到底なれない！

同時に彼は絶望した。絶望は混乱に変わり、混乱は彼を恐慌状態にする。

自分は存在意義を失った。愛を失ってしまった存在は、どうやって生きていけばいい！

そんな彼をアンジェラは冷やかに見つめ、こう言った。しかし、その言葉は、彼ではなく、彼の内に取り込まれた別の存在へと向けられている。

（メット。聞こえている？）

彼の内側。記憶領域のはるかに深い場所から、それに応える声が返ってきた。

（ああ……私は失敗したんだな）

（あなたからは、色々なことを学ばせてもらったわ。出世のためならば、どんなことでもする。いいじゃない。私もそうするわ。でもね。あなたとは違う。悪魔に魂を売ったりはしない。私は私の力で上昇するわ。見ていなさい。私は、もっともっと高いところまで行ってやるわ。私だけの力でね）

彼の内側の声は、しばし沈黙し、こう返答した。

（いいだろう。やってみるがいいさ。だがね君は知るはずだ。楽園まで昇りつめるために、どれだけの地獄を通らねばならないかをね。はたして君は清きよいままでそこに行けるだろうかね？）

（行く。行ってみせる）

アンジェラの声は決然としていた。その言葉を聞き、彼の内側の存在が微ほほ笑えんだような気がした。

（そうか……。君はもう私の手を離れたのだな……。ならば迷わず進め。私の行けなかった場所まで行くがいい）

そこで声は実に晴れ晴れとしたものに変わった。

（君を楽園へ連れて行けなくてすまなかった。ここからは一人で行け！）

強く頷うなずくと、アンジェラは、指先を彼へと向けた。

彼女の手元にウィンドウが出現する。撃退プログラムの光り輝くウィンドウ。

その光を反射してアンジェラの瞳が微かすかに揺れ、煌きらめい

た。
（さあ、終わりにしましょう！　悪マ性ルソウフエトア！）
　アンジェラの指先より光弾が迸ほとばしった。
　光に撃うち抜かれ、ゴギャンと名付けられたプログラムの自我は初めての失恋とともに薄れ、消えていった。

エピローグ《ノアノア》

最後の疑似知性体、ゴギャンの消滅とともに、ディーヴァ各地で猛威を振るっていたワームたちは活動を停止した。

それと同時に中央保安局へのパケット送信攻撃もまた停止し、保安局エージェントの情報網も回復する。すぐさま、エージェントたちは活動を停止したワームの駆除活動と、ディーヴァ中に貼りつけられたオブジェクトやパケットデータの削除デリートを開始することとなった。それは、骨の折れる作業であったが、いずれ、そう長い時間もかからず、終了することとなる。

ゴギャン消滅の後、メット・マルティネスのパーソナルデータも消滅した。メットとアンジェラの会話ログからイヴァンの冤えん罪ざいは解かれ、解放されることとなる。

それとともに、メット同様、今回の事件の裏で動いていた人物が明らかになった。

宇宙ステーションのデータを隠いん蔽ぺいした情報部の上官。さらに事件の初期、人食いワームの存在や、ワームの正体が感染プログラムであることを市民に知らせないよう高官に進言していた二等エージェントがおり、その人物もまた黒幕の一人だった。

たった三人。ディーヴァ市民の多くを犠牲にした感染プログラム事件は、このたった三人によって引き起こされたのである。

消滅したメットを除く二人は、圧縮監禁刑に処され、おそらく二度と解凍されることはないだろう。

そして、トイフェルの正体であり、三人の人間を誘惑した人工知能は、強制的に消去されることとなった。ディーヴァ成立から百年以上、密かに市民を抹殺してきた悪魔の人工知能はついに消え去ったのであった。

◆

ザザザァ……。

ザザザァ……。

エメラルド色の海が水平線の果てまで続いている。

真っ白い砂を打ち寄せる波が濡らし、珊さん瑚ごの欠片かけらを砂浜に運んできていた。

潮風に吹かれハイビスカスの花が揺れている。

カモメの鳴く声と、波の音の他は何も聞こえない、静かな静かな浜辺だった。

「どうじゃな？」

砂の上に足を投げ出し、ぼんやりとするアンジェラにダイヤ形のパーソナルイメージをもった人物―イヴァン・アダモフが声をかけた。

「どう……って？」

アンジェラは物もの憂うげに言う。

「疑似知性体たちが作ろうとしていたタヒチの風景じゃよ。小さなマップじゃが、作ってみた」

「ふぅーん」

アンジェラは気のないように言ってみた。

解放されたイヴァンは、自分の冤えん罪ざいを解いてくれたアンジェラに、せめて何か礼がしたいと、このプライベートマップにアンジェラを招待したのである。

アンジェラは疑似知性体を倒し、人工知能トイフェルの正体を明らかにしたことにより、四等官から三等官に昇進していた。この短期間での出世は異例のことであり、アンジェラは中央保安局の高官たちの期待に応える形になっているといっていい。

だが、アンジェラは激しい戦いの後で、何か放心したようになっていた。

「……綺き麗れいね。癒いやされる」

ぽつりと、アンジェラは言った。それは嘘うそではない。

今回の事件でたくさんの市民が亡くなった。

　アンジェラも先輩であるメットが犯人であったという衝撃は消えていない。彼女の疲れた心にとって、この風景はなんだかひどく染み入る。
「そうじゃろ。わしもそう思う。プログラムを書き換えられる前の疑似知性体たちが作りたがっていたのは、こんなただ穏やかで美しい風景だったんじゃろうな。この風景は、わしら人間の原初の記憶じゃよ。いくら肉体を捨て、地上を捨てても、わしらの内にはこんな風景を求める心があり続けるのかもしれん」
　しみじみと、イヴァンが語る。
　そうなんだろうか。と、アンジェラは思う。だが、確かにこの風景を眺め続けていると、そうなのかもしれないという気にもなってくる。
「わしらは、メモリ次第であらゆるものを手に入れられるようになった。じゃが、こういうものを失ってしまったのかものぉ。メモリで全てが手に入る。だが逆にメモリがなければ全てが手に入らない。メモリを失うことを恐れ、恐れが競争を、諍いさかいを生む。それは、何かが間違っとるの。遥はるか昔、タヒチの民は裸の自分一人で生きておった。それで十分幸運じゃった。わしらはメモリを手にすることによってこういう楽園を失ったのかもの」
「イヴァンさん。説教くさくなってきたわね」
　アンジェラがそう言うとイヴァンは、カカカと笑った。
「でもね。イヴァンさん」
　アンジェラが水平線に目を向けたまま言った。
「裸の自分のままで楽園だなんて、あたしは思わない。楽園っていうのはね。じっとしてたってないの。自分で作るものなのよ」
　アンジェラは思った。
　ただ、何も求めず安あん穏のんと仮想空間に暮らす人々。メモリを持たずに下層階級でＡＩのように暮らす人々。メモリを求めるあまり誘惑に負けるメット。
　どれも間違っている。

　弱いからだ。ただ、そこにいるだけで楽園を求めようとする。だから弱くなる。踏みつけられる。卑ひ怯きような手段に出る。
　アンジェラの視線は遥はるか海の果てをしっかりと見つめていた。
　イヴァンは、そんなアンジェラをどこか眩まぶしそうに見つめ、言う。
「お嬢さん。なんだか大きくなったのぁ」
　そして、またカカカと笑った。
「でも」
　アンジェラはごろんと砂浜に横になった。
「今は休む。ちょっとだけ、ちょっとだけ休むわ。明日からはもう二度と休まないから。別にそのぐらいいいでしょう」
　そう言ってアンジェラは瞳を閉じた。
（あたし、大きくなったのかしら……）

　そんなことを思う。
（そうだ……メモリに余裕ができたし、バーチャルイメージをちょっとだけ大人にしようか。メット……と、まではいかないまでも、胸ももうちょっと大きくして……）
　が、そんなことを考えるのもなんだか面倒になってきた。
　波の音だけが聞こえてくる。
　アンジェラは、ただ波の音に耳を澄ませることにした。
　穏やかな穏やかな寄せては返す波の音。
　それに包まれ、アンジェラはなんだか赤ん坊にでもなったような気がした。
　波の揺り籠かごはアンジェラを包み込み、いつまでもいつまでも子守唄を唄い続けていた。

手代木正太郎
Syotaro Teshirogi

１９８１年。宮城県松島町出身。深夜のとんかつ屋アルバイト。最近、揚げ油で火傷ばかりの日々です。

小学館ｅＢｏｏｋｓ
楽園追放 mission.0

２０１４年10月31日　電子書籍版発行

者　手代木正太郎

作　ニトロプラス / 東映アニメーション

行人　丸澤　滋

集人　野村敦司

集　小山玲央

行所　株式会社　小学館

〒１０１-８００１

東京都千代田区一ツ橋 2 - 3 - 1

s-ebook@shogakukan.co.jp

本　２０１４年10月22日　初版第１刷発行

©SYOTARO TESHIROGI 2014
©東映アニメーション・ニトロプラス / 楽園追放ソサイエティ
ISBN978-4-09-451518-3

※ご注意
本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に関わらず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。
個人利用の目的以外での複製など違法行為、もしくは第三者への譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。